

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

～第41回公民館研究集会・令和7年度地域づくり市民活動研究集会～

記 録 集

開 催 日 令和8年2月15日(日)

会 場 松本市中央公民館(Mウイング)他

主催 松本市・松本市教育委員会・松本市地域づくり研究連絡会

主管 未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会

目 次

全体資料

開催要項	1
------	---

基調講演

ばらばら 多様性	だけど ×	ひとつに 協働	=	わくわく 新しい価値	3
----------------------------	-------------------------	---------------------------	---	------------------------------	---

分科会

第1分科会	みんなで進める物語！ 多様なアクターがつながる地域活動	49
第2分科会	みんなでつくる安心のまち ～暮らしを支える地域の仕組み～	53
第3分科会	子どもの経験値を増やすコミュニティ・スクール ～大人になるまでにできること～	66
第4分科会	みんなの「顔が見える」地域をつくろう！	84
第5分科会	身近にある資源に気づく、地域と共に活かす ～流れを知り、視点を変える～	88

実践事例の掘り起こし

活動実践事例一覧表	97
-----------	----

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

～第41回松本市公民館研究集会・令和7年度松本市地域づくり市民活動研究集会～

開催要項

1 趣 旨

高齢化・人口減少を始めとした社会状況の急速な変化や、人々の価値観・生活スタイルの多様化等を背景に、私たちの地域はいま、大きな転換期に直面しています。

担い手不足が顕著となる中、若者等を含めた多世代による活動の推進や持続的な地域コミュニティの形成が求められるだけでなく、個人が地域で自分らしく生きられる共生社会やウェルビーイングの実現を図るためには、地域と行政とが協力し、一体となって課題解決に取り組んでいく必要があります。

本集会は、各地で取り組みを展開する住民・職員が一堂に会し、身近な地域や生活・暮らしの課題について共に考え、互いに学びあうことで“気づき”や“つながり”を持ち帰り、再び地域の実践に生かしていくことを目的として開催するものです。

2 期 日 令和8年2月15日（日）

3 会 場 松本市中央公民館（Mウイング）他 （松本市中央1-18-1 電話：32-1132／FAX：37-1153） ※第3分科会 会場：松本市立旭町中学校（松本市旭 3-7-1） ※第5分科会 会場：サンプロアルウィン（松本市神林 5300）

4 主 催 松本市、松本市教育委員会、松本市地域づくり研究連絡会

5 主 管 未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会

6 日 程

9:00	9:30～9:45	9:45～11:50	11:50～13:00	13:00～16:30
受付	開会式	全体会（基調講演）	昼食	分科会

7 開催内容

(1) 開会式

(2) 全体会（基調講演）

ア 演 題 ^{ばらばら}多様性 × ^{だけど} ^{ひとつに}協働 = ^{わくわく}新しい価値

イ 講 師 早坂 淳 氏（長野大学社会福祉学部教授）

ウ 内 容

一度きりの人生です。幸せになりたいですね。自分らしく（人と違うかたちで）生きすることも幸せですし、つながりの中で生かされることもまた幸せです。では「幸せ」を地域社会を単位にして考えてみたらどうでしょうか。そこで暮らす人が自分らしく生きるばらばら（多様性）にあふれる地域がいいのか、それともひとつにつなが

る（協働）地域の方がいいのか。この問いに、対話と共感をテーマにして、一緒に納得のいく答えを探す講演会です。

(3) 分科会

	テーマ
第1分科会	みんなで進める物語！多様なアクターがつながる地域活動
第2分科会	みんなでつくる安心のまち ～暮らしを支える地域の仕組み～
第3分科会	子どもの経験値を増やすコミュニティ・スクール ～大人になるまでにできること～
第4分科会	みんなの「顔が見える」地域をつくろう！
第5分科会	身近にある資源に気づく、地域と共に活かす ～流れを知り、視点を変える～

8 集会の配信について

集会に関連する動画を編集し、後日 YouTube にて配信する予定です。

9 参加申込について

2月6日（金）までに、専用フォーム（LoGo フォーム）へお申し込みいただくか、最寄りの地区公民館、または集会事務局（中央公民館）へ電子メール、電話、FAX、窓口でお申し込みください。

※ 申込み時の確認内容：氏名／住所／電話番号／参加希望分科会

※ 手話通訳、要約筆記通訳、託児保育が必要な方は参加申込み前にご相談ください。

【集会事務局】

〒390-0811 松本市中央1-18-1 松本市中央公民館（Mウイング）

電話：0263-32-1132／FAX：0263-37-1153

E-mail:gakushu@city.matsumoto.lg.jp

10 その他

松本市営中央駐車場（Mウイング北棟）は有料です。公共交通機関等での参加にご協力ください。

基 調 講 演

【テーマ】 ばらばら だけど ひとつに わくわく
多様性 × 協働 = 新しい価値

【講 師】 長野大学社会福祉学部 教授 早坂 淳 氏



↑松本市公民館公式チャンネルで動画をご覧になれます。

(講師プロフィール)

筑波大学大学院一貫制博士課程人間総合科学研究科学校教育学専攻、筑波大学教育学系準研究員、長野大学福祉学部講師、准教授を経て、2020年4月より現職。「協働」「学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）」「対話と共感」をキーワードに、地域と学校による協働はいかにして可能か、「多様性（ばらばら）を協働（ひとつに）するには？」をテーマに研究。長野県コミュニティ・スクールアドバイザーとして、多くの講演会や研修を実施。

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました、長野大学の早坂淳と申します。

今日は松本市の皆さんと一緒に、このスライドに出ているテーマ（「多様性×協働=新しい価値」）を考えていきたいと思います。

「多様性」は今、色々なところで聞かなくなっているワードになっていますが、同時にその扱いには難しさがあります。例えば、外国人住民の方を受け入れる際の私たちの振る舞いの仕方、そこに多様性との付き合い方のようなものが、もろに表れたりします。世界的に見ても、外国人を排斥する動きは、多くの国で見られるものになっています。それくらい私たちは、自分と違うものと共にあるということに、非常に難しさを感じる生き物なのだと思います。



写真：早坂 淳 氏

この「ばらばら」ともいえる多様性を、どのような形で組み合わせると、私たちは一つになっていけるのか、そこを今日は皆さんと一緒に考えていきます。もし、本当に世の中にある多様性をうまく組み合わせることができて、私たちが緩やかに一つになることができれば、その一番奥にあるゴールは「世界平和」だと思っています。

多くの価値観が世界にありながら、その価値観を一つに固めてしまうのではなく、かといって、つながりのない本当に「ばらばら」の状態に放置するのもではなく、「ばらばら」を緩やかにつないだときに、私たち人類、ホモサピエンスは、これまでにたくさんの面白い価値をこの世界に生み出してきています。

今日はそういったことを、教育学を中心に、社会学、心理学、文化人類学あたりをひも解きながら、皆さんと一緒に考えていく時間としたいと思います。

始める前に一つお伝えしておかなければいけないことがあります。それは、お手元にある資料に、今日の講演の内容が、具体的には示されていないということです。大体このような基調講演では、その講演で使用する資料・スライドが余すことなく配布資料として渡されるも

のですが、私の講演スタイルは、事前に作ったものをそのままお話しするという方法を取りません。

いくつかお話ししたいテーマを決めておいて、お話ししていく中で、皆さんの表情やうなずき、スマートフォンで写真を撮っていただく動きなど、そういった反応を受け取りながら、その場で資料を組み替えていくやり方をします。つまり、こちらが言いたいことと、皆さんが聞きたいことをうまく合致させて、一緒に資料を作っていく、そのような講演にしたいと思っています。

そのため、資料を事前にお配りすることはできませんが、講演が終わったあと、皆さんにお持ち帰りいただくことはできます。また、作成者（長野大学：早坂）を明示いただければ、どのようにご活用いただいても構いませんので、スマートフォンで撮影していただいても全く問題ありません。どのような形で使っていただいても結構です。皆さんのまちづくり、あるいは学校教育や社会教育の振興に役立てられるのであれば、この資料をいかようにもお使いいただければと思います。

早速ですが、皆さんに質問をさせていただきます。これは質問の体を成していますが、私が普段考えていることを、自問している質問ともいえますので、答えがあるわけではありません。むしろ皆さんから答えを聞きたい、そのように思っています。

今日はクエスチョンが、多いと10数個出てきますが、一つ目の質問はこちらです。

Q1 まちづくりって何だろう？

この大会のタイトル「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い」にもある「まちづくり」とは一体何でしょうか。何をすることが「まちづくり」と呼べるのか、この質問から今日は始めます。

資料を皆さんと一緒に作りながら、「まちづくり」の答えを、それぞれの方にお持ち帰りいただける、そういった時間になるといいと思っています。

ちなみに、「まちづくり」について、私の思いを少しお伝えしておきます。

私は、上田市を中心に、様々な人が緩やかにつながりながら、新しい「わくわく」を生む活動に端から顔を出し、その実践を理論化したり、学問的な理論を武器として現場の皆さんにお届けしたりということを、日常的にやっている人間です。

上田市のほか、いくつかの自治体で住民自治組織の立ち上げに関わり、住民自治組織をより盛り上げていくにはどうしたらいいのか、たくさんの人を巻き込みながら、みんなで運営していくには、どういったやり方があり得るのか、そのようなことを日々、地域の方と一緒に考えています。

そうした私の立場からいうと、「まちづくり」は、橋を架ける行為にすごく似ているなど思っています。これはまちづくりではなく、「教育」と言い換えても、全く同じことがいえます。

橋、つまりそれがないと渡れない場所に、私たちは橋を架けます。こちら側から向こう側に橋を架けるわけですね。

橋を架けるときは、まず、今自分たちがどこにいるのか、これが分かっていると橋は架けられません。その上で、どんなまちを作りたいのかという未来と、今私たちがどこにいて、ここからどこに行きたいと願うのか、この二つが揃うと、最低限、橋の始まりと終わりを決めることができます。

「まちづくり」や「教育」は、まさにこの橋を架ける行為そのものだと思っています。今、私たちがいる現在から、ここから先の松本市を考えたとき、橋を架けます。

ただし、橋を架けただけでは意味がなく、渡りたいと思う人を増やしていく必要があります。つまり「願い」が必要なのです。

今、私たちはここにいる、そしてこれからの未来をこう願う。だから橋を架けますが、そちらの未来に行きたいと思う人をたくさん増やす必要があります。そう考えると、今私たちがどこにいるのか、この認識がある程度揃ってないと、「まちづくり」はできません。「教育」もばらばらになります。

Q2 どちらの途（みち）を選びますか？

二つ目のクエスチョンです。今、私たちの目の前には大きな分かれ道がある、よくそのようにいわれますが、皆さんだったらどちらを選びたいか、教えていただければと思うのです。

二つの道は、こんな分かれ道（30 ページ上参照）を想像してみてください。

どちらの方角を選んでも、おそらくそこには幸せが待っています。どちらでもいいではないかと思うかもしれませんが、かなり大事です。

左側の赤い道は、強いリーダーが導いてくれます。そのリーダーが何でもちゃんと決めてくれるのです。だから、そこにいるメンバーは共通の見方・考え方のもとで、リーダーの背中を見ながら追いかけていけばいい。

リーダーの判断は非常に合理的なので、元氣よく返事をして付いていけば、そこにはおそらく安定した未来が待っているのだらうと思います。

かたや、右側の青い道には、強いリーダーはいません。強いリーダーがいない代わりに誰がいるかというと、自立した市民がいます。一人ひとりが自分の頭で物を考えようとします。ゆえに何が起きるかという、多様な見方、考え方がたくさん出てくるのです。

この多様な見方・考え方が、今日のキーワードの一つ、いわゆる「多様性」です。多様性がある程度ないと、新しいアイディアは生まれてきません。ただし、多様性が強くなりすぎると、私たちはまとまりを欠きます。

このバランスの間で、私たち人類は何とかここまでやってきた。人類がサルから分岐した約700 万年前から、世代でいうと、私たちのお父さんお母さんからさかのぼること約20 万から30 万世代前から、私たちは多様性と秩序のバランスを取りながら生き残ってきたわけです。

納得できる合意形成がとても難しい道です。みんなが好きなことをいうと、議論はなかなか集約していきません。物事が決まらず、対話ばかり続けられると、だんだん私たちはイライラしてきます。結局どうするのだ、私たちはどうすればいいのか、誰か決めてくれ、と言いたくなるときがあります。

強いリーダーをついつい求めてしまいますが、青い道にはリーダーはいません。結局、青い道は、対話という荒波を覚悟しないとイケません。「民主主義」というやつです。

私たちは、みんながそれぞれ違いを持って生まれ、その違いを拡大するように成長していきます。その違いをうまく生かせる地域にはきっと輝きがあるけれど、逆に対話を諦めてしまうことで、対話に疲れてしまうことで、一気に赤い道に流れてしまうこともあります。

今、日本を含めて、世界の中では赤い道を選ぶようにする国や地域が、多くなってきていると私は考えています。強いリーダーにお任せして、考えることをやめて従っていく未来は、もしかしたらうまくいくかもしれませんが、私はあまりその未来に楽観的な思いを抱いていません。

人類の歴史をひも解いてみると、私たちホモサピエンスは、強いリーダーにお任せをして考えることをやめたときに、歴史上とてつもなく悲惨なことを繰り返してきている生き物でもあります。

つまり、考えるのをやめてはいけません。それは分かっているのですが、対話は難しいですよ。そういった難しさがある中で、何とか対話を諦めない皆さんが、今日お集まりなのではないかと思います。

ちなみに哲学でいうと、赤い道を主知主義

(Intellectualism) と呼びます。主知主義の考え方の基本は、いい仕組みが整えば、人間は幸せになれるというものです。そのため、仕組みが大事です。人間がどう考えるのか、どう判断するのかではなく、仕組みのもとで、人間が自動的に適切な判断や選択ができるようにしてあげる。これを主知主義と呼びます。

かたや青い道は、主意主義 (Voluntarism) と呼びます。一人ひとりが、地域のことを自分ごとと捉えて、ボトムアップで物事を変えていこうとするやり方です。

皆さんは、今の段階でどちらの考え方により近いのか、そして今日、話を聞いた結果、どちらの道が松本市にとってより適切とするのか、その辺りを一緒に考えていきたいと思っています。

本日の話の流れ

このあとの流れですが、一つ目に「多様性」の話から始めます。私たちが大事だという多様性、しかし扱いが難しい多様性、これは一体何なのかという、そもそも論から考えます。

時間軸でいうと「今」の話をします。橋でいえば、架ける手前側の話です。ここが決まらないうと、未来に向けて橋を架けようがありません。今、私たちがどこにいるのかということ、「多様性」をキーワードに一緒に考えます。

二つ目に「協働」の話をします。私は長らくこの協働を理論的、実践的に研究してきた教育

学者の一人です。協働という言葉は色々なところで聞きますし、行政にも協働に関わる部署が色々なところにあります。

協働とは一体何なのか。「ばらばら」を一つにまとめてしまうことなのか。それとも、「ばらばら」をある程度残したまま、緩やかにつないでいくことなのか。その点を、未来を軸にしながら考えます。

これら現在と未来の話が整うと、橋をどこからどこに向けて架けるかのビジョンを持つことができます。ただ、先ほどもお伝えしたように、橋には渡りたいと思わせる魅力がなくてはなりません。そこを渡ってみたいと思う人が増えないと、橋を架けた意味がありません。

三つ目は、新しい価値の橋を架けるということ、私たちの「願い」をテーマに、一緒に考えていきたいと思っています。

テーマ① 現在：多様性（ばらばら）

多様性を現在の時間軸で考えてみましょう。「ばらばら」は、いいことなのでしょうか？それとも、できるだけ「ばらばら」でない方がいいのでしょうか？

まず、多様性という考え方については、いくつかのタイプがあります。ひと言に多様性といっても、その内側にたくさんの意味の多様性がごちゃ混ぜになっています。

多様性について、多くの方が最初に思い浮かべるのは、「統計的な多様性」です。ある種、表層的な多様性で、男なのか女なのか、若いか若くないのか、何人なのかといったように、データとして処理できるタイプの多様性です。

私は最近、男女共同参画の仕事も色々やらせてもらっていますが、男性ばかりの場所に女性を入れるだけでは、この統計的な多様性を少し動かしているだけに過ぎません。大事なのは「女性か、男性か」ではなく、女性の物の見方を持っている人の発言を、私たちがいかに取り



入れるかなのです。

例えば大学教員についても、積極的に女性を雇用しようという動きがありますが、女性を雇用するだけでは意味がありません。女性ならではの観点、男性だけでは見えないものを、聞こえないものを聞かせてくれる、そういう人を取り入れる必要がある。したがって、男性っぽくない物の見方をしてくれる人であれば、場合によっては男性でもいいのです。

最近の脳神経科学の研究で、物の見方は、神経発達によっても決まることが分かってきています。この会場にいる皆さんも、神経学的には、かなり「ばらばら」なはずです。少し試してみましょう。

皆さん、昨日の夕飯を思い出してください。何を召し上がったでしょうか？昨日はまだ大丈夫ですよ。2日前はどうでしょうか？この辺から怪しくなってくる方がいらっしゃいますが、今、なぜ質問をしているかという、私たちは記憶を呼び覚ますそうとするときに、身体に特徴が出ます。

目を上に上げる方や思いきり上を向いている方が、何人もいらっしゃいました。このような動作をする方は、上の方に仮想モニターのようなものを置いて、視覚的に記憶を呼び覚まそうとしています。一般的にこういう方を「視覚優位」といいます。

一昨日の食事を思い出そうとして、上を向いた方の多くは、目で見て情報をインプットしようとする力がとても強い。逆に、今日この講演で、私がスライドを使わなかった場合、手元に概要の資料もなく、しゃべり続けた場合、多くの方は私が言うことを拾えなくなります。

耳からの情報が受け取りにくい。学校の学習面、生活面で指導に難しさのあるお子さんの多くがこのタイプです。学校の授業では先生がよくしゃべりますが、耳からでは指示が通らないお子さんが、教室には結構な割合でいます。

上を向かなかった皆さんは何なのかということですが、ちょっと視線を落とす、あるいは

どこを見ているか分からないような顔をされて、重心を少し下に下ろすような動作をされる方がいらっしゃいます。この会場でいうと3割ぐらいがそういう方だったかと思いますが、多くは「聴覚優位」の方です。耳からの情報がインプットしやすいため、もしかしたらそういった方は、ラジオが好きだったりするかもしれません。

私は、典型的な「視覚優位」の特性を持っているため、音声情報というのはほとんど入ってきません。ですから、小学校、中学校では勉強が全然できませんでした。本当に勉強ができなかったのも、自分は頭の悪い子なのかなと思っていたのですが、違うのです。私の特性に合った授業が、あまりなかったということです。見せていただければ分かったのです。そのため今日の資料は、神経多様性的に、どの特性の方が会場にいても、分かるように作っています。

もう一つのパターンをいうと「体感覚優位」の方がいます。思い出そうとしたときに、体を触り出した方がいますね。あごを触ったり、腕を組んだり、体に感覚刺激を与えることで記憶を呼び覚まそうとする人がいます。

小学校の低学年に体感覚優位の子がいると、授業中じっと座ってられません。動かないと頭が回らないからです。だからずっと座って学習することは、特性が体感覚優位である人には、あまりいいやり方ではないのです。

神経の発達の仕方によって、私たちは世界の見え方を変えていきます。これを「神経多様性」と呼びます。男か女かは関係ありません。統計



学的に、男性の方が視覚優位の人が多いといわれていますが、それよりも個人差の方が圧倒的に大きいのです。

私たちの神経、大脳と首の中を通っている中枢神経と体中の末梢神経、この神経のネットワークで私たちは世界の何かを受け取って、何かを受け取らないようにできています。同じものを見ても、同じものを聞いても、同じものを食べても感覚が違うのは、この神経多様性によるところが大きいのです。

神経多様性にも一部被りますが、同じものを見ても、感じ方、見方、考え方が違う、この違いを「認知的多様性」といいます。

男女共同参画でいうと、日本は男社会で、男ばかりで担われていますから、統計的多様性を増やすこと、女性を増やすこと自体にも意味がある国です。ただ、女性を増やすだけではどこかで頭打ちになります。大事なのは、認知的多様性を広げていくことです。

男性でもいい。女性だけでもいいかもしれない。しかし通常、認知的多様性は、性別や生まれ持った性格、神経多様性など、色々なものつながりながらできていくので、今日、皆さんにお話するときの多様性のイメージは、認知的多様性をイメージしてもらおうとよいかと思います。

私たちは、年齢が同じでも、性別が同じでも、国籍が同じでも、世界の見え方や考え方が異なることがあります。生かさなくてはいけない違いは何かというと、この認知的多様性なのだという事です。

神経多様性については、脳神経科学的には、誰一人同じ人間はいないということがいえます。元々「ばらばら」なのです。元々「ばらばら」な人間が力を合わせることは、難しいに決まっています。

まず、多様性は、元々そこら中にあるものだという事を、皆さんとの共通認識にしておきたいと思います。

前提① 多様性はイノベーションに不可欠

認知的多様性をこれから皆さんと考える上で、分かりやすい話し方として、結論から述べるというやり方を取ってみたいと思います。

ここからは、「多様性は必要だ」という仮説に基づいてお話をします。なぜ多様性が必要かというと、イノベーションに不可欠だからです。イノベーションというのは、今までなかった新しい価値や仕組み、制度を生み出すことです。

私たちの国は、課題先進国といわれて久しいですが、もしかしたら、「そんなことはない」という方がいるかもしれません。松本は、中核都市の一つですから、人口減少問題について、まだそれほど大きな危機感はないかもしれない。上田や長野の皆さんとお話をすると、やはりまだ先のことだと思っている方が多い。

一方、南信の方、上伊那・下伊那に呼ばれて仕事に行くこともありますが、そこはもう本当に強い危機感を持っています。平谷村などは人口370人です。どうやってその人口規模で世の中を回していくのか。もう誰一人欠かすことのできないプレーヤーとして、全員が動かないと回っていかない。

人口が多くなればなるほど、私たちは誰かに何かをお任せしたくなってしまいます。しかし、これからは松本市も例外なく、人が減っていきます。人が減っていくということは、これまでと同じことはもうできない、ということです。

私たちは、人が減っていくというと、生産年齢人口の減少や税収の低下といった、ある種ネガティブなイメージを持ちがちですが、もし今まで以上にイノベーション、つまり、新しい価値を地域で生むことができれば、人が減ること自体は、実はそれほど問題ではないといえるかもしれません。

新しい価値をいかに頻繁にその地域で誕生させるか。そこに必須の要素が「多様性」だということを、前提として共有しておきたいと思

います。

理論的なバックグラウンドはいくつもあります。最後に参考・引用文献を載せておきますので、もし、なぜイノベーションに多様性が必要なのだろうかと思った方は、文献をご覧くださいいただければと思います。

十分条件ではないため、多様性があればイノベーションが起きるわけではありませんが、イノベーションがあるところには、必ず多様性があります。まず、ここを押さえて、多様性は私たちがうまく扱えるように成長しなくてはならない何かだ、というところを、一つ目の前提にします。

少しだけ理論の話をします。ここまでの話にすごく納得している方もいれば、新しい価値は専門家を集めて、一部の人たちだけで生み出して貰って、他の人たちはそれを享受するだけでいいのではないかと思われている方もいるかもしれませんので、若干ですが理論を付け足します。

なぜみんなが「ばらばら」だと新しい価値が生まれるかというと、「イノベーション普及理論」と呼ばれるイノベーションに関する研究で分かっていることでは、理由が三つあるのです。

自分と同じ人間だけで占められていると、新しいアイデアは当然生まれません。自分以外の人みんな「ばらばら」だったとき、合意形成や話し合いが難しくなります。しかしイノベーションは、たくさんの人が「ばらばら」なほうが、圧倒的に生まれやすいのです。

その理由の一つ目は、「探索」という言葉で説明されます。要するに、あちら向いている人もいればこちら向いている人もいて、そちらを向いている人もいれば、目をつぶっている人もいて、といった形で、認知的多様性が多様であればあるほど、見る方向が「ばらばら」になります。

誰かが見ている先に答えがあるかもしれない、ということなのです。これを単一の価値観

で考えようとすると、そこから見えるものしか見えないため、正解がその視野に入っていない場合、物事を良い方向に変えることができません。

民主主義が面倒なのは、多様性がうまく扱えないからですが、民主主義の一番の利点は、多様な価値観を取り入れられることに他なりません。探索機能が飛躍的に上がります。

変な人がいればいるほど変な方向を見ていて、そちらに正解があった場合、物事はうまくいく。まちづくりは、「若者・馬鹿者・よそ者」によって牽引される、という言葉がありますよね。まさに、この探索機能を上げるということなのです。

地域に住んでいる方は、その地域のことをよく知りすぎているがゆえに、半ば諦めの感情を持つことがあります。「もう何もできることはないよ」「昔からこうだったし変わらないよ」と言われる。私よりも先輩世代の方、南信の方、これまでご縁をいただいていたたくさんの方に言われました。

それくらい何か物事を変えることは、やはり難しいのだと思うのですが、そこによそ者、あるいは馬鹿者、あるいは若者が入ってくると、「そんなことないんじゃない?」「できるんじゃない?」と言い出す人が現れるのです。

この探索機能がとてもとても大事です。要するに、自分と違うことをいう人間がいた方が絶対いい。

二つ目は、それをうまく結合させて、みんなの意見にできるかどうか。ここが問題で、多様性がつまずくのは、実はほとんどの場合、この結合の部分です。多くの意見がそこら中にあるにも関わらず、うまく拾えない、拾えたところでうまく一つにまとめることができない。

しかし、多様な意見をうまく、既にある中心的な考えにインプットすることができれば、そこには教育学でいう「共同知」が生まれます。個人の頭の中だけに入っている知識ではなく、私たちが集団で作りに上げていく「共同知」という考え方。それは誰か一人が作るわけではなく、

そこにいるみんなのアイデアが余すことなく寄せられて、化学反応が起きた結果生まれる何かです。学問と言い換えても、文化と言い換えてもいいかもしれません。

私たち人間はそうやって自分が得た知識や技能を他の人と共有することで、みんなの経験、みんなの知識、技能というように結合する力が、他の動物よりもと極めて秀でている。それが私たちの特長ですが、これが難しい。なかなか結合しないのです。女性でも子どもでも、基本的に少数派の意見は、結合まで届きません。マジョリティーの既得権益層が耳を傾けないからです。

更にいうと、結合して終わりではなく、今度はそれを社会実装するステージが来ます。つまり、色々なアイデアがあることを「探索」で見つけ、その見えた世界の中で私たちの正解はどれだろうかと議論をして、対話を諦めず「結合」させたら、今度はそれを制度・仕組み・実践として落とし込んでいかなければいけないのです。この段階にも、実は多様性が不可欠だといわれています。

いわゆる行政的な考え方というのは、みんなの意見を「探索」して、「結合」するところまではとても得意です。しかし、社会実装するときは、実装する当事者が動かないと駄目なのです。行政の皆さんがいくら旗を振っても、地域の人が「それ、行政でやってよ」といっている地域は何も始まりません。

この実装のレベルにも多様性が必要です。行政的な感覚を持った人も必要だし、まちの中でこの地域をどうするのだと、自分事になっている人も必要です。

ということで、前提の一つ目、新しい価値を生むときに、多様性はないと駄目なのです。言い方を変えれば、多様性を排除する地域は必ず縮小します。息苦しくなります。息苦しい地域に新しく人は来ません。

私たち人間は、実は多様性がすごく苦手な生き物としてプログラムされています。多様性を怖がることで私たちはここまで生きながらえてきたのです。

どういうことかということ、人間のすごく大きな機能の一つに、物事を分類するということがあります。何かを見たら、こいつは敵なのか味方なのかということ、判定せずにはいられない生き物なのです。この人は優しいから味方かなとか、この人は敵なのかなとか。

この「分類」という癖を、私たちはやめられません。ニュートラルに物事を見られないのです。一度敵認定されてしまうと、そう簡単に味方には戻れません。だから私たちは、気を使ってコミュニケーションを取ります。敵ではないことを伝えるために、表情を変え、言葉を変え、ということをとくさんやるわけです。

なぜ分類が必要かということ、私たち人類が生き残ってくる中で、常に外には脅威があったからです。つまり、本当に敵がいたのです。

縄文時代までは非常に豊かで、私たち人類は持続可能な形で物事を積み重ねてきました。縄文時代は、皆さんが社会科で習ったように、約1万2千年続きます。人類が一つのものの考え方、あるいは集団のあり方・価値観のもとで、それだけ続いたのは縄文時代だけです。多くを搾取せず、仲間とともにギブ・アンド・ギブの精神で、私たちの先輩たちはずっと生き残ってきました。

それが弥生時代に入ると、農耕と一緒に戦争が入ってきます。戦争は、私たちの外の人間が味方なのか敵なのかの分類が、究極に大事になったことを教えてください。味方だと思って近づいて、敵だったらやられてしまいますから。

そのため、私たちは多様な人間に対して、自分と違う、あるいは自分たちと違う人に対して、まずは警戒するというプログラムがなされています。そのプログラムの中で約700万年生き

残ってきたために、多様性は基本怖いものなのです。

しかし、先ほどお話ししたイノベーション理論でも分かるように、多様性がないと新しい価値は生まれません。つまり、この怖さを克服する必要があるということです。体が怖がるといえいいのでしょうか、細胞の一つひとつは多様性に向き合うと、「自分と違う。怖いな」と思ってしまう。そこを意思の力で「大丈夫、敵ではないのだ」と持っていく必要があります。

こうして私たちは、自分たちの味方の集団と敵の集団を分類しながら、脅威から身を守る形で生き残ってきた。だから多様性がやはり苦手なのです。

バニスター効果

皆さんにぜひ覚えて帰っていただきたい二つのお話をして、多様性の話を終わります。

一つ目は、社会心理学で「バニスター効果」と呼ばれるすごく有名な理論です。聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれません。

分かりやすいところでいうと、フィギュアスケートに4回転半ジャンプというのがありますが、歴史的に「人間にはできない」と思われていた時期が結構あったのです。でもあるとき、4回転半ができる人が現れると、そのあと、できる人が量産されるという考え方があって、それが「バニスター効果」ですね。

これは何が起きているのか。何かをやることで、私たちの身体能力が上がるのか。そうではなくて、私たちは最初から4回転半が飛べるのです。だけど、限界を勝手に決めているのです。私には無理だと言ってしまう、思ってしまう。

そして、それが実は「まちづくり」においても「教育」においても、一番の壁です。できるはずのことをできないと諦めている人たちが、この国にはすごく多い。そうではないのに、やってみなければ分からないのに、なかなか一

歩が踏み出せない。限界は常に私たちの内側にあります。その壁を取り払わないといけません。

最初の人を「ファーストペンギン」といいます。ファーストペンギンを見かけると、そのあとのペンギンは、十万羽だろうが何十万羽だろうが付いてきますが、最初の1羽が崖に飛び込むまで、ペンギンたちは飛び込みません。飛び込んだら死んでしまうかもしれないから。しかし大丈夫なのです。駄目などということはない。

まちづくりにおいてすごく大事なものの、生涯学習において究極に私たちが磨かなければいけない感覚は、この「バニスター効果」です。

何なら私たちが地域のファーストペンギンになればいい。最初は誰もついてこないかもしれないけれど、一人目が動き出せば、きっと付いてきてくれます。その一人目は大体、馬鹿者か若者ですが、皆さん年齢問わず若者ではられますから、地域のしがらみや固定的な価値観にとらわれず、新しいアイディアを思い切って発言する、あるいは行動に移してみると、見ている人が必ずいます。

この「バニスター効果」は、多様性においてすごく大事なのです。つまり、色々な人がいると「バニスター効果」が起きやすいということです。誰かが変なことをやっているのです。あんなことをやっては駄目だと思っていたけど意外と面白そうだな、この地域のタブーだと思っていたことを、よそから来た人がやってしまったけれど、意外とそんなことないのかな、と。最初の一人の背中を見るだけでいい。多様な人が地域にいればいるほど、それは起きやすくなります。

インドの寓話（群盲象を評す）

インドのおとぎ話です。多くの方が聞いたことのあるお話かもしれません。

インドはとても広いですね。文化圏的にも多様ですし、言語も複数あるし、宗教にいたって

は、仏教、ヒンズー教、それ以外の宗教もあって、価値観はまさに多様な国です。だからこそ、インドで繰り返し語られている「群盲象を評す」は、私たちが多様性と向き合う上で、外すことができないお話になるはずです。

群盲、つまり目が見えない視覚障害を抱えた方の集まり、6人の目が見えない方がいて、そこに誰一人見たことがない、聞いたことがない、触ったこともない象が現れるというお話です。

目が見えないので、群盲は一人ずつ、自分の今いる立位置から触れる場所を触って、「象さんってこういう形なんだな」と言うのです。鼻を触っている人は、「象は太いヘビのような生き物だな」と言う。牙を触っている人は、「何言っているのだ。ヘビではなく、これは太い槍のような生き物ではないか」と。お腹を触っている人は、「何言っているのだ、馬鹿なのか君たちは。象は壁のような生き物だよ」と。足を触っている人は「木の幹のようだ」と言うし、尻尾を触っている人は「ロープのようだ」と言うわけです。

目が見えない人はあくまでもメタファーで、一人ひとりが私たちのことをいっています。我々人間は、自分が見えているものが客観的に正しいと過大評価しがちな生き物です。お腹を触っている人にとってはそれが現実なので、ヘビのような生き物だと言われても、そう簡単には受け入れられません。

しかし、これだけ人々の言っていることが違うということは、象が思っているよりも大きく、複雑なのだということに、たどり着かないといけませんね。

そして、私たちが触れられる象の範囲が限られているということは、自分が触れられない部位は、誰が触ってくれるのでしょうか。

この立位置は、なかなか動かせないのです。自分の立場、経験、価値観、生まれ持ったの神経多様性や認知的多様性が、私たちに今の場所から動くなという指令を出します。そこから見えるもので判断しろというのです。

ただ、人間には目が2個しかなく、前にしか付いていないため、当然後ろは見えません。それと同じように、象のように大きいものになると、全体像を一人で見ることができないのです。

このインドの「群盲象を評す」は、実はいくつかのバリエーションがあって、このあとにいくつかのオチがあるのです。私の大嫌いなオチと大好きなオチを、ちょっとお教えしたいと思います。

大嫌いなオチは、ここに目が見える王様が登場するというものです。嫌いなのですよ。王様が群盲に教えるというのですね。みんな部分的にしか合っていない。私は全部見ている。だから象とは何かを教えてあげようとするのです。

全部が見える人間などいるのか。時々、全部が見えているかもしれないと思うような人に出会うことはありますが、その人にしたところで、一部分しか見ていません。

そう、王様なんていないのですよ。私たちは、時々、誰かを王様に仕立て上げ、その人に全部を見てもらって、その人に判断してもらうということをやりがちです。しかし、王様だって人間です。一部しか見てないはずなのです。

私が大好きなほうのオチは、群盲が対話を始めるというものです。ただ、一筋縄ではいきません。みんな言うことが違うので、誰が合っているのだという話になるわけです。

そこで、「協働」の問題が出てきます。つまり、この「ばらばら」を生かさないといけない。

例えば、声の大きい群盲が「おーい、こっちに来てしろよ」と言って、みんなが集まってお腹を触ったら、「象さんは壁だね」で話が終わってしまいます。これはよろしくない。確かに壁っぽい一面もあるけれど、象の特徴はもっと違うところにもあります。であれば、「ばらばら」に、色々な人が色々なところを触ってくれる状況は、喜ぶべきです。

ただ、ここからの対話をどうするかが問題です。合意形成はどうするのだろうか。多数決なのか。ここに難しさが出てきます。おそらく、ま

ちづくりや社会教育、学校教育、色々な方の意見を取り入れながら、みんなで物を決めようとされている皆さんが、日々感じる難しさはこれですね。

この合意形成がうまくいかないと、最悪、戦争になります。私の見えている世界が正しいということを、力で示そうとする最悪の状況です。

けれど、群盲たちは諦めません。どこかできっと合意ができるはず。そのためには、自分の見えている世界が一部なのだというのを、自覚しないといけないということです。他のものの見え方があるのだという当たり前のことを知る。

その上で、「あなたからは何が見えるの？」と、自分ではない人に呼びかけること、それが対話の一丁目一番地です。「俺はこう思う」も大事だけれど、自分が見えてないものを教えてくれる人、自分とは価値観の違う人の中に答えを探そうとすること、それが私の大好きな「群盲象を評す」のオチです。

結論：独りでは象の全体像を知りえない

多様性の結論からいうと、一人では象の全体像は知りえません。一部しか見えないということですから。これから先、私たちが生きていくときに、何が正解なのかが分からないときであればあるほど、多様性を奨励していかないといけない、盛り上げていかないといけないということです。

男女共同参画の流れは、今まで男性的な認知によって意思決定がされていたこの社会を突破する、非常に有効な道の一つだと思います。

もちろん、子どもについてもです。子どもというのは言葉が不十分ですが、学校の先生も日頃、子どもの声をよく聞こうと言ってくださるし、子どもの権利条約にも子どもの意見表明権が明記されていますよね。

しかし、子どもの意見はなかなか取り入れて

もらえない。子どもたちの言葉の表現力まだまだだからです。

子どもたちは、我々大人が失ってしまった感性で世界を見ていくものの見方をしてくれます。これはすごいことなのです。私たちは頭でっかちです。知識や経験が多くて、物事をピュアには見る事ができません。

しかし、幼稚園、保育園、小学校、中学校の子どもたち、高校生も入れてあげてもいいかもしれないかもしれませんが、言語ではないフィルターを通して世界にアクセスをしています。そこから何が見えるのかをちゃんと聞かないといけない。

子どもの意見を取り入れるのは、子どもがかわいそうだからではなくて、子どもの意見を取り入れないと、大人では見えない世界を見ている仲間の意見を取り入れないと、突破できない課題がこの社会にあるからです。

子どもたちに対して、「今まで声を聞けてなくてごめんね」と思いつつ、「そこから見える世界をぜひ教えてもらいたい」という感性を持って触れ合っていく、そういったことを考えていく必要があるのだと思います。女性の声を聞くときにも同様のことがいえます。

テーマ②：未来 協働（ひとつに）

二つ目のテーマにいきたいと思います。

「ばらばら」の多様性をどうやって一つにしたらいいのか、ここに難しさがあるということ为先ほどから繰り返しお伝えしていますが、どこをどうしたらいいのか。分かっていることがいくつもあります。

まずは、理論的に分かっていることを皆さんと共有しながら、実践的にどうしたらいいのかというお話もしたいと思います。

それ以前に、今私たちがいるこの 2026（令和 8）年は課題だらけです。そして、その課題を突破するには、新しい価値を生み出していないといけない。今までなかったものの見方や

考え方を取り入れて、私たちは変わらないといけない。その突破口になるのが多様性だ、というのが第1部のお話でした。

その突破口となる多様性を「ばらばら」に置いてはうまく使えません。多様性がなくならないようにしながらつなげる。ギュッと一つにして、みんなが同じ方向を向いては駄目です。みんながそれぞれ違う方向を向きながら、違う方向を向いた人とどうやってつながるのかという、実践的にすごく難しい話を考えます。

Q3 現代社会の特徴は？

今私たちが生きている社会の呼び方について、小学校、中学校社会科の教科書には、既に名前が載っています。何という名前が載っているか、皆さんご存じですか？私たちが生きているこの社会です。

私たちが今生きている社会は、色々な呼び方ができます。例えば少子高齢化社会。生産年齢人口が減って、ここから人口ボリュームがどんどん縮小していく中で、どう持続可能にしていけるかを考えなくてはいけない社会。

他にも色々な呼び名がありますが、一番大きなインパクトだと私が思っているものを中心に、皆さんと考えていきたいと思います。

「第4次産業革命」という呼び方があります。産業革命。世の中の常識がひっくり返る、天地がひっくり返るような瞬間です。革命という名前が付いていることから分かるように、あらゆる産業構造が変わり、価値観が変わり、生き方が変わっていく。その4番目の産業革命の真ただ中に私たちはいるといわれています。

「産業革命」は、4回もありましたっけ？今まで習ってきた産業革命は、蒸気機関ができて、それによって手作りの時代から機械化・大量生産の時代に移っていく、というものでした。

第1次産業革命、この汽車ポッポの時代は、私たちにとって一番馴染み深い産業革命です。

石炭を燃やして火力を上げて、水を沸騰させて、体積の膨張率を使って物を動かしていく、非常にシンプルな仕組みです。

かなりのエネルギーを生み出すことができますが、「かなりのエネルギー」で留まるため、技術革新には更に高いエネルギーが必要になります。例えば、鉄の加工は、石炭でやろうとすると、できないことはありませんが、凄まじい労力がかかります。

大事なのは、電気を使って物を生み出せるようになった重化学工業で、私たちの国の戦後復興を支えた自動車産業が、そのど真ん中にある産業革命です。

三つ目の産業は、「ICT」と書かれていますが、情報の革命が起きました。要はパソコンとインターネットの登場です。

今、世界5大お金持ち企業、時価総額ランキングは、全部アメリカの企業です。Google(グーグル)やiPhone(アイフォン)のApple(アップル)、通販のAmazon(アマゾン)、SNSではFacebook(フェイスブック)のMeta(メタ)などです。

そういった「プラットフォーマー」と呼ばれる企業が、本当に小さな町工場からスタートしたのが、この第3次産業革命の頃です。吹けば飛ぶような小さな企業でした。うまくいくはずがないと、当時の先人たちは笑いました。

今、世界中どこに行ってもAmazonが使えます。どこに行ってもiPhoneを使っています。世界のどこにいてもコカ・コーラが飲めるという話は、流通の分野でよくされるようですが、今、世界のどこにいてもインターネットが使える、それはGoogleなどのサービスを経由して提供されています。

この三つの産業革命を見るだけでも、世の中が凄まじく変わっていることが分かります。蒸気機関が生まれるまでは、人間や馬などの動物の力を使い、畑を耕したり、物を運んだり、移動したりしていた。移動があまりできない、物を作ることもそれほどできなかったも

のが、機械によってできるようになった。

ゆえに、例えば手編みの靴下工場などは、あつという間に潰れたわけです。機械であれば一瞬で大量に作れますが、丁寧に心を込めて作られたものは高い。高いものはなかなか買えなくなる。価値の転換とともに産業構造の大きな転換を受け、今まであった仕事がなくなる。当たり前だったことが当たり前ではなくなるのです。

第4次産業革命

4番目の産業革命は一体何か。今私たちがどこにいるのかというと、皆さんご存知のとおり、人工知能です。

人工知能の進化が止まりません。専門家でも予測できないレベルで進化しています。まさに指数関数的な変化です。今までゆっくりと直線的に進歩していたものが、突然カーブを切るように真上に進歩することを指数関数的といいます。それが今、人工知能に起きています。

皆さん、人工知能はいかがですか？仲はいいですか？普段使っていますか？人工知能と私たちが仲良くできるのか、できないのか、今がまさに分岐点です。

このスライドの絵（36 ページ下参照）そのものが、人工知能に書いてもらった絵ですが、左の絵のように、我々人類が人工知能と手を携えてともに発展していくという未来と、右のように、人工知能によって私たちが支配されていく未来。これらは今、どちらも予測されています。SFの話ではありません。

大学生を見ていると、世の中の動きがよく分かるので、大学の教員やっていてよかったなと思うのですが、大学生たちは今、何か問題があったときに人に相談をしません。最初からAIに相談します。恋愛についてもです。

誰々さんのことを好きになったのだけれど、LINE が返ってこない。こういうときの対応と

して絶対に避けなければいけないことは何か、とAIに相談をして、ある程度自分の答えを作ってから人に相談します。

ある種、私にとっての眼鏡のような存在になっているのかもしれませんが。私は視力がすごく弱いので眼鏡を外すと何も見えませんが、眼鏡があれば、他の方と同じような生活を送ることができます。AIは今の学生たちにとって眼鏡のような存在で、体の一部なのです。

眼鏡との一番大きな違いは、AIが体の一部になることで、考えなくなってしまうということです。

例えば、第1次産業革命で蒸気機関ができて、第2次産業革命で車ができて、私たちは歩けなくなりました。車が社会実装される前、私たちの先輩方は当たり前のように1日40キロ50キロと歩いていましたが、今の私たちはそこまで歩けません。

つまり、移動のエネルギー負荷をテクノロジーに頼るようになったことで、私たちは、身体的には圧倒的に弱くなりました。ただ、自分でジムに行ったり歩いたり走ったり、色々と運動をすることで、何とか補うことはできます。

人工知能の危ないところは、考える部分をAIに依存してしまうことで、考えなくなるということです。これは本当に怖いことです。

私たちが考えなくなると何が起きるか。冒頭の右と左の分岐の話です。左には強いリーダーがいて、右には自立した市民がいます。自立した市民の定義は、自分で考えて、自分で判断して、自分で行動できるということです。考えなくなったら、右の道は選べなくなるのです。左の道しか残されなくなったときに、その左の道にいる強いリーダーは誰だと思いますか？私は人間ではないと思っています。それこそAIです。

無料版のChatGPT(チャット・ジー・ピー・ティー)が、大学入学共通テストのいくつかの教科で、満点を取ったという報道がありましたね。要するにChatGPTは、大学入試レベルの間

題であれば、簡単に解けます。理屈も全て説明できます。IQは測ることができますが、今のChatGPTの無料版のIQは、125から130ぐらいです。

我々日本人の平均が105ですから、ほとんどの日本人より賢いのです。まともなことをAIが言います。困りますね。頼りすぎるとAIに支配される道にあつという間に落ちていきます。自分たちで考えなければ、AIと共存する道には絶対に行けない。

この話は、まちづくりに外せない話だと私は理解しています。自分で考える人がいないと、まちづくりは進みません。その一方で、世の中は自分で考えなくてもいい方向に、急速に変化を遂げている。ここにどうあらがっていくのかが、今まちづくりに問われていることなのです。

この生成AIの持っている賢さが、人間の持つすべての能力を上回っていくタイミングを「シンギュラリティ」といいます。日本語では技術的特異点といいますが、何をやってもAIに勝てなくなるのです。

例えば囲碁や将棋では、人間がAIに勝てなくなって久しいです。2010年に囲碁の世界チャンピオンがAIに負けてから、人間はもう囲碁でAIに勝てません。数学の「場合の数」からいうと、最も複雑なのは囲碁です。次に将棋、チェス、オセロの順ですから、囲碁で勝てないということは、将棋でも絶対に勝てないということです。

では、囲碁や将棋の世界は衰退したかといえ、そんなことはありませんよね。AIとともに自らを磨いた藤井聡太さんは、今や時代の寵児です。彼のすごさ、歴代の棋士の中でも本当に秀でているあの強さは、AIとともに育ったということに尽きます。そして考えることをやめなかったのです。AIを味方につけて自分で考え続けた。その人が今、歴代最強のチャンピオンになっているということ、ここは押さえておく必要があると思うのです。

AIを使っているつもりが使われていて、判

断や思考を預けてしまうと、私たちはあつという間にAIに支配される道に落ちていきます。

囲碁や将棋で人間がAIに勝てなくなって15年ぐらいが経ちます。絵画、芸術の世界はそんなことないよね、とよくいわれますが、絵画の世界、音楽の世界でも、世界コンクールで大賞をとるのはAIが書いたもの、という話題がニュースになって久しいです。8年ぐらい前の話です。

そして文字を書くという作業、キャッチコピーを作ったり、広告代理店の人が商品を使いやすく説明したりすることも、AIの方がとてもいい言葉を出してきて、人間の仕事がどんどんなくなっていく。

そうになっていったとき、人間が何をやってもAIに勝てなくなる瞬間がどこかで来ます。それを「シンギュラリティ」といいますが、いつ来るか、皆さんご存知でしょうか？

予測されています。当初は2045年に来るといわれていました。レイ・カーツワイルという未来学者が、このまま技術革新が進んだら、人間が何しても勝てなくなるのは2045年あたりだろうと、かなり前に予言したのです。

これはすごい「はずれ」なのです。どういうことかという、もう既に私たちは多くの部分でAIに勝てなくなっています。残されたものは、もう数えられるくらいしかないのです。

去年の4月に出た予想は2027年です。来年です。あと1年の間に、私たち人類は何をしてもAIに勝てなくなる。これを発表した科学論文が出たのが去年の4月で、最近その著者が、



2030 数年になるのではないかと未来予測を書き換えたのですが、私は 2027 年に来ると思っていた方がよいと思っています。要するに、あまり時間がないということは、覚えておかないといけない。「まだどうにかなるだろう」なんて、どこの地域でも口にしてはいけない。

私たちに見えている近未来では、人間が作るものよりも、A I が作るものの方が様々な点でクオリティが高くなっていく。多くの人の支持を集められるようになっていく。人間のやることがどんどん A I に代替されていく。そういう未来は、本当にすぐそこまで来ています。

第5次、第6次産業革命

第4次産業革命とお話ししました。第4次産業革命のネックは何だか分かりますか？ A I が人間を超えるために必要なものが二つあるのです。その二つがないために、A I の進歩は、実は少し足踏みしているのです。

一つは電気です。A I はものすごく電気を使います。A I が十分に動けるだけの電気を私たちが作れているかという、作れていません。私たちの生活の余剰分を A I に回しているだけなのです。

しかし、世界のプラットフォーマーたちは、今、すさまじい規模で発電所とデータセンターを作っています。日本の国家予算通常会計が約 110 兆円ですよね。プラットフォーマー 1 社で、それに匹敵する、あるいはそれを超える投資をしています。最近、Google が発表したのは 2,800 億ドル。今は円安ですから相当な金額ですが、それを単年度で投資することを発表しています。

要するに、電力があって、かつデータセンター（半導体）がたくさんあれば、今、十分に発揮できていない A I のポテンシャルが引き出され、また急加速で伸びていきます。

何が言いたいかというと、もうすぐなのです。

A I の次に来る第5次、そしてその次に来る第6次産業革命は、おそらくこの会場にいる皆さんが、ほぼほぼご健在の間に来ます。

第5次は、どちらが先になるか分かりませんが、量子コンピュータか核融合発電のどちらかです。多分、核融合発電があとになると思います。量子コンピュータは、私が今使っている古典コンピュータと違って、量子力学という少し不思議な世界のルールを使って計算するコンピュータです。理研にプロトタイプがあり、理論だけではなく、既に動き始めています。

これが、今、私たちが使っているパソコンと同じサイズになるには、まだ時間がかかるにしても、研究機関が少しお金を出して使えるようになれば、A I のポテンシャルを飛躍的に引き出すことができる。

ただ電力が足りない。その電力は、核融合発電によって賄うことが予想されています。核融合発電というのは、私たちの国が事故を起こした、あの原子力発電所の仕組みとは違います。原子力発電所は、核分裂を使うため、放射性物質が大量に出ます。だから危ないし、事故が起きる。

核融合発電は、この地球上に小さな太陽を再現するというイメージを持っていただくと分かりやすい。太陽は宇宙空間にあって、酸素がないのに燃えているように見えますが、あれは燃えているのではなく、核融合しているのです。

核融合は熱エネルギーを発します。水素のようなありふれた元素を使って、それを融合させることでエネルギーを作っていく。国際プロジェクトの本部がフランスにあって、日本もアメリカも中国も参画しています。

最近、核融合発電が 0 コンマ何秒稼働したということが、すごく大きなニュースになりました。フィギュアスケートの話ではありませんが、できると思うと人間は強いのです。どうせできないと思っている人が多いと、うまくいきませんが、できるかと思った瞬間、一気に物事は進みます。

去年、核融合発電の最初の動きが成功したので、おそらく10年経たず、この二つがそれぞれの産業革命としてやってきます。

ちょっと怖くなってきます。何が怖いかというと、変化のスピードが、です。

第1次産業革命はイギリスで始まりました。今から260年前です。日本では、そこから100年遅れて160年前、明治維新のときにやってきます。

人類の歴史をどこから数えるかにもよりますが、森で生きるサルだった私たちの祖先は、気候変動で森が縮小したせいで、外に出るしかなかった。二足歩行でサバンナや平原に出て行ったのです。

木に登って外敵から身を守っていた祖先が、何も身を守ってくれる環境がない中で生き残るのは、すごく大変だったと思います。だから私たちの祖先は、体を強くするのではなく、賢くなる方向にエネルギーを振っていきました。賢さで生き残ろうとしたわけです。

しかし、その賢い人類が最初の産業革命にたどり着くまでに、約700万年かかっています。一つ目の産業革命が起きてから、次の産業革命が起きるのに70年です。そして50年、30年、産業革命の起きるスパンがどんどん短くなっています。

第5次、第6次はお伝えしたように、この10年くらいの間に、世界にとてつもない変化を起こします。そうなったら、AIは私たちを超えるところの騒ぎではない。私たち人間が、AIの考えていることを理解できない領域に行きます。

ソフトバンクの会長の孫さんがフォーラムで話していた内容ですが、このままAIがシンギュラリティを迎え、人間よりも賢くなっていった先に、AIの賢さと人間の賢さを比較すると、どうなると思いますか？

すごく賢くなった未来のAI、例えば、最短でシンギュラリティが起こると予測されている2027年のAIの賢さを今の人間の賢さとし

た場合、私たち人間の場所はどこになるかというと、金魚だといわれています。

人間は金魚に言葉を教えてあげられません。金魚は賢くないからです。それくらいの差が、ここ数年で生まれるといわれているのです。

協働の話をしているのに、なぜそんな怖い話を聞かなければいけないのかと思っている方もいらっしゃると思いますが、この前提が大事なのです。

前提① 変化がとても激しい“象”が巨大化

まず、協働を考えるときの非常に大きなポイントとして、「群盲象を評す」の話がありました。みんな違う場所を触っているのに、象の全体像がつかめないということでしたが、今、この象がどんどん巨大化しています。

それこそ、今までであれば、6人くらいの群盲が集まれば、あるいは3人が集まれば「文殊の知恵」といわれたわけですね。つまり、3人違う立場の人が集まれば、世界の全体像は大体見えたといえた時代があったのですが、今は3人では駄目です。世界が複雑に、かつ巨大になりすぎています。

今まで声を聞いてなかった人たちの声を積極的に聞いてかないと、多分人類が持ちません。地域を持つ、持たないではなく、我々人類が続いていかなくなる。そんな瀬戸際に私たちはいるように思います。

だとすれば、どうしたらいいのか。誰か賢い人が出てきて物事を一気に解決してくれて、というマインドは、やはり危険です。それではAIに持っていけます。人間よりもAIの方が賢くなっていきますから。

私たちがAIとともに発展していくには、どうしたらいいか。

前提② いまこそつながって納得のいく答えを

市町村レベルで、私たちの納得のいく答えを作っていくしかないのです。「これが答えらしいよ」といわれたことをやるのではなく、私たちはどうするかということを真剣に考えて、議論して、私たちの答えを作っていくということが究極に大事です。

長野県の希望は、生涯学習が非常に進んでいる地域だということです。公民館の数は、皆さんご存知のとおり全国一ですし、公民館で展開されている様々な活動も非常に面白い。しかも、多様な人たちがいます。

今、長野県には、外から移住してきてくださる方が多い。つまり、よそ者を迎え入れやすい地域にもなっている。その地域に生きてきて、半ば諦めているかもしれない人たちと、外から来て、長野すごいな、素敵だな、もっと面白いことできるよと思っている人たちとの協働が起きれば、この地域はすごく可能性がある。私はそう思っています。

納得のいく答えを作ること、それがまさにまちづくりですよね。このまちをどうするかを、自分たちの言葉でしゃべる。誰かが言った言葉や教科書に書いてある言葉ではなくて、自分たちで決めていく。

名前と顔が一致する数が、私たちの認知の限界だといわれています。その数を超えると、私たちは、物事を自分ごとにしにくくなるので、とにかく足元の、自分の見える範囲の地域のことを自分ごととして考えて、皆さんで納得のいく答えを作っていけるとよい。

問題は、納得のいく答えを作るときに、いかに多様性を歓迎しながら、対話をするかです。

どうしたらつながれるのか

今までに、つながろうと思ってつながれなかったという経験は、たくさんありませんか？私も山ほどあります。つながりたかったけれど

つながれなかった、つながりたいと思ったけれど傷つけられた経験も、数えられないほどあります。

しかし、そこで対話を諦めない。私がとりあえず今いられるのは、先人たちが対話を諦めていないからです。この信州の地で、私はいつも勇気をいただきます。どうしたらつながれるのか、言いたいことは山ほどありますが、時間の関係で三つに絞ります。

まず一つ目です。「協働とは結局何か」という議論の概要を皆さんと共有します。現場で実践をされている、あるいは研究を進められている方にとっては、釈迦に説法だと思いますが、皆さんが同じフィールドに立って、コミュニケーション、意見交換するためにも、どうしたらつながれるのか、協働についての概略を押さえておきたいと思います。

その上で、二つ足すとすれば、「対立を歓迎する」というのが、協働の基本的な考え方ということ。我々は、本当は対立したくありませんよね。敵と味方に分かれたくない。敵を作ると自分がやられてしまうかもしれないということが、本能に刻まれているのです。味方を作り、敵と区別して、味方を守ることで生き残ってきたので、対立は基本的に避けたい。

しかし、これを避けるのではなく、仕方がないと諦めるのではなく、歓迎するのです。対立する人がいたら、よく来てくれたね、ありがとう、というところから物事をスタートさせるのが、協働のメンタリティです。そのためには、「ちがいを楽しむ」必要がある。

そういったことをちょっとした理論とともにお話ししますが、何だか三つもあって難しいなと思われた方は、これだけ持って帰っていただきたいです。今日の一番大きなキーワードかもしれません。「越境」という言葉です。

この「越境」という言葉は、これから人口が減っていき、今までと同じことができなくなる、私たちが住むこの日本において、外すことができない考え方として注目を集めています。

後ほど説明しますが、協働するには「越境」しなければいけないというのが、結論になります。多様な人たちとつながるには、「越境」の考え方を自分の体、心に染み込ませる必要がある。

協働とは何か

では、協働の理論について少し説明をします。

私は、コミュニティ・スクールをフィールドにしながら、多様な価値観が混ざり合って協働し、子どものために面白い活動が生まれるところをたくさん見てきて、その虜になっています。男女共同参画の観点で地域の皆さんからお声がけいただいたり、企業内の多様性をどう協働させるかという観点で、企業に呼んでいただいたりすることも増えてきましたが、圧倒的に私が出かけていく先として多いのは、コミュニティ・スクールです。

協働について、コミュニティ・スクールの文脈では、「支援」と「連携」との違いで説明されることが多いです。「支援から連携・協働へ」といったフレーズが、よく文科省から出されていますし、2015（平成 27）年に出た答申の中にも、「支援から連携・協働へ」という言葉が、各所に出てきます。

要するに、階段だということです。階段ということは、いきなり3段目に行くのは大変で、まずは1段目から進んでいかないと、上に行くにくい。スモールステップで上がっていく必要があるということです。

「支援」というのは、いわゆる貸し借りの関係です。誰かが手伝って欲しいと思い、ちょっと誰か手伝ってと言って、手伝ってくれた人に、手伝ってくれてありがとうと言うのが「支援」です。これは、実は負担感が一番強まるステージです。

多くのまちづくりが、始まるけれどもうまく勢いに乗れないのは、関係者が「支援」から抜け

出せないからだということがいえます。「支援」の関係性は、「支援する人」と「される人」に分かれます。同じ立場ではないのです。手伝ってもらう人は、「ありがとう」と言わなければいけないし、手伝う人は大変だけど、自分にできることがあって喜んでもらえるなら、といって手伝いますよね。

学校はこれまで、この「支援」の枠組みで、地域に「手伝ってください」と声をかけていたのです。ただ、これは地域に負担感が募っていきます。また、学校の先生も地域の方とコミュニケーションを取らなくてはいけなくなるので、学校職員にも負担感が増していくのです。

そのため、「支援」からスタートすることは大事ですが、早く抜け出さないといけない。貸し借りではないステージに上がっていかないといけないのです。

それが「連携」のステージです。「連携」になると、互惠的、双方向的、Win-Winという言葉もありますが、要するにどちらにとってもいいことをやるということです。どちらかが助けられてありがたい、どちらかが助けたから疲れてしまったではなくて、どちらもその活動をやることで楽しくなる、幸せになる、何か課題が解決される、これが「連携」です。

「支援」は、手伝う・手伝われる、貸し借りの関係なので、「この前手伝ったのだから、今度は手伝ってよ」といわれ、お返しをしないといけない。

「連携」になるとお返しは要りません。お互い様だからです。どちらも幸せになっていますから、物事は、負担感から充実感に変わっていくといわれます。

ただ、「支援」から「連携」に上がっていくには、そこにいる人が当事者の意識を持たないとダメです。誰かがやってくれるだろうと思っているうちは、「支援」のレベルから抜け出せないのです。「ここは私がやらなければいけない」「私がその順番だよ」と、自分の役割と責任を感じて動ける人が「連携」のステージに

上がります。

「連携」は、負担感が充実感になりますが、大変です。日本の社会は特に、一部のできる人に「連携」のステージに強引に立場を上げてもらって、そこに究極的に負荷をかけることで組織を回すやり方を取るのです。

これをトップダウン型といいます。意思決定する人はトップになるので、下の方にいる意思決定権がない人たちは考えるのをやめます。考えたところで、自分の意思が通るわけではないので、上からいわれたことを「はい！」と元気に受け取って、動ける方がいいわけですね。そういう方が出世もするかもしれませんし、実際にそういう組織もあります。

そのため、「連携」の問題は何かというと、大部分の支援者の裾野に囲まれているということです。つまり当事者があまりいないのです。

トップの人は熱意があります。それでも熱いのはそこだけで、下がうまく出てこないというのは、トップが「連携」で留まっているからです。トップの皆さんには、「協働」のステージに上がっていただく必要があります。

「協働」は、一方的貸し借りの「支援」、双方向的・互惠的・Win-Win な「連携」に比べ、融合的で。どこからどこまでが誰の役割か、よく分からない状況になっていて、そこには新たな価値が創発されます。それが「協働」の面白さです。

この「協働」を支えるのは、当事者ではありません。市民です。市民というのは松本市民のことではなく、公民のことです。この民主主義

国家の日本は、私が支えるのだと思っている人です。この信州は、この中信地区は、この松本は私が支えるのだ、この自治会、この住民自治組織は私が支えるのだという強い当事者性。主権者意識と言い換えてもいいかもしれません。

主権者意識まで上がっていくと、基本的に対等並立の関係になる。つまり上も下もない。みんな横並びでアイディアを出し合う。そこまでいくと「協働」になるといわれています。

「協働」するにはどうしたらいいかという問いは、多様性を一つにするにはどうしたらいいかという問いから生まれてきました。多様性を一つにするには、市民を増やさないといけないということです。

私たちは、オギャーと生まれて市民になるわけではなく、学校に通えば市民になるわけでもなく、学び続け、変わり続けないと市民にならないのです。

ある時期に「協働」のステージまで上がったけれど、世の中の状況が変わったら、また「支援」の段階まで落ちることがあります。これが厄介です。一度ステージが上がれば、変わらないわけではないのです。相撲の大関のように、上がっても落ちるのです。

市民まで上がったら、常に学び続け、常に変わり続けなければいけません。つまり、「協働」は、教育が盛り上がっていないとできません。市民が生まれてこないからです。

「協働」ができないと、多様性を包摂できません。学ぶ地域でないと、多様性は使い切れないということです。

私たちは、生まれつき多様性が苦手です。だから、それを学習によって、「大丈夫だ」「これは今必要なのだ」「自分と違う意見の人を歓迎しなくてはいけないのだ」と自分を作り変えていく。まさに橋を架けるのです。

対立を歓迎する



その上で、どうしても対立は嫌だ、対話はできる限り避けたいと思われている方がいるとしたら、むしろ対立は歓迎しましょう。今から200年以上前にドイツの哲学者ヘーゲルが言った言葉です。

「弁証法」という考え方ですが、対立する人が出てきた場合、つまり意見が違う人が出てきて、自分を飲み込もうとしてきた場合、戦うのでもなく、逃げるのでもなく、融和して、新しい価値を生もうとすると、一番心に留めるのが弁証法です。

弁証法は、まさに「群盲象を評す」です。象は壁のような生き物だと思ってお腹を触っている人がいて、いやいや象は太い蛇のような生き物だと思って鼻を触っている人が別にいるとき、ここに対立が生まれます。見えているものが違う、感じているものが違う。私にとって正しい世界について、それぞれ違う主張が出てきます。そうなったとき、歓迎せよ、とヘーゲルはいうのです。

どういうことかという、実は私の視点もあなたの視点も一部に過ぎず、不完全だからです。それをどうするか。我々の視点を「止揚(統合)」する、要するに、我々がもっと高みに登って色々なものが見えるようになるためには、対立のエネルギーが必要です。

ぶつかることを恐れずに、しかも逃げるのでもなく、相手を論破して潰すのでもなく、ともに融和的に、何が見えるのかを言い合って、君から見たらそれが正しくて、もしかしたら、僕たちに見えていない正しさがあるのかもしれない、というように「止揚」します。

そう簡単に起きるものではありませんが、一度でも「止揚」を経験すると、私たちは虜になります。むしろ自分と意見の違う人を歓迎するようになります。そういう面倒くさそうな人を見つけては、話しかけに行くようになります。

もう一つ。対立を歓迎することと同時に、対立すると思っていいたら足が前に出ないですよ。あの人のところに行ったら怒られるかなと

か、また面倒くさいことを言われるかなと思って、その人のところに近づけない場合、どうしたらいいかですが、基本は「ちがいを楽しむ」のだということです。

求同尊異 ちがいを楽しむ

協働の理論的に分かっていることの一つに、「求同尊異」という考え方があります。

「大同小異」「求同存異」という言葉があります。「大同小異」は、違いはあるけれど、大きいところは共通しているから、細かい違いには目をつぶりましょうという意味ですよ。

「求同存異」もまさにそうです。同じものを求めているのだから、同じ北極星を見ているのだから、そこに違いはあるものだろうということを、「求同存異」といいます。ある時期、中国の国家主席が、外交方針として使っていましたが、「協働」はこれでは駄目です。

同じ目標、同じビジョン、同じ北極星を見ているときに、「違いはあっても仕方がない」ではなく、違いがあつたら、それを敬うというのが、協働の基本的な姿勢です。

違ったらわくわくしていただきたい。むしろ、自分と違うところで生きてくれている人への敬意を持ってほしい。それが「求同尊異」です。違いがあつたら「ありがとう」なのです。私からはそちらの世界は見えないので、見てくれてありがとう。ぜひつながってほしい。そうすれば私の視野はもっと広がる。

これを拡張して、究極まで拡張して、国レベルを超えて世界レベルで「求同尊異」ができたなら、みんなが違いを楽しめたなら、世界平和がきつと来ます。単純に世界平和を語るなど怒られるかもしれませんが、私はこの先にあると思っています。

自分が教育学者になったのも、教育とは何なのかを考えたかったからですし、教育の色々なメカニズムを明らかにしたかったからです、

教育はそもそも何のためにあるのかといえば、究極は世界平和のためだと私は思っています。

越境 「境界」をまたぐこと

あらゆる違いを乗り越える、その市民を育てる教育は、学校だけでは無理です。社会教育が必要です。むしろその融合が必要です。死ぬまで学び続ける環境が必要です。

「協働」とは「支援」「連携」の上に来るもので、私たちが市民にならなければ、「協働」はできないのだというお話をしました。対立を歓迎して違いを楽しむことができれば、私たちは「協働」ができるかもしれない。外国人はいりませんとか、子どもの意見は聞きませんとか、女性は引っ込んでいてくださいとかいったことをやめて、今まで避けていた多様性を歓迎すれば、みんなでものを考えることができるようになるかもしれません。

象は私たちが思っている以上に大きいため、できるだけ多様な人を仲間にしなさいといけません。それを可能にするのが、先ほどお伝えした「越境」という考え方です。

まさに境をまたぐわけです。青いゾーンから赤いゾーン（41 ページ下参照）に行くこと。イノベーションが起きるときに、今までなかった価値観や仕組み、制度が新しく生まれるときに、多様性が絶対に必要だとお話ししましたが、多様性以外にも必要なものがあるということが分かっていて、その一つが「越境」です。

つまり、今の常識の中にとどまっていたら、私たちは変わらないのです。自分を壊し、今まで大事だと思っていたことの優先順位を変えたり、今まで大事ではないと思っていたものを自分の優先順位に組み込んだりすることによって、自分を壊すのです。そして作り直す。これが「越境」です。

人間は多様性が怖いとお伝えしましたが、もう一つ怖いものがあって、それが「変化」です。

私たちは、なかなか変わらないのです。変わろうとすることに、とてつもない怖さを持ちます。

心理学でいう、セーフティゾーンという領域があります。私たちが生きていて、こういうときはこういうふうに振る舞えばいいのだと分かっている領域です。私でいうと、授業で教えている時間はセーフティゾーンです。自分の資料があって、何をすればいいのか分かっています。今回のような講演も、私にとってはある種のセーフティゾーンです。

しかし、ダンスパーティーのようなところになると違います。去年、世界教育学会がブラジルで開催されたのですが、ブラジルの皆さんは踊るのです。教育学者が集まって、みなでお酒をしっかりと飲んでいる場で、みなでダンスします。日本人研究者は、みんなそれを眺めて座っていたのですが、せっかくここへ来たのだから「越境」しようと思い、踊ってみました。すごく楽しかったです。

普段だったらやらないとか、どう振舞ったらいいか分からないという世界があります。それを、心理学ではストレッチゾーンといいます。社交ダンスなんかやったことはないけれど、みんなの見様見真似で踊ってみるというように、一步を踏み出していくこと、これを「越境」と呼びますが、今、教育学では越境学習といって、特に企業研修ですごくよく使われています。

私は、この越境学習を使って企業研修を担当させていただくことがあります。今日はその越境学習について深く掘り下げる時間はありませんが、ポイントだけ共有します。

皆さんのセーフティゾーンはどこなのかをイメージしながら聞いてください。ご家庭かもしれません。あるいは、それぞれお立場のある方が多いと思いますので、その立場を担っているときは、どう振舞えばいいか大体分かるのでセーフティゾーンかもしれない。

ストレッチゾーンはどこでしょうか。やはり変化を強要される場所です。踊らない私が踊ることを強要される場所で、どうせやるなら楽し

くやりたいと思い踏み込むわけですが、「越境」というのは、私の世界から私がいらない世界の方に一步跨ぐことです。これをすると、人間何が起きるのかというと、大きく四つのことが分かっています。

一つ目は、何か「気づき」があります。私でいえば、ダンスにはダンスマナーがあるのかと思っていたのですが、好き勝手踊っていいのだ、みんな好き勝手踊っているから、俺も好き勝手踊ろう、といった気づきが生まれます。

とはいえ、あまり個性的な動きをすると目立ってしまいます。あの日本人研究者がなんだか一人ですごい踊りをしていると。ある程度調和もしないといけません。だから協調します。知らないステージに行って、ここでどう振舞うのが適切なのかということ、その場で考えようとします。その場で考えることによって、こう振る舞うと自分の自分らしさもなくなないし、場の空気も乱さないということが分かってくると、その人の価値観に変容が起きます。

先ほど、私たちは変わるのが怖いとお伝えしました。これは脳にプログラムされている仕組みです。だから、変わろうとすると、絶対怖くなり躊躇します。

ピアノをやろうとずっと思っているけれど、なかなかずくが出なくて、といった人はいませんか？日常を変えることになるので、勇気がいる。でもやってみたら「越境」するのです。新しい趣味に挑戦する、これも間違いなく「越境」です。

大事なものは変容です。越境は、私たちが怖がっている変化を内側に生じさせるときに、最も有効な方法の一つです。今と同じ生活をしては変わりません。新しい価値観も入ってきません。多様性をこれからも拒否し続けるだけです。

普段だったら行かない領域に一步、半歩ぐらいでもいいので行ってみる。すごく面白い。本当に変わります。

テーマ③:橋を架ける 新しい価値(わくわく)

先ほどお伝えしたように、今どこにるのが分かって、ここから先の近未来が見えたら、橋の始まりと終わりが見えるので、あとはその橋をどういう「願い」を込めて作るのが大事です。

「願い」は一つでいいと思っていますが、あらゆる「まちづくり」や「教育」や、人間のあらゆる生活は、これを「願い」にしていはいはずだと思っていることがあります。それが「ウェルビーイング (well-being)」です。

身体的、精神的、そして社会的に充実した状態で幸せだと思える良い状態。これを「ウェルビーイング」と呼びます。色々な識者が色々な定義をしていますが、これは WHO の定義で、私の一番好きな定義です。

1946 年、敗戦の翌年に、もうこんな悲惨なことは二度とするまいと、国際機関が世界にメッセージを出したときに、この「ウェルビーイング」が使われました。もう殺しあうのは止めよう。幸せを願って、あらゆることをやっといこうと。それが今から 80 年前です。80 年たってようやく私たちの身近にも「ウェルビーイング」が届くようになりました。

私の大好きな方が作ってくれた定義がこれです。「身体や心や周りとの関係、社会の中での自分の在り方が自分にとってちょうど良い状態」。そのちょうど良い状態は、お風呂の温度に近いところがあって、体がすごく冷えていたら温かいお風呂に入りたいかもしれないし、気温が温かかったらシャワーでいいかもしれないといった具合に、変化するのです。私たちの状況と環境も変わります。

このウェルビーイング、みんなの幸せ、これが実現できればいいし、それが「まちづくり」の最大のねらいであっていいはず。みんながいいなと思える地域。学校教育の目標もこれでいいはずですし、人間のあらゆる活動の最終

目標はウェルビーイング、「幸せになる」ということであっていいと思っています。

Q4 みんなの幸せを目標に掲げる自治体

そして皆さんご存知のとおり、みんなの幸せを目標に掲げている自治体があるではありませんか。「全員幸せにする」といっている自治体です。大人も子どもも、おじいちゃんもおばあちゃんも、あらゆる人をすべからく幸せにすることを教育の最上位目標に掲げている自治体、それが長野県です。

長野県は教育振興基本計画の最上位目標として、「未来をつくる、学びでつくる、個人と社会のウェルビーイングの実現」を掲げています。第4期教育振興基本計画は、5年計画で今年4年目でしょうか。

ウェルビーイングは言葉として浸透してきています。そして今、子どもの「やりたい」ととことん叶えられる実践に動き始めていて、信州の教育は、色々な意味で転換点を迎えています。

みんなが幸せ、これを教育の最上位目標にする。教育振興計画を策定された前教育長も仰っていましたが、これを掲げたとき、やはり色々な批判もあったということです。「全員幸せになるといって、うちの子は障害があるけれど、きちんとその全員の中に入っているのですか」など、色々な声が教育委員会に届いていると伺っています。

Q5 みんなが幸せって可能ですか？

目標に掲げるのはいいけれど、そんなことが果たして可能なのかというところ。ここを最後に考えて、願いの橋を架けて終わっていこうと思います。

「みんなが幸せって可能ですか」という問い

に関しては、可能ですと答えている心理学者がいます。それがこのライアンとデッシです（46ページ上参照）。この二人が作った自己決定理論、ウェルビーイングを支える三つの柱が、私たちに、みんなが幸せになることが不可能ではないことを教えてくれます。

ということなのか。価値観は多様だし、みんなが幸せなんておかしいだろう。甘党の人もいれば辛党の人もいる。みんなとワイワイやりたい人もいれば、一人で静かに本を読みたい人もいて、どうやってみんなの幸せを両立するのか。

何をするか、つまり、何が幸せかは人によって違っていいのです。むしろ違うべきです。私の幸せと皆さんの幸せは違う。そして、今の私の幸せと10年後の私の幸せも違っていかもしれない。けれど、何が幸せかは別にして、その人が幸せだと思える状態になるためには、外せない三つの柱がある、というのがこの理論です。

一つ目に、私たちは「つながり(Relatedness)」なくして、幸せにはなれないのだ、というのがこの理論の根底にあります。つながりとは、先ほどからお伝えしている多様な人たちとのつながりです。

難しいですね。協働は、なかなかできるとは言いにくいですが、それでもやはり必要で、我々は一人では幸せになれないようです。つながりを持ったとき、自分だけでは見えない世界を教えてくれる仲間と出会ったとき、私たちはそこに幸せを感じる。

二つ目は、「やりがい(Competency)」と書きましたが、これは語弊がある訳で、本当は「自己有用感」と定義されます。「自己有用感」というのは、人の役に立っているという感覚のことで、私のやっていることには意味があるのだと思えることです。自分一人の単なるエゴではなく、私がやりたいと思っていることは、私にとっても幸せだけれど、他の人の幸せにもつながっているのだと思えていること。「自己有用

感」だと分かりにくいので、「やりがい」というわかりやすい言葉に置き換えて説明しています。

「つながり」ながら「やりがい」を得ると、とてつもない多幸福感に私たちは満たされるのです。価値観の違う人と、自分だけではできないことを成し遂げたとき、「できたね」という感覚を自分だけでなく、仲間とともに共感できるとき、私たちは「つながり」や「やりがい」の中にウェルビーイングを感じます。

「まちづくり」は、まさにこれですね。一人ではできないのです。色々な人がいる中で色々な意見を聞きながら、対話を諦めず、お手伝いから当事者に、そして当事者から市民に自分をレベルアップさせていくことで、協働してつながって、幸せになっていきます。

三つ目は、「つながり」ながら「やりがい」を得て、失ってはいけないもの、「自分らしさ (Autonomy)」です。社会で生きるとは、要するに自分でいられなくなることだと、特に若い子たちは思っています。学生のままだいい。社会人になりたくないというのです。確かに学生は自由ですし、楽しいことも多いので、分かる気がします。

けれど、「大人になりたくない」といわれたときに、私は思うことが二つあります。

学生たちには、大人って楽しいよ、学生の頃できなかったことがたくさんできるようになるし、学生の頃には出会えなかった人と出会えるし、そういった人たちとのつながりの中で、やっとできることがある。だから早く大人になって、と伝えています

同時に思うのは、学生に「大人になりたくない」と思わせた責任の一端は、大人の一人である私にあるということですよ。私の背中を見て、「大人って面白くない」と思わせてしまった可能性があります。

大人であることの面白さは、もっともっと発信していかないといけないと強く思いますが、そのときにもこの「自分らしさ」、私が私であ

ることが重要です。社会の一員になるために自分を殺すこと、抑えることも時々はあるかもしれないけれど、私を殺し切って何かの一部になったら、私が生まれてきた意味がありません。

もしかしたら私が見ているこの世界は、世界で私しか見ていないものかもしれません。だとしたら、それを仲間に伝える義務があります。私からはこう見えるのだ、皆さんからはどう見えるのだと。

「自分らしさ」を消してはいけない。そのように自己決定理論は教えてくれます。

Q6 私たち大人の責任って？

私たち大人がやるべきことは、やはり背中を見せることだろうと思います。

「まちづくり」は、決して簡単なことではないし、「多様性」の包摂、これも簡単なことではありません。「教育」も簡単なことではない。ただ、今日の講演を聞いてくださっている方のほとんどが、何かできることがあるはずだと、対話を諦めずに、踏みとどまってくださっている仲間だと思っています。

私たち大人のできること、すべきことを最後にお伝えするとしたら、今回の講演のタイトルに戻ります。

我々は基本的に「ばらばら」です。しかし、この「ばらばら」は、決して残念なことではなく、一つにまとめ上げなければいけない何かでもありません。まず「ばらばら」であるということ、自分とは違う人がいてくれているということそのものに敬意を持つこと。

自分と違う人は大体面倒くさいです。「なぜそういうことを言うのだろう」「なぜそんなふうに考えるのだろう」と、イラッとすることもあります。私たちに見えているのは、本当に世界の一部に過ぎません。触っている象の部分が「ばらばら」である中で、一つにつながりながら協働することは、我々が学び続けて市民に

なっていかなければ不可能です。生まれたままの姿では、協働はできません。

自分を成長させて、学び続けて、変わり続けたその先に、新しい「わくわく」があるとしたら、今の若い子たちもきっと大人になりたいと思ってくれるのではないか。将来、今の大人がやってくれるような、まちづくりに参画したいとか、学校の先生になりたいとか、公民館で勤めたいとか、ですね。色々な形で子どもたちは私たちの背中から、新しい「わくわく」をずっと見てくれると思います。

課題だらけの現代ですが、私も皆さんの仲間の一人として、これからも上田に住み続けています。ぜひ皆さん、お体を大事になさっていただいて、皆さんの活動が活発になることを心よりお祈り申しあげております。

今日は本当にありがとうございました。

2026/2/15 @松本市中央公民館：Mウイング
未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

ば ら ば ら だけど ひ と つ に
多 様 性 × 協 働
新 しい 価 値

わ く わ く

長野大学 早坂 淳

Q1

まちづくりって

何だろう？

まちづくり
橋を架ける
現在から未来へ

3

Q2

どちらの途を
選びますか



4



お話の流れ

【テーマ①】 **多様性**：現在

私たちはどこから来てどこに居るのか

【テーマ②】 **協働**：未来

私たちはこれからどうなるのか

【テーマ③】 **新しい価値**：架橋

私たちは何を願って橋を架けるのか

テーマ①

現在

ば ら ば ら

多様性

7

多様性の類型

【統計的】多様性

表層的な（男女，年齢，国籍…）“ちがい”

【神経】多様性

中枢神経における発達の“ちがい”

【認知的】多様性

見方・考え方の“ちがい”

8

前提①

探索

結合

実装

イノベーションに
不可欠

9

前提②

分類

脅威

集団

私たちは多様性が
苦手

10

おぼえておきたい

バニスター効果
限界は常に内に

11

おぼえておきたい

インドの寓話
群盲象を評す

12



13

結論

独りでは

**象の全体像を
知りえない**

14

テーマ②

未来

ひとつに

協力 働

15

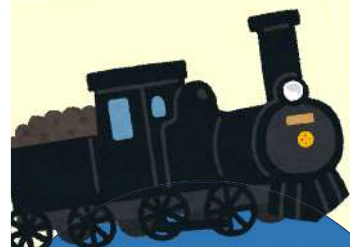
Q3

現代社会の
特徴は？



16

第四次産業革命^{*1}



第一次

18-19C

水力・蒸気
繊維物業・鉄鋼業



第二次

19-20C

電気
重化学工業



第三次

1980~

ICT
情報産業



第四次

2016~

AI, IoT,
Bigdata

17

シンギュラリティ

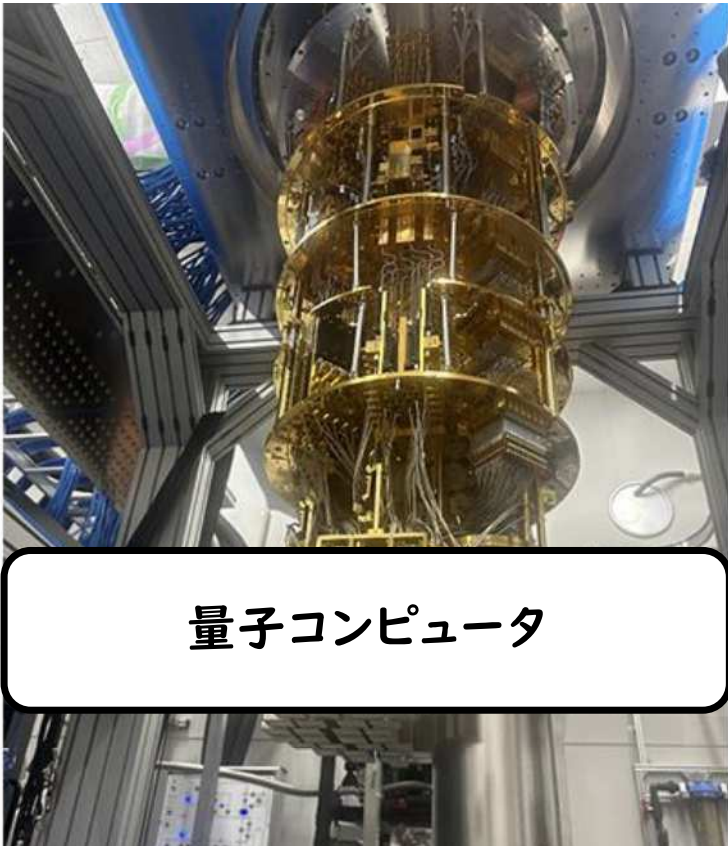
2045年

AI2027^{*2}

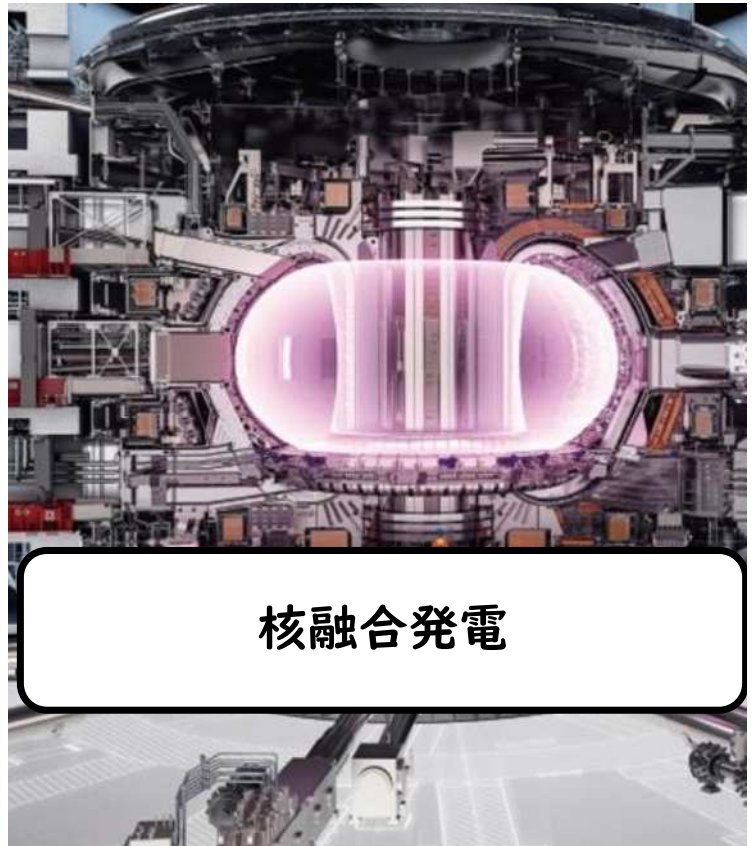
すぐに

第五次, 第六次 産業革命が

19



量子コンピュータ



核融合発電

前提①

変化がとても激しい
“象”が巨大化

21

前提②

いまこそつながって
納得のいく答えを

22

どうしたらつながれるのか

- 協働とは何かを知る
- 対立を歓迎する
- ちがいを楽しむ

越境

23

協働とは何か

融合的
価値創発

協働

対等並立
市民

双方向的
互惠的

連携

対称的
当事者

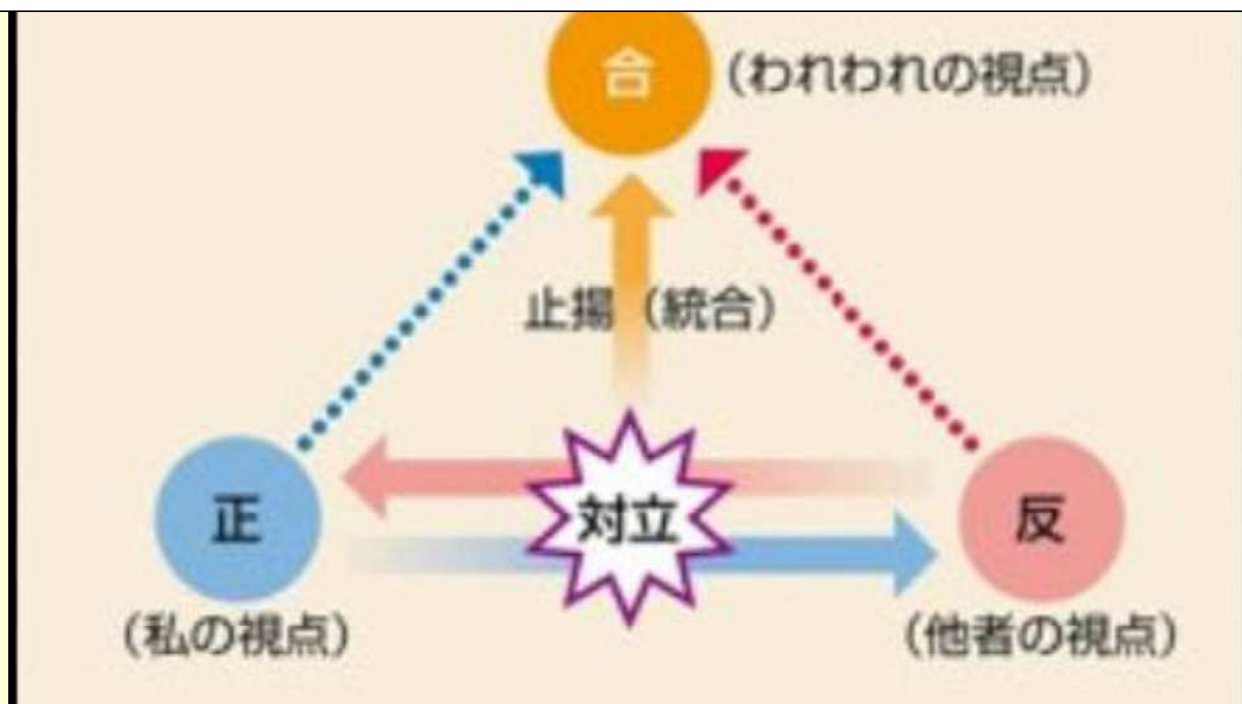
一方向的
貸し借り

支援

非対称的
支援者/被支援者

対立を歓迎する

*3



求同 尊 異

ちがいを楽しむ

どうしたらつながれるのか

- 協働とは何かを知る
- 対立を歓迎する
- ちがいを楽しむ

越境

27

セーフティーゾーン

越境

ストレッチゾーン

越境

性別，文化，価値観，
伝統，言語，宗教…

「境界」をまたぐことで
①気づき，②協調，③省察，
そして④変容をもたらす *4

29

テーマ③ 橋を架ける

わくわく

新しい価値

30

well-being

ウェルビーイング

身体
的

精神
的

社会
的

ウェルビーイング

身体や心や周りとの関係，
社会の中での自分の在り方が
自分にとってちょうど良い状態

*5

Q4

みんなの幸せを
目標に掲げる自治体

33



長野県

長野県 教育振興基本計画

・最上位目標

「未来をつくる、学びでつくる」
個人と社会の
ウェルビーイングの実現

*6

35

Q5

みんなが幸せって

可能ですか？

36



自己決定理論

*7

ウェルビーイングを支える3つの柱

- ① **つながり** : Relatedness
- ② **やりがい** : Competency
- ③ **自分らしさ** : Autonomy

Q6

私たち大人の

できること・すべきこと

責任って？

39

まとめ

ば ら ば ら だけど ひ と つ に
多 様 性 × 協 働

新しい価値

わ く わ く

本日の資料^{*8}



<https://drive.google.com/file/d/1fmZYhA4XriiMxqIITF-EeupgqeyWQigm/view?usp=sharing>

- *1 教育分野における議論としては、佐藤学（2021）『第四次産業革命と教育の未来 ポストコロナ時代のICT教育』、岩波ブックレットNo.1045、岩波書店。に詳しい
- *2 Kokotajlo, D., Alexander, S., Lifland, E., Larsen, T., & Dean, R. (2025). AI2027: A Shocking Scenario Predicting the Arrival of Superintelligent AI and Its Evaluation. AI Futures Project. <https://ai-2027.com>
- *3 ヘーゲル著、金子武蔵訳（1807=1971）『精神現象学』岩波書店。
入門編としては、斎藤幸平（2025）『100分de名著 ヘーゲル 精神現象学』NHKテキスト、がおすすめです
- *4 Akkerman, S. F., & Bakker, A. (2011). Boundary crossing and boundary objects. Review of Educational Research, 81, 132-169.
- *5 山口有紗（2025）『子どものウェルビーイングとひびきあう 権利、声「象徴」としての子ども』明石書店。
- *6 長野県（2023）第4次長野県教育振興基本計画 <https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyoiku02/gyose/zenpan/keikaku/keikaku-4>.
- *7 Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. American Psychologist, 55(1), 68-78.
- *8 本講演資料は、作成者（長野大学：早坂）を明示いただければ、どのようにご活用いただいても構いません

【その他】早坂が参画している（いた）本報告に関連のある委嘱委員や研究活動

1. コミュニティスクール検討会・座長（長野県教育委員会生涯学習課） <https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/bunsho/cs2024.html>
2. 「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議・委員（長野県教育委員会教育政策課） <https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyoiku02/iissenko.html>
3. 上田市オープンスクール設置検討委員会・委員（上田市教育委員会） <https://www.city.ueda.nagano.jp/uploaded/attachment/69977.pdf>
4. 2024 コミュニティスクールシンポジウム@長野大学 －CS決戦 山口VS長野－ <https://www.youtube.com/watch?v=qVbuAxsq5Ns&t=39s>
5. 2025 コミュニティ・スクールシンポジウム@長野大学 －ウェルビーイングとコミュニティ・スクール－ <https://youtu.be/IAisevINfko>
6. 早坂淳（2020）「長野県におけるコミュニティスクールに関する実態調査」． <https://sites.google.com/nagano.ac.jp/hayasaka-cs/>

* 本講演は、JSPS科研費 22K02291および25K05926の助成を受けた研究成果の一部です。

第1分科会 みんなが進める物語！ 多様なアクターがつながる地域活動

話題提供者：	新保 俊尚	(松原モールぷろじえくと代表)
	下村 純	(松原モールぷろじえくと)
	西澤 久典	(松本市社会福祉協議会 本郷地区担当)
	小口 麻左美	(本郷地区生活支援員)
	勝家 隆	(地域づくり支援課 課長補佐)
司 会：	小松 一成	(波田公民館 主事)
会場：中央公民館 会議室4-4 / 参加者：29名		

1 協議の柱

価値観が多様化する現代社会において、既存のやり方で地域活動を持続することが難しくなっている中、多様な「アクター（主体・役者）」が地域でつながり、課題解決等に向けた活動を進めることの利点や、実現のためのヒントをみんなで考えます。

2 話題提供

(1) 「松原モールぷろじえくと」

ア 概要

(ア) 松原モールについて

松原中央公園を起点に西へと伸びる通り。商店街を兼ねる住民の憩いの場だったが、バブル経済の崩壊後は空き店舗が増加するなど次第に衰退。以後、住民の利用頻度も少なくなり「さびれた場所」というイメージが強くなるとともに維持管理が住民の大きな負担となっていた。

(イ) 松原モールぷろじえくとについて

松原地区の長期的な地域づくりと松原モールの活性化を目指した「まっばら未来会議」を前身とし、地区住民3名と公民館長・公民館主事が中心となり平成30年に発足した団体。松原モールが地域住民の交流の場となることを目的に活動を行っている。現在は参画する8人のメンバーを中心に主な活動として毎週土曜日の清掃活動のほか、クリスマスシーズンの飾り付けやコンサート実施している。

(ウ) からくり時計修理

平成10年にいたずらが原因で故障したからくり時計は、松原モールのシンボルとして修理が望まれていたが、専門業者では多額の経費がかかることから実現できないでいた。そんな中、活動参加者の中から「少しいじってみたい」という人が現れ、補修が開始。有志による作業と必要最低限の部品交換で補修が進み、令和2年に修理が完了した。

イ 事例発表から

- ・ 活動に当たり、特に参加をお願いした対象者は、目的を果たすために必要な特技を持つ人とほかの人たちを巻き込む力を持っている人間力のある人。人間力のある人には、自分たちが活動する姿を見てもらい地域活動への思いを共有してもらった。特技を持つ人には、「この作業にはあなたが必要不可

欠」という思いを伝えることで参加につながった。

- ・ 一方、普段の活動への参加は強制としないことで参加のハードルを低くし、継続性を持たせている。
- ・ やれる範囲で最大限挑戦することを重視し、ダメでもよいので可能な限りやってみようという思いを共有している。からくり時計修理では、ちょっとやってみたいという住民の気軽な挑戦が成果へとつながった。
- ・ からくり時計の主題は「ブレーメンの音楽隊」。物語の中で動物たちは目的としたブレーメンにたどり着くことはなかった。それは仲間と力を併せて安心して暮らすことが、自分たちの本来の目的だと気付いたからだ。本プロジェクトの活動も多様な人々が持つ特技や個性を集めることでできたことも多いが、それと同時に目標に向かって仲間と作業すること自体に楽しみを見出しながら活動をしている。

(2) 本郷地区世代間交流会

ア 概要

高齢者の生きがいづくり・介護予防や地域住民間のつながりの構築等を目的に行われている活動。年齢や体力に関わらずみんなのできる活動を考える中でe スポーツの活用が検討され、令和4年から福祉ひろば利用者と小学生が参加するニンテンドースイッチを使ったスポーツ大会が始まった。令和6年には「世代間交流会」に変わり現在に至っている。従来の参加者に加え障害者就労支援施設も加わるなど世代や立場を越えた新しい形の交流会として定着しつつある。

イ 事例発表から

- ・ 地区生活支援員が中心となり、参加してもらいたい団体それぞれに声掛けを行った。口頭での説明だけでなく、実際にe スポーツを体験してもらうことで世代間交流への意図を深く理解してもらった。「これならみんなが楽しめる」という共通認識を持てたことが、事業継続に繋がっている。
- ・ 参画団体は、それぞれに得意とする役割が異なるため、周知や運営の充実、講座の多様化など様々な活動ができるようになった。
- ・ 交流会では、子ども達が得意とするゲームを大人に教える、大人が遊んできた遊びを子ども達に提供するなど、それぞれがやってみたい・得意とする遊びについて反映できるよう双方向の意見交換を心掛けている。また、会の終わりには年齢にかかわらず反省・感想をもらうなど、参加者をお客さんではなく会運営の一部と考えている。
- ・ 障害者就労支援施設「アトリエ M00」の参画や信大ボランティア団体VOLNETの運営休止など、参画団体の変化に合わせて内容を変えながら活動している。

(3) 島内地区防災フェスティバル

ア 概要

松本市の「岳都松本・山岳フォーラム」から「防災×キャンプ」事業の提案を受け、島内地区で実施することが契機となり始まった取り組み。防災を共通テーマに地区内外の多様な団体が協働し、実践的体験を通じて防災意識と相互連携を深めている。防災活動に関心がありそうな団体・グループで実行委員会を組織化した。

本発表では、発表者が関わり初開催となった令和5年度と令和6年度の事例を中心に発表が行われた。

イ 事例発表から

- ・ 参画者の募集については、グループの他に異分野の引き入れを積極的に進め、事業に広がりを持たせるような構造とした。「防災×衛生」や「防災×子ども」など、災害時に必要とされるトピックを「防災」をキーワードに組み合わせることで事業内容を直接的に防災と関わるものだけでなく、防災を多面的に考えるものとした。結果、令和5年度は15プログラム、令和6年度は26プログラムを提供した。
- ・ それぞれの団体が参加をしやすいよう、やりたいことを防災と掛け合わせながら実施してもらっている。動員型の「やらされる仕事」ではなく自分が出来そうなことを持ち寄ることで積極的な参加を促した。これにより、企画側は伝える楽しさを感じ、参加者も楽しく学べる場づくりを進めた。
- ・ 多様な団体が参加したことで、お互いに補完し合えるグループの連携が生まれたことは成果として挙げられる。
- ・ 様々な団体との連携を考えるにあたり、多様な主体と繋がっている個人・団体に参画してもらうことは大変重要。発表者が持つ関係性から参加してもらえた団体もある。普段から公民館活動を通じてコミュニケーションがとれている公民館の参加は、参画者を増やす意味において有意義であった。

3 質疑応答・意見交換

話題提供者・世話人・参加者が4グループに分かれ以下の意見交換を行った。

(1) 発表を聞いての感想

- ・ なぜ多様な住民参加が必要か考える場となった。様々な立場や視点が集まることで、課題解決への方法が広がることを感じた。
- ・ 地区の資源を生かす、関わる人間が楽しくやれる、世代間交流の場を作る、防災を地域で考えるといった話が聞けて参考になった。自分の地区の防災意識を高めることに苦労しているのでそのヒントを持って帰りたい。
- ・ 広げる、つなげる際は、誰から（どの団体から）声かけをしていくかが大事。
- ・ 核となる人がいる、相談先がある、やってみる気持ちがある人がいる事などが取り組みのきっかけになるのだと思った。
- ・ 動員型の取り組みは、継続が難しい。

(2) 自分の地区の課題、また課題に対して現在取り組んでいる事

- ・ 地区内の防災の意識を高めたいが、アパート等も増えてきており住民の意識統一が難しい。

- ・ 町会加入者が減っている中、町会の仕事を回すのが困難になってきているので、若い人に参加してほしい。
 - ・ コロナで中止になった事業の復活は「今までやっていたから」では復活や続けることができない時代になってきている。
 - ・ 新しい人や若い世代とのつながりがない。
- (3) 上記(2)で挙げた課題に、事例発表を参考しながらどのような取り組みが考えられるか
- ・ 世代を越えて人をつなげることが大事。中高生は AI やスマートフォンに詳しく防災訓練も受けていて知識を持っている。こうした子ども達を地域の資源と考え町会に関わらせることが必要。
 - ・ 若い人が参加しやすい工夫として本人たちの意見を直接聞いて当事者意識を持たせる、町会活動に関わることで将来のプラスになるようにしていくなどが必要。
 - ・ 町会の必要性を洗い出し、町会以外で担えることは町会から除外し、町会役員の負担軽減を図る。
 - ・ 交流会で防災すごろくなど、世代間交流×防災などもいいかもしれない。
 - ・ 公民館を多世代が集う場として活用できそう。児童館のように子ども達がいる場にし、大人が入っていくような形になれば良い。
- (4) 上記(3)に関して、どのような事なら始められそうか
- ・ 世代交流のツールとしてeスポーツが有効だとわかったので、eスポーツについてイベント開催を検討してみたい。
 - ・ 公民館は人や団体をつなぐ重要な機関であり、多くの人々が行きかう場所である。公民館長・主事は日頃から人間関係を構築している必要があり、一層人との交流・ふれあいを大切にしたい。

4 まとめ

第一分科会では、住民や団体など多様な主体が関わり合い課題解決の糸口を見つけた実施事例を扱い、地域活動に「多様なアクターがつながる」という視点を取り入れる有効性について実践事例を基に議論を行った。

グループワークでは、発表で得られた連携の有用性や成功事例を基に、地域の課題の解決方法について意見を交わした。世代や団体毎に特徴・得意とすることなどを挙げられ、事業推進に向けて新たな連携先を考えたいという発言も見られた。

各事例における多様な主体との協働方法は様々であったが、共通事項として「多様性を保ちながらつながった人々が、それぞれの役割を果たしながら主体的に活動することにより、楽しみを感じながら前向きに活動が展開されている」ことが確認され、そこに多様な主体が繋がることの有効性と実現のためのヒントを感じることができた。

日頃から多様な主体が集い、つながる場（地区公民館、福祉ひろば、町内公民館等）では、本分科会で確認されたことを参考にした積極的な実践が求められると言える。

第2分科会 みんなでつくる安心のまち～暮らしを支える地域の仕組み～

話題提供者：	丸山 花代子	(市福祉政策課)
	西村 宏美	(//)
事例発表者：	上条 貴子	(新村地区生活支援員)
	原田 裕	(プチ送迎ボランティア事務局長)
	松崎 希佳子	(島立地区生活支援員)
	清水 正明	(島立ボランティア連絡協議会会長)
	山田 任宏	(// 前会長)
コーディネーター：	尻無浜 博幸	(松本大学総合経営学部教授)
司 会：	降旗 清人	(第一地区公民館長)
会場：中央公民館 6階ホール／参加者：47名		

1 協議の柱

誰もが取り残されず安心して暮らせる福祉のまちづくりには、社会保障制度等の公的福祉の仕組みだけでなく、住民自身が地域参画し、お互いに支え合う仕組みが大切ではないか。本分科会では、住民の身近な困りごとの解決に地域で取り組む事例を共有しながら、住民が役割を持ち支え合える安心のまちづくりについて考える。

2 話題提供

- (1) 「松本市が目指す地域共生社会と松本市地域福祉計画～つながり・支え合いのセーフティネット～」(市福祉政策課)

ア 概要

市は「みとめあい、役割を持ち、ささえあって生きる『誰も取り残さない地域共生社会』をともにつくる」を基本理念とした第5期松本市地域福祉計画の策定を進めている。策定の背景には社会課題として、社会構造の変化や支援ニーズの複雑化があり、従来型の社会保障だけでは対応しきれない状況がある。人口減少、少子高齢化、核家族化、共働き世帯の増加などにより、地域の相互扶助や家族の助け合いによって成り立っていた支え合いの基盤が弱体化していることから、個人、家庭、地域、企業、行政などが世代や分野、支え手・受け手の関係を超えたつながりを強化していくことが求められる。

インフォーマルな取り組みとして、地域が中心となった支え合いづくり、関係づくりがあるが、公民館や福祉ひろばでの活動をはじめ、町会や地区での活動に住民が主体的に参加、交流することで、住民の社会とのつながりと住民同士のお互いに気にかけて関係性がより強固になっていく。地区には生活支援員が配置され、つながる場や助け合いの場づくりをコーディネートしている。

制度だけがセーフティネットではなく、人と人とのつながりそのものがセーフティネットであり、身近な困りごとを地域全体で把握することにもつながる。

3 事例発表

(1) 移動支援「プチ送迎」(プチ送迎ボランティア)

ア 概要

平成24年11月に事業開始。新村地区内及び近郊の大型店舗2か所と医療機関4か所へ、小型のリース車両を使ってドア to ドアで送迎を行うもの。利用者、運転者、賛同者から徴収した年会費と、新村地区社会福祉協議会、町会連合会、あたらしの郷協議会、松本市からの補助金で運営している。

イ 成果と課題

利用者からは、「安心して免許返納ができる」、「買い物の重い荷物を玄関先まで運んでくれるので助かる」などの好評をいただいている。また、運転者からも、「利用者が喜んでくれるので嬉しい」、「いずれ自分も高齢者となる。その時をイメージしながらボランティアを行っている」など、やりがいを感じて協力いただいている。

一方で、運転者の高齢化が進んでいるが新たな運転者が確保できないことや、利用者の高齢化が進み車両の乗り降りが危なくなっているが運転者は介護資格のないボランティアのため利用を断らざるを得ないケースがあるなどの課題が出ている。

(2) 有償生活支援「おたすけ隊島立」(島立ボランティア連絡協議会)

ア 概要

令和2年8月に事業開始。主に高齢者の困りごとをお手伝いする支え合いの活動。具体的には、ゴミ出し、草取り、雪かきを有償でお手伝いするもの。協力隊員には謝礼を支給している。運営は、島立ボランティア協議会が中心となって行っている。松本市社会福祉協議会及び地区社会福祉協議会からの補助金で運営している。

イ 成果と課題

依頼者と近所や地域とのつながりができ、普段から気にかけて関係性が醸成されたり、協力隊員同士の仲間づくりにつながったりするなど、地域のつながりづくりに一定の効果が表れている。

一方で、協力隊員の高齢化が進んでおり、日中活動できる協力隊員の確保が課題である。また、今後も継続して活動できるように、料金などのシステムの見直しも必要となっている。

4 グループワークによる意見交換

(1) 事例発表を受けて考えたこと

ア 市や社協の活動を知らない方が多いので、もっと周知をした方がよい。また、地区ごとに夜間や休日に市主催の学習会などを開催することで、担い手確保につながるのではないかな。

イ 運転手の担い手不足については、企業などに協力いただいてはどうか。

ウ 住民の入れ替わりの多い地域では、こういった取り組みが根付くのは難しい。コミュニティスクールなどを通じて学生からの協力を得るのはどうか。

エ 有償ボランティアにはできることとできないことがある。利用者の要望が増えてきたら、協力会員の負担の増加や財政面の負担などの課題が増えてくるのではないか。

オ 支えてほしい方の中には、できることがあれば支える側にもなりたいと思っている人もいる。そういう思いを汲み取れる場が作れると、より地域のつながりが深まるのではないか。

(2) 地域でどのように生かせそうか

ア 要支援者を把握するために、町会ごとにささえあいマップを作成してはどうか。

イ 梓川の送迎ボランティアも高齢化したため、のるーとを活用いただくようにした。

ウ 買い物について、送迎支援から移動販売に切り替えたところ、たくさんの方が集まるようになり、住民の情報交換の場としてのコミュニティにつながった。

エ 若者は年を取ったら困るということの想像がつかないと思う。そういうことを意識させる機会を設けてはどうか。

オ 白板地区の送迎支援事業ではタクシー会社に依頼をしている。運営費については、町会費の他、町会だよりへの広告掲載や定期に開催するバザーの売上金を充てている。

(3) 地域にどんな困りごとがあるか

ア 有償ボランティアで草刈りをした際に、剪定もしてほしいと頼まれたことがある。

イ 町会の役員の担い手不足があり、ある程度強制的に割り振っている状況。

ウ 団地に一人暮らしの高齢者が、灯油を部屋まで運ぶことが難しい。

エ 町会加入率の減少などにより、困りごとの声を拾いづらくなっている。

オ 以前は高齢者の支援は民生委員の役割であったが、現在は他にも様々な人やサービスが関われるようになっている。しかし、それを把握できている高齢者は少ないと感じる。高齢者にも受け取れるような情報発信が課題ではないか。

5 まとめ

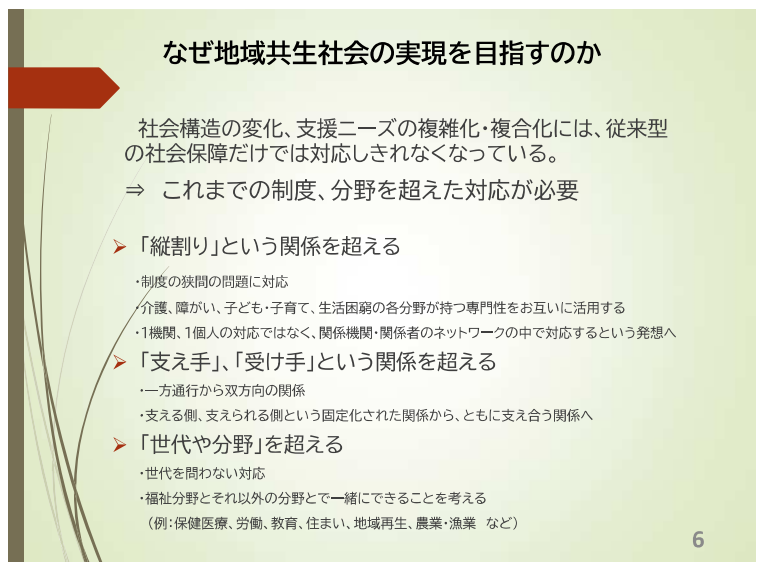
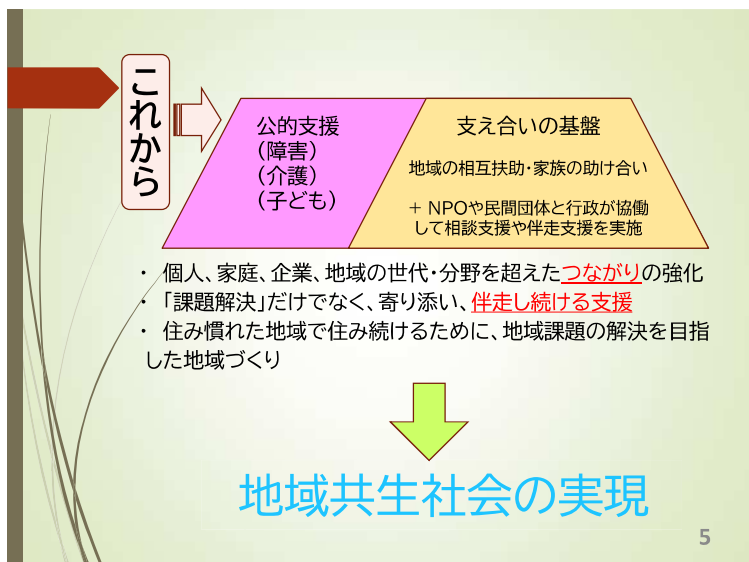
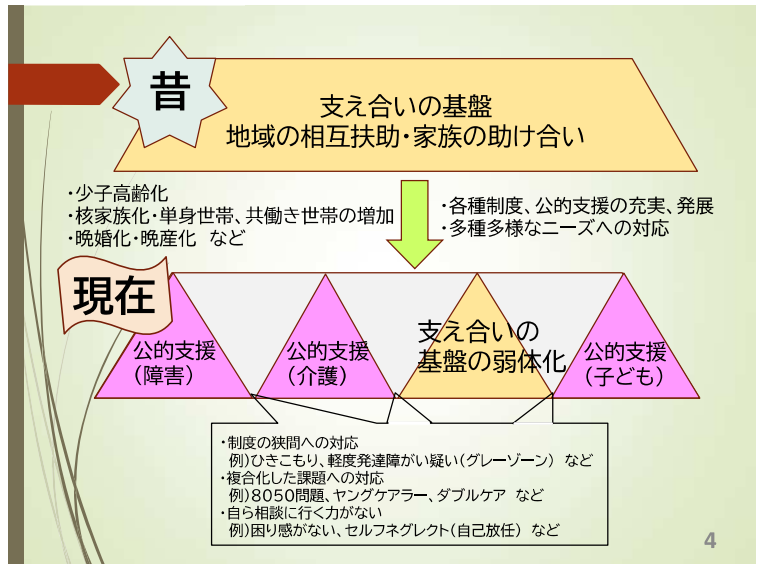
本分科会のテーマ、「みんなでつくる安心のまち」の「みんなで」とは、相互扶助の機能が低下している現代において、住民一人ひとりが「ひとごと」ではなく「我々事」として、主体的に関わることの重要性を示している。

地域は、地区や町会といった住民組織、福祉ひろばや公民館、地域づくりセンターなどの行政組織、企業やNPOといった民間事業者など、幅広い人や組織で構成されている。これらの多様な主体がそれぞれの暮らしを支え合える仕組みづくりが求められている。

この集会では、グループワークで多くの意見交流がこれまでもなされてきた。さまざまな地区の参加者が各地区の特色を話し合い、それぞれの課題を共有することができた。ここで得られた気づきを、それぞれの地区で実践していくことが、「みんな」でつくる「安心のまち」を実現する一歩になるだろう。



未来へつなく私たちのまちづくりの集い



第5期松本市地域福祉計画の目指す姿

【基本理念】

「みとめあい、役割を持ち、ささえあって生きる
『誰も取り残さない地域共生社会』をともにつくる」

高齢者や子ども、障害のある人もない人も、外国人住民も日本人住民も、お互いの個性や異なる価値観を認め合い、その地域に暮らす誰もが役割を担い、困ったときには頼り合うことのできる、「誰も取り残さない地域共生社会」の実現を目指します。

【基本目標】

- 1 安心して暮らせるまちづくり
～公的な福祉の提供と協働による支援体制の推進～
- 2 誰も取り残さない仕組みづくり
～包括的支援体制と地域づくりの推進～

13

第5期計画の概念図

「あんしん」くくり
公的な福祉制度と
サービスを提供する

「だれもあひ」くくり
誰もが暮らしやすい地域
づくりに住民等が参画する

基本理念
みとめあい、協働をもち、立てえあって生さる
「誰も取り残さない地域共生社会」
をともにつくる

「れんけい」くくり
見えにくい課題に
気づいて支援につなげる

「かんけい」くくり
ゆるやかにつながる・
つながり続ける

行政が中心となつて
つくるセーフティネット

住民・事業者などが中心となつて
つくるセーフティネット

基本理念に掲げる「誰も取り残さない地域共生社会」をつくるため、行政・住民・社協・企業・NPO等が協働することで、「あんしん」「れんけい」「だれもあひ」「かんけい」の4つのセーフティネットが重なり合う体制の構築を目指す。

4つのセーフティネットは、市民が困りごとを抱えた時に、いずれかに依存するのではなく、それぞれが機能して連携することで、困難を抱えても安心して暮らせる、重層的なケアのある地域を目指す。

14



- [illegible]

- 16

地域共生社会と
生活支援体制整備事業

17

生活支援体制整備事業

介護保険法・社会福祉法

元気な高齢者をはじめとする**多世代**の
地域住民が**担い手として参加**する、
住民主体の活動団体による
生活支援サービス・介護予防サービスの
提供体制を構築し、
地域の支え合いづくりを推進
していくことを目的とする

18

元気な高齢者をはじめとする**多世代**の
地域住民が**担い手**として**参加**する、
住民主体の活動団体による
生活支援サービス・介護予防サービスの
提供体制を構築し、
地域の支え合いづくりを推進
していくことを目的とする

生活支援体制の整備ってなに？

・学び、生きがいづくり、健康づくり（自助）

→ 公民館・福祉ひろば・体操教室・サロン活動など

身近な困りごとを把握



・助け合い・つながりづくり（互助）

→ ゴミ出し、買い物、雪かきなどの身近な支援、有償ボランティア、見守り等の仕組みを作っていくこと

生活支援体制整備事業は、市全体では、福祉政策課が事務局となり、地域つながりづくり庁内支援チームで35地区では、地域づくりセンター（行政）・地域包括支援センター・市社会福祉協議会（地区生活支援員・地区担当職員）・住民のチームで進める！

19

地区生活支援員とは・・・

住民が進める地域福祉を支援し、地域のボランティア育成などを進める社会福祉協議会の職員です



地縁組織、ボランティア、NPO法人、社会福祉法人、企業等と連携しながら日常生活上の支援体制の充実と強化（たすけあいづくり）、および高齢者の社会参加（つながりづくり）の推進と仕組みづくりを支援する職員
地域づくりを進める地域づくりセンターに配置

市はこの業務を社協へ委託している

地区の「助け合いの場」・「つながる場」と高齢者をコーディネートする地区に、それらがいない場合は、他の職員と一緒に、仕組みづくりを支援する



協議体がバックアップ！

20

生活支援体制整備事業をバックアップする協議体とは？

<協議体の役割>

- ・地区生活支援員等業務への支援の検討
- ・市及び地区ごとのニーズとサービス提供、情報の明確化
- ・介護予防・生活支援に関する企画、立案、活動方針の協議
- ・情報交換、地域づくりにおける意識統一を図る場

<松本市の協議体は>

全市レベルの協議体＝地域つながりづくり関係者連絡会
35地区の協議体＝地区の取り組み状況に基き役割が近い既存の会議体等を協議体として位置づける

21

つながりづくりの具体例



福祉ひろばの活動



公民館活動



民間の介護予防教室



町会サロン
(元気高齢者がサロンを運営)



オレンジカフェ
(地域の人が地域の高齢者を支える展開)



いきいき百歳体操
(住民主体の介護予防教室)

22

助け合いづくりの具体例

移動販売車



買い物支援（青空市）



配食サービス



移動支援



有償サービス



23

人と人とのつながりそのものがセーフティネット



- 時代の変化の中で、また新たな問題が出てくる
→ 予防のセーフティネットをどのように作っていくか
- 重層的支援体制整備事業は、つながりを作りやすくする事業
→ つながり先や連携先を作る(増やす)ことでセーフティネットを広げることができる

24



【 新村地区の概要 】

1. 場 所	松本市のほぼ中央
2. 人 口	3, 074人
3. 世帯数	1, 342世帯
4. 高齢化率	35. 7% (市内で9番目)
5. 地区の現状	スーパーマーケットや雑貨店ゼロ

令和8年1月1日現在

ものぐさ太郎像

【 プチ送迎ボランティア事業取り組みの動機 】

- 平成19年、松本大学の学生が、地区の縁側「みすず屋」でのお年寄りとの会話から、「バス停まで歩くことが大変」との話を聞き、当時の町会連合会、民生児童委員に相談したことがきっかけ。
- 同時期、松本市で開始されたコミュニティバスの乗率率向上が課題であった。

平成22年、地区内全家庭にアンケートを実施。

結果...

- ・上高地線があるが、500メートル圏内の家庭は約30%。
- ・買い物の荷物は重くて持ち帰れない。

そこで...

当時の町会連合会長・公民館が
高齢者の「足の確保」に取り組む！

- ・交通弱者対策を考える組織を、当時の町会連合会と松本大学の間で発足。
- ・行政職員により、高齢者の「足」確保に向けた学習会を実施。

平成24年

- ・当時の町会連合会長が、公民館に「プチ送迎ボランティア」事業開始の検討をお願いした。
- ・公民館が当時の町会長および民生児童委員に「プチ送迎ボランティア」発起総会の呼びかけをおこなう。

【 プチ送迎ボランティア発起総会での確認事項 】

- ・自動車は当時の町会連合会長から借用する(ガソリン代は会で負担)。
- ・互助の精神により、会員(運転者・利用者・賛同者)は一律年会費2,000円。
- ・利用者の資格は地区内在住者。運行範囲は地区内か地区外約2キロ範囲。
- ・送迎はドアtoドアとする。
- ・事務員は賛同者から出す。

その後...

【 プチ送迎ボランティア事業開始！ 】

・平成24年9月「プチ送迎ボランティア」を設立。11月から試験運行を開始。
地区内2つの医療機関限定。会員十数名、利用者2名でのスタート。

・当初は当時の町会連合会長の個人車を使用。



平成26年、町会の補助金や松本市の「地域力アップ提案事業」の制度を利用し、10年落ちの中古車を購入。

・試行錯誤のうえ、運行ルートを増やす。

【 運行先と曜日について 】

買い物の行先

- ★梓川デリシア 第2火曜日
- ★山形村アイシティ21 第2、4金曜日

医療機関の行先

- ★ 小岩井内科クリニック 第3火曜日
- ★ 宮澤整形外科 毎週木曜日(ただし第5週はお休み)
- ★ 花村医院 第3水曜日と偶数月の第2火曜日
- ★ 岡野医院 梓川デリシアに買い物に行く際、立ち寄り
買い物をされている方が終わり次第迎え。

【 プチ送迎ボランティアの運営 】

1. 運営資金

年会費2,000円(利用者・運転者・賛同者)、町会連合会、あたらしの郷協議会、松本市、新村地区社協

2. 運行実績 (運行当初 平成24年11月からの累計)

平成28年 8月 運行 500回 1,661名
令和元年 7月 運行1,000回 2,500名
令和6年 2月 運行1,500回 3,813名

3. 会員数 (年度別合計)

令和元年度	利用者 33名	運転者 21名	賛同者 61名	合計 115名
令和2年度	利用者 35名	運転者 19名	賛同者 62名	合計 116名
令和3年度	利用者 28名	運転者 12名	賛同者 53名	合計 93名
令和7年度	利用者 24名	運転者 14名	賛同者 48名	合計 86名 (令和8年1月1日現在)

プチ送迎ボランティア運行500回記念



プチ送迎ボランティア運行1000回記念



プチ送迎ボランティア運行1500回記念



【 プチ送迎車両をリース契約車両に変更 】

- ・令和6年。プチ送迎車両の老朽化や各部の不具合等が散見されるようになる。
- ・5月。新規の運転者確保が難しいなか、高齢化する運転者や利用者の安全確保のため、安全装置が充実した軽自動車(リース車両)へ更新することを決定した。



【 プチ送迎運転者の流れ 】



① 地域づくりセンター出発



② 利用者宅へお迎え



③ 医療機関に到着



④ 利用者宅へ送り届け



⑤ 送迎車両を戻す



⑥ 運行表とカギを戻す

【 利用者が利用開始となるまでの流れ 】

- ① 利用希望者等から連絡が入る
- ② 公民館長と事務局員がお宅訪問
- ③ 利用開始



【 課題(1) 】

運転者の確保

運転者は14名。このうち75歳以上の運転者が数名。



新規の運転者を確保するため、一人ひとりに声をかけているが、なかなか担い手がみつからない状況。とくに、75歳以下の比較的若い世代の参加が課題。

【 課題(2) 】

利用者の高齢化

利用開始当初、まだまだ元気だった方が10年もすると、足元がおぼつかなく、プチ送迎車両への乗り降りが危ない方が増加。



運転者はボランティアであり、介護資格を持たないため、対応できる範囲に限界がある。

【 課題(3) 】

利用者側の意識

最近利用者が、プチ送迎ボランティアの活動を、プチタクシーと勘違いし、時間通りに来ないことに不満を伝えてくる。



タクシーではないので時間通りに運行できない旨お伝えするが、お伝えした内容を忘れてしまう方が増えてきた。

【 課題を踏まえた展望 】

(1) 運転者の確保

・女性運転者の確保



(2) 利用者の高齢化

・踏み台の購入
・運転者からの聞き取り



(3) 利用者側の意識

・利用申込み時等の説明
・お便りの送付



【 運転者・利用者の声 】

運転者の声



・利用者が喜んでくれるので嬉しい。
・ボランティアをさせていただいているという
気持ちで毎回収り組んでいる。
・いずれ自分も高齢者となる。その時をイメー
ジしながらボランティアを行っている。

利用者の声



・買い物の際、重たい荷物を玄関先まで運ん
でくれるので助かる。
・もっと運行先、利用日を増やして欲しい。
・安心して免許返納が出来る。

ご清聴
ありがとうございました



おたすけ隊島立の 活動について

できることを無理なくできる時に…

島立地区生活支援員 松崎 希佳子

有償生活支援 「おたすけ隊島立」とは

「島立地区ボランティア連絡協議会」が母体となって行っている
住民参加型の支え合いの仕組みです。

主に高齢者の困りごとを、お互いさまの気持ちで、無理のない範囲で
ちょっとお手伝いする支え合いの活動です。少しのお金を払うことで

「お願いしやすくなる」また、支える側も「張り合いになる」と、

令和2年8月より「有償」での取り組みがはじまりました。

島立地区の概要

奈良井川の西側に位置し、合庁周辺の商業地域と農村地域から成る
・長野自動車道松本インターチェンジ ・国道158号線
・アルピコ交通上高地線

・長野県松本合同庁舎 ・長野県赤十字血液センター
・松本市歴史の里 ・日本浮世絵博物館

・三之宮沙田(いさごだ)神社(御柱祭)
・津島神社(裸祭り) 長野県無形民俗文化財

・米や野菜などの農産物(特に島立キュウリ・トマト)
・造り酒屋(大信州・亀田屋)

・味噌醤油醸造所 など 水源や地下水が豊富

・一部市街化調整区域

・内科、外科、歯科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、整形外科、産婦人科、脳神経外科 など

・JA(直売所)、コンビニ(合庁周辺)、大型スーパーは無し

世帯数 2,906世帯(令和8年1月現在)

人口 6,443人

高齢化率 31.3%(後期高齢化率:20.7%)

独居高齢者 238人

きっかけ

- ・高齢化率が30%になり、独居高齢者や高齢者のみの世帯が増加
- ・民生委員の訪問時の聞き取りから、自分の家で暮らしていく上でちょっとした困りごとがあることがわかった
- ・介護保険では対応できない支援が地域に求められてきた
- ・他地区の取り組みを視察し、島立にも支え合う仕組みが必要になるだろうとの意見が多数あった
- ・コロナ感染症の流行や、働き方の変化により、家族や地域のつながりが希薄になり、ちょっとした困りごとをお願いしにくくなってしまった
- ・ボランティアの活動の場が減少してしまった → デイサービスやサロン活動以外にできることはないか？

そこで、誰にでもできそうなお手伝いをしよう！

ゴミ出し



草取り



雪かき



まずは、資格も必要なく、
家の外でできる
ちょっとしたお手伝い

他地区の取り組みを参考に仕組みをつくる

(四賀、中央、社協、伊那市日影地域などを参考に、地区職員と福祉ひろば推進協議会、ボランティア連絡協議会が中心となり概要を作成)

【利用料金】利用者

＊ゴミ出し 1回100円
(1回2袋まで・可燃・資源)

＊草取り 200円
(約1時間 一人につき)
玄関周辺・生活に支障のあるところ

＊雪かき 200円
(一人につき)
玄関から道路まで

【報償費】協力隊員

＊ゴミ出し 1回200円
(1回2袋まで)

＊草取り 500円
(約1時間 一人につき)

＊雪かき 500円
(一人につき)

【運営費】

＊松本市社会福祉協議会の
「住民主体事業」補助金を利用

・報償費
・草払機や雪かきなどの備品
・消耗品
・活動費 など

【コーディネート】
地区生活支援員

活動の様子 1



80代独居女性のお宅

70代の女性が草取り

奥は男性が草払い機で作業



70代独居男性のお宅

杖を使用しているので、転ば

ないように短く刈りましょう



80代独居女性のお宅

土曜日だったので高校生の

協力隊が出動しました

活動の様子 2



「喜んでもらえれば、それでいいじゃん」

協力員同士のつながりもできます

基本的には何人かで作業します



時には、デイサービスや公民館周辺の草刈り

にも協力してくれます

利用登録のながれ

独居、または高齢者世帯の方、障がいをお持ちの方など

①申し込み ご本人、家族から電話または申込書の提出

②調査訪問 地区生活支援が訪問して、支援内容や日程の調整

(草取りや雪かきの範囲の決定はボランティアの役員が同行)

＊シルバー人材センターや専門業者を紹介することも…

③協力隊員の調整

④支援実施

⑤利用料の確認、支払い、受け取り

協力隊員の登録について

資格や性別は問いません。地区内のお年寄りのちょっとしたお手伝いのできる方。（中高生は親御さんの許可があれば可能）

①できる時間にできる範囲で（利用者との調整は地区生活支援員）

②報酬 ゴミ出し 1回200円

草取り・雪かき 約1時間500円

1か月単位で精算、地域づくりセンターで受け取りサイン

③保険 万が一のケガや物損に対応する損害保険に加入

④研修 スキルアップ研修や協力隊員の集い・情報交換など

利用登録者数と協力隊員数（令和7年12月現在）

【 利用登録者 】

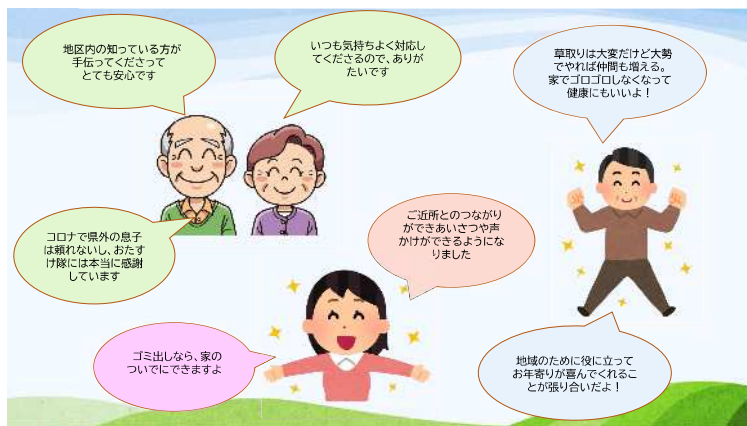
令和3年度 令和7年12月現在
37名 → 48名

活動中
ゴミ出し…23名（16）
草取り …27名（13）
雪かき …26名（18）

【 協力隊員数 】

令和3年度 現在
38名 → 65名

男性 … 42名
女性 … 23名
学生 7名含む



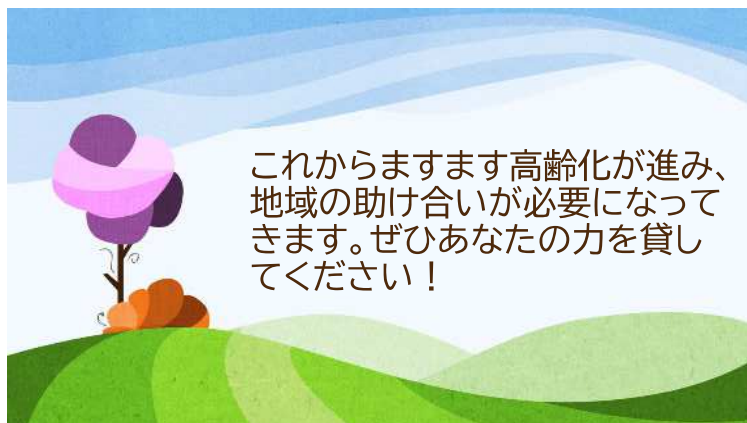
成果と課題

- ・お互いさまの気持ちの醸成、ご近所の変化に気づく
- ・学生が地域に関わるきっかけづくり
- ・協力隊員自身も地域活動参加でフレイル予防や孤立予防に！
- ・健康意識の向上と仲間づくり
- ・中山、寿、新村、岡田など、活動が広がっている

＊松本市社会福祉協議会の助成金の減額→地区社協で補填

＊日中活動できる協力隊員の高齢化

＊継続できる活動するために料金などのシステムの見直し



第3分科会 子どもの経験値を増やすコミュニティスクール ～大人になるまでにできること～

話題提供者：小松 伸行	(旭町中学校 校長)
降旗 都子	(第三地区まちづくり協議会 副会長)
オブザーバー：早坂 淳	(長野大学 社会福祉学部 教授)
司 会：赤羽 絵美	(今井公民館 主事)

会場：旭町中学校 教室／参加者：37名

1 協議の柱

学校だけでは学べない貴重な体験の場を、地域と協働で作る、それがコミュニティスクール（以下CS）です。CSを通じて得られる多くの発見や喜び、かけがえのない経験の積み重ねについて、実際の活動事例を基に、一緒に考えます。

2 話題提供

(1) 子ども・地域を巻き込み、持続可能性を探るCS活動（小松 伸行氏）

ア 生徒が参加する学校運営委員会（旭町中学校での取組み）

(ア) 運営委員は、「中学生は、一生懸命考えながら生活していることが分かった」、「中学生と話をすると新しい発見がある」という気づきを得た。

(イ) 生徒は「地域の人と一緒に何かできるかも」、「地域の方は思った以上に頼りになる存在」という気づきを得た。

イ 地域と共に探った、持続可能な奥穂高岳登山（大野川小中学校での取組み）

(ア) 学校登山として実施する場合、登山に不安な職員が多いこと、生徒全員が山頂を目指す登山はハードルが高いこと、学校だけで調整や安全確保などを行うのは負担が大きいなどの課題があった。

(イ) 伝統の奥穂高岳学校登山をCS主催にすることで、参加者の希望制が実現し、登山経験豊富な地域の方の引率が可能になった。また、登山をしたい子どもたちの居場所ができただけでなく、関わる大人の居場所になった。



(2) 地域住民だからこそできる学びの提供（降旗 都子氏）

ア 製糸業・近代産業発展の歴史を後世に伝えるため、歴史冊子・マップを作成。

イ 漫画家の協力、松本工業高校による動画作成等、地域のために動いてくれる人材との出会いから活動が発展

ウ 教員の異動があるので地域学習には限界がある。

エ 子どものために活動したい人は沢山いると思われるので、地域住民・教師の「やりたい」を叶えるために、人材バンクのような、気軽に相談、実行可能な体制を整える必要がある。



オ 実際にCSを経験した学生の発表や感想

(ア) 大学1年生のKさん

a 登壇した際に話した内容の抜粋

小中学校での地域学習などの経験は、高校3年生の進路選択の際に役立った。学校と自宅、中心市街地の自習スペースの間を行き来する中で、幼少期からなじみのある、場所や建物を意識、松本で育ったことを実感。

城下町、蚕糸業の歴史、水の豊かさ、芸術、自然について、中学時代に、松本のために熱心に活動する方たちに教えていただいた。

地域学習、探求学習、CSなどの学習は、社会との対話、目的達成のために手順を考え、問題に対処する、かけがえのない経験だった。また、学習の場に携わる大人が増え、指導の手厚さが向上するのも素晴らしいと思う。これを前提としつつ、私は二つの立場から意見を持っている。

学生の視点からは、探求学習はあくまで「経験」であり、「学習」の要素を充実させてほしいと考える。探求学習は、好きなことを学ぶ楽しさと、そのためには勉強が必要と気づく、教科学習の入り口として機能してほしい。松本の最前線で活躍する方々は学問を修め、実績を積み上げており、自分も地道に学問を修めたいと感じている。また、興味の対象が地域の自分は、地域についての探求学習は有意義だったが、児童・生徒の多様な興味関心を伸ばすには、地域に限定しすぎない柔軟さも必要と考える。

松本市民の視点からは、小中学校のカリキュラムの中で地域について学び、地域の魅力に気づく機会が全員にあるのは大切だと考える。松本の魅力をよく理解しているのは地元の住民より、他県からの移住者ではないかと感じ、恥ずかしさを覚えた経験から、一層地元の学生には松本について知ってほしいと感じる。

b 参加してみた感想や自身の気づきにつながったこと

実際に地域教育を受けた方のフィードバックが貴重であると、参加者や早坂教授からお声がけいただき、貢献できたと感じる。小中学生の現実的な視点から意見を伝える場面が多かったが、この感覚と大人たちの感覚が違うことに少し違和感を覚えた。

一方で、大人の経験の蓄積や物事を正確に判断する力も強く感じた。子供と大人の間といえる大学生の自分は、双方の架け橋として機能できるよう、今後も教育に関わりたいと感じた。

c 今後、行政職員や周りの大人たちに望むこと

実際に教育を受ける立場の意見や感覚を大切に進めてほしいと考える。

「何がやりたいのか」との問いかけでは、物事の考え方や伝え方を知らない子どもたちは意見をうまく表現できず、本当にやりたいことは聞き出せないと思う。大人の価値観や先入観を押し付けず、様々な方法を丁寧に試しつつ、子どもの表現を助けられるように、導いてほしいと思う。

(イ) 高校3年生のTさん

a 登壇した際に話した内容の抜粋

地域の方が公民館で開催した無料の学習塾に参加したおかげで、自分の課題であった数学の苦手意識の克服と、新たな居場所、人や地域との関わり大切さを学び、進路選択に役に立った。

高校の探究では、戦前・戦中の白黒写真をAIでカラー化して、若い世代が戦争を考えるきっかけづくりの活動に取り組んだ。写真収集を文書館、地域の方に依頼、実際の体験談をお聞きして、地域と関わってきた。

これらの経験から、自分から地域の知らない人と関わるのは、勇気が必要であるが、年代も性別も違った人と関わることで視野が広がり、人とのつながりの創出、興味関心を広がり、進路選択にも繋がると感じる。

b 参加してみた感想や自身の気づきにつながったこと

地域と関わる学習は、子どもの経験値を広げるためだけでなく、大人の成長にも寄与していることが分かり、非常に大切だと改めて認識。

また、意見交換を通して、子どもが思う以上に、地域の大人が子どものことを真剣に考えてくれていて驚いた。CSの取り組みが発展し、部活動の地域移行や学校登山の移行なども進みつつあると聞き、当時よりも地域と関わる機会が確実に増えており、嬉しく感じた。

ただし、すべての子ども・家庭に地域との関わりを強制せず、それぞれの思いに配慮しながら、関わりたい人がより気軽にかつ広く地域と繋がれる環境づくりが、今後さらに必要になると感じた。

c 今後、行政職員や周りの大人たちに望むこと

当時は年齢差もあり、地域との関わりに少し怖さや近寄りにくさを感じていたが、少しでも和らげる工夫があれば、より気軽に地域と関われたと思う。実際に、学校の補習時間を通して地域の大人の方と話す機会があり、心の壁が次第に小さくなった。こうした交流機会を増やすために、子どもたちが地域との関わりを「楽しい」と思え、大人になっても心に残るような場を作ってほしいと願っている。



3 意見交換

(1) Aグループ ～まずは関係づくりと姿勢を見せること～

一人一人の声を聞くことが子ども若者の経験値獲得のための出発点。一定の年齢になると物事のデメリットを考え始める。その中でも取組む意図や意味を捉えながら、先生・地域・公民館だけでなく、親の後押しも重要。

大人が粘り強く、熱意を持って取り組んでいる姿勢を見せることが大切。受け取ってくれる子どもは必ずいることを忘れずに、継続して取り組む。

(2) Bグループ ～経験値は「共につくるもの」～

子どもをもっと信じて任せる。企画や運営を一緒に行う。大人が主導・守るのではなく、何をやりたい・学びたいのか聞く。その結果、子どもの経験値が増え、

大人の負担も減り、持続可能な形になる。

(3) Cグループ ～原点は大人、主体は子ども～

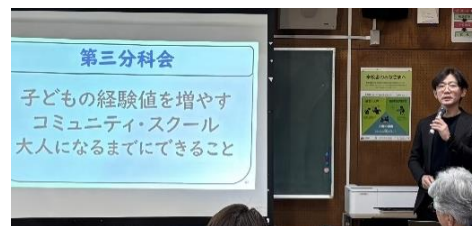
CSという言葉は新しいが、実践自体は昔からあった。主体は子どもだが、原点は大人。子どもが何を求めているかだけでなく、大人に何ができるのかという視点も重要。地域が常にか開かれている、受け皿になっている状態が重要。

(4) Dグループ ～CSは選択肢を増やす仕組み～

CSは「子どもの可能性の選択肢を増やす場」だと感じた。子ども若者にとって第三の居場所（サードプレイス）が必要。公民館は有力な拠点になる。

教員・保護者ともに多忙であり、コーディネーターの役割が重要。

「やってみたらよかった」が継続の鍵。



4 まとめ【各発表者から学んだこと・全体総括】

(1) 性質の異なるCSの事例及び地域住民としてCSに関わってきた事例より

ア 子どもと地域住民が共に企画運営することの重要性

イ 既存の学校行事をCS主催とすることで、多様な人が関わり合える持続可能な行事に生まれ変わる可能性があること

ウ CSに関わる大人の居場所づくりになり得ること

エ 地域の愛着の熟成のためには地域を知ることが重要であること

オ 地域を教える役割は、異動等がある教員より地域住民が担う方が望ましい

(2) 小中学校時代にCSを通して、地域住民と接した経験を持つ学生の話より

ア 視野が広がり、人とつながりが生まれ、興味関心が広がること

イ 進路選択の一助になり得ること

ウ 地元の魅力に気付くとともに、愛着を持つきっかけを与えること

エ 大人は、先入観を押し付けず、様々な方法を試しながら、子どもがやりたいことをうまく表現できるよう導く必要があること。

(3) オブザーバーとして参加いただいた早坂教授の講評より

ア 「8つの外せない背景・課題」から、CSに取り組む意味等を再確認

イ CSを持続可能にするための4つの解決策「風の人から樹の人へ」、「個別の活動をつなげる」、「活動の見える化」、「人と活動をつなげる」

ウ 大人にとって、CSに関わることは有意義

CS事業を切り口として、仕掛ける側の目線（学校職員、地域住民等）及び受取る側の目線（児童生徒）の発表から、大人になる前に地域住民（＝他者≡社会）と関わる意味や方法等を共有することができた。

子どもの経験値を増やすために、今回学んだことを生かして、松本市各地区の特色ある地域性や移り変わる時代に沿った活動が広がっていくことを望みたい。

コミュニティスクールの可能性

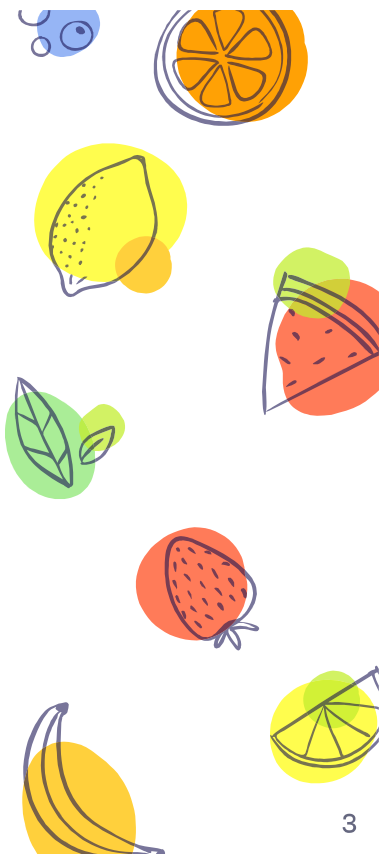
旭町中学校 小松伸行

コミュニティスクールとは

子どもたちの豊かな成長を
支えるため
地域とともにある
学校づくりの仕組み

本日のメニュー

1	自己紹介
2	旭町中コミュニティスクール
3	コミュニティスクール主催 奥穂高岳登山
4	居場所づくり

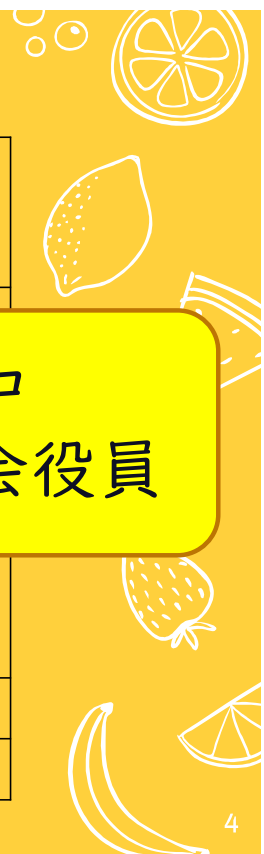


3

2 旭町中コミュニティスクール

町会連合会関係	町会連合会会長 学校応援団代表 子ども育成会長
公民館関係	公民館長 公民館主事 地域づくりセンター長
関係団体	同窓会 児童館 信州大学医学部総務課 松本第一高等学校 信州大学学生
PTA	PTA会長 副会長
学校職員	校長 教頭 教務主任 各担当

旭町中
生徒会役員



4

2 旭町中コミュニティスクール

2025.06.05
第1回

地域の皆さんと話を
してみたら、思った以
上に身近で頼れる存
在に感じた。

中学生のことを気に
かけてくれているのが
わかってうれしかった。

中学生ともっと
話がしてみたい。

中学生が一生懸命
考えながら生活して
いるのがわかった。

地域の方と一緒に
何かができる気が
した。



5

奥穂高岳登山

奥穂高岳登山

日程の概略 (2023 実施の内容です。変更になる場合もあります。)

【1日目】7月22日(火)

安曇支所発…大野川校発…上高地ビジターセンター着…上高地発…横尾(昼食)…湊沢ヒュッテ着

6:10 7:00 7:30 10:30 14:30

【2日目】7月23日(水)

湊沢ヒュッテ発…コースごと行動(チャレンジコース・パノラマコース)…(山頂到着)…湊沢ヒュッテ着

6:00 9:30 14:00

【3日目】7月24日(木)

湊沢ヒュッテ発…横尾着…徳沢園(昼食)…上高地着…上高地発…大野川校着…安曇校着

7:00 9:00 10:30 13:00 13:40 14:20 14:40



2023 早朝の湊沢

参加費用概算 約29,000円～34,000円(小学生 約23,000～28,000円)

内訳 宿泊 1泊14,000円(小学生は11,000円)×2泊=28,000円(22,000円)

ガイド費用・保険加入等 1,000円～6,000円

*宿泊は、本年度の料金ですので、改定されることがあります。

*ガイド費用等につきましては、参加者の人数によって変動します。

*実費集金をいたします。

6

奥穂高岳登山 2023年

- 1 仲間と一体感を感じた。達成感があった。
- 2 登山を楽しみにしている生徒がいる。
- 3 地元の皆さんの思い出のある登山。

奥穂高岳登山 課題

- 1 登山に不安な職員が多い。
- 2 調整や安全確保など実施に向けた負担が大きい。
- 3 生徒全員が頂上を目指す登山はハードルが高い。

4 コミュニティスクール主催 奥穂高岳登山

「奥穂高岳登山を持続可能にするため」

主 催 ⇒ コミュニティスクール
引 率 ⇒ 経験豊富な地域の方
参加者 ⇒ 希望者

学校の課題は地域の課題 地域の課題は学校の課題

9

4 居場所づくり

⇒ R9 部活動の完全地域展開

⇒ 地域クラブ（まっチ

コミュニティスクール
としてつくることは
できないだろうか。

⇒ 自分らしくいられる居場所

4 居場所づくり

子どもたちの居場所

||

私たち大人の居場所

11

4 居場所づくり

コミュニティスクールの可能性

子どもたちの居場所

||

私たち大人の居場所

12

話題提供の概要

2012年から、カタクラモール再開発問題に取り組み中で、現在のイオンモール松本のある場所に松本の製糸業をはじめとする近代産業発展の歴史があることを知り、息子たちから「なぜ地元の歴史なのに、学校で誰も教えてくれなかったのか?」

と問われたことをきっかけに、この歴史を後世に伝える活動を始めました。

活動する中で、地元の小中学生に地域の歴史を伝えるためには教科書が必要と考え、第三地区まちづくり協議会として、子ども達にも受け入れやすい漫画という形で「お蚕様から生まれた町」という歴史冊子と、大正時代と現代のまちの地図を見比べられる歴史マップを作成し、市内小中学校、図書館、近隣の高校に配布しました。

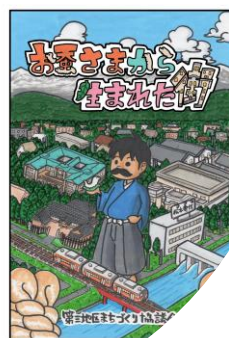
その後2022年にはこの漫画を、松本工業高校の生徒さんたちにアニメーションにさせていただき、現在も松本市の公式YouTubeで配信しています。

毎年これらを使って清水中学校の一年生とまち歩き学習をして、まち歩きを入口とした子どもたちの探求学習のお手伝いをしています。



イオンモール松本で制作発表会を開催

片倉松本製糸場の事務所棟をデザインしたイオンモール松本のきらめきコートで完成披露会をしました。



『お蚕様から生まれた街』は松本市の公式YouTubeで見られます!

こちらの二次元コードより視聴できます (約15分)



今年の清水中学校の一年生のまち歩きの様子

沢山の地域の人と関わることで子どもたちの松本の町に対する思いに変化が現れる



造り酒屋さんのおかみさんに杉玉の説明を受けている



鉄道給水源跡の見学



沢山ある井戸も実際に飲んでみて味の違いを感じる

その他のコミュニティースクールに関わってきたもの

【源池小学校の田んぼづくり】



【源池小学校の3年生にブドウができるまでの授業】



【清水小学校2年生に蚕ってなあに?の授業】



地域だからこそできる子どもたちの学びとは?

コミュニティースクールに 地域の人材を生かすには

- 松本の場合コーディネーターである公民館長が大事。
- 地域には先生がたくさん眠っている
- 地域の人材バンクづくりが必須

私が大切にしているのは、子ども達の 経験値を増やしてあげること

地域を知ること、自分たちの住むまちに関心を持ち
自分の住んでいるまちが好きになる。
将来まちを支える大人になることを願っています

第三分科会

子どもの経験値を増やす
コミュニティ・スクール
大人になるまでにできること

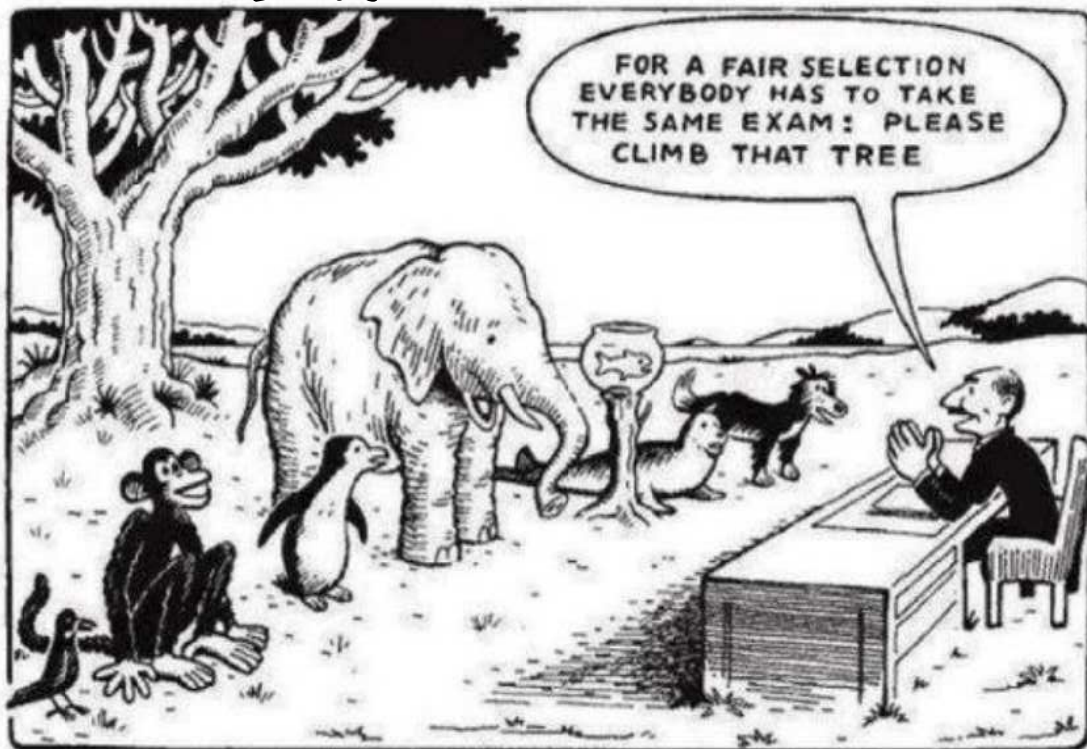
43

なぜいまコミュニティ・スクール？

8つの外せない背景・課題

- ① 子どもの権利とウェルビーイングを「社会全体で守る」ための土台
 - ② 多様な子どもに対応しうる多様な受け皿の創出
 - ③ 「学校だけでは解けない地域社会の課題」に協働で取り組む体制
 - ④ 地域社会の持続可能性（地方創生・防災）を支える「地域の礎」
 - ⑤ 学校への信頼の向上，説明責任，学校教育（授業）の問い直し
 - ⑥ 教職員の働き方改革と専門性発揮に向けた連携・協働体制の構築
 - ⑦ 生涯学習・市民性（エージェンシー）を育てる実践の場の創出
 - ⑧ 変化の激しい時代に「人間にしかできないこと」の探究
- これらの実現を通した【個人と社会のウェルビーイングの実現】！

多様な子どもたち



本日いただいた示唆

- 大人が**本気**になる
- 子どもを**真ん中**にする
- **学び**と**成長**を**核**に据える
- **郷土愛** $\div$ 人 $\times$ 心 $\times$ 居場所

課題：いかに持続可能にするか

- 風の人から樹の人へ
- 個別の活動をつなげる
- 活動の見える化
- 人と活動をつなげる

47

子どもに見せよう

私たちの背中

人は人を浴びて人になる

おまけ

72歳

75歳



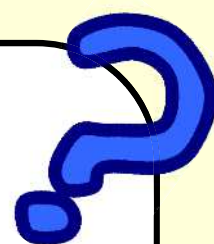
何歳まで生きて
くれますか？

49

知ってる？

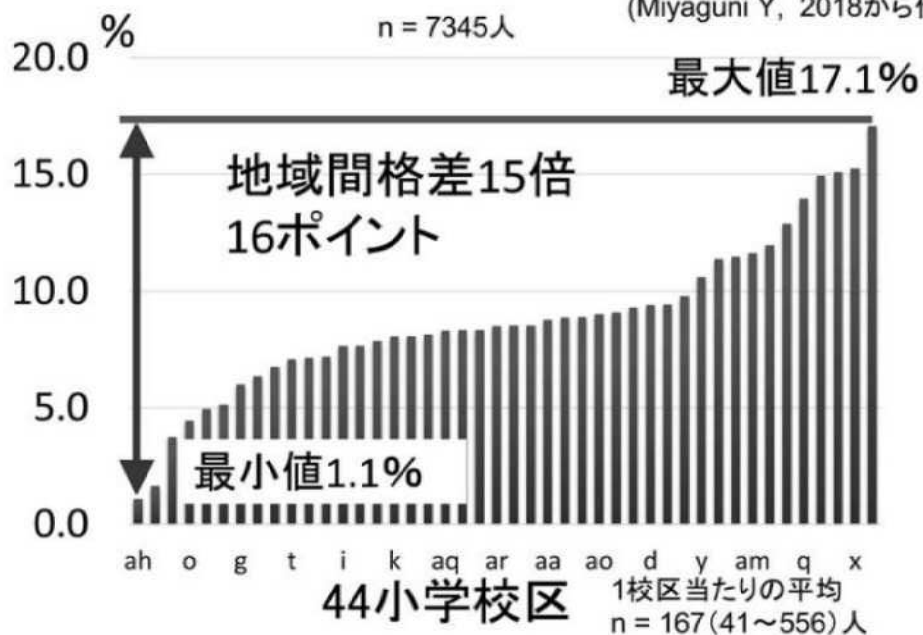
認知症に

なりにくい地域



50

認知症になりにくいまちがある(前期高齢者)
 AGES2003-13追跡データが得られた44小学校区(10市町村)
 (Miyaguni Y, 2018から作成)



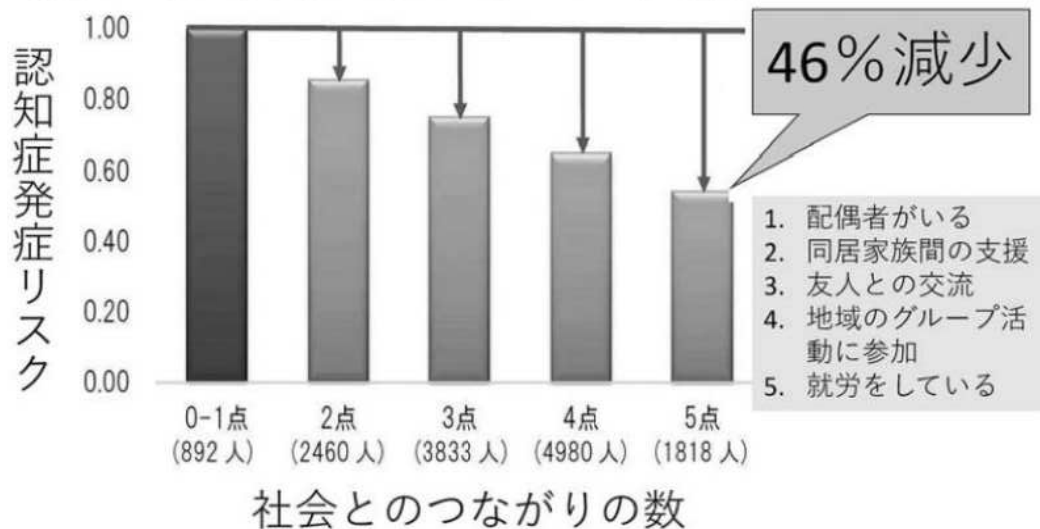
*「地域共生社会推進全国サミットinかが2025」基調講演(近藤克典先生)の資料より(以下同様)

国立長寿医療研究センター
 National Center for Geriatrics and Gerontology



13984名を9.4年追跡

社会との多様なつながりがある人は
 認知症発症リスクが半減



「誰かと一緒に笑う」人は 「一人でいるときのみ笑う」人と比べ 新規要介護認定リスクが約25%低い

12,571名を約6年間追跡し、新規要介護認定の発生を調べた



Tamada Y, Yamaguchi C, Saito M, Ohira T, Shirai K, Kondo K, Takeuchi K. Does laughing with others lower the risk of functional disability among older Japanese adults? The JAGES prospective cohort study. Preventive medicine (2021): 106945; <https://doi.org/10.1016/j.ypmed.2021.106945>

27

第4分科会 みんなの「顔が見える」地域をつくろう！

話題提供者： 高砂 美織	(塩尻市社会福祉協議会)
石川 裕之	(合同会社SumSum 代表)
上條 俊道	(和田地区健康麻雀クラブ)
保科 黄	(松本市内田公民館)
司 会： 久保田 文章	(松本市寿公民館 館長)
会場：中央公民館 会議室3-2 / 参加者：36名	

1 協議の柱

隣近所の人顔は見えていますか？

これまで地域活動に参画することが少なかった住民（子どもからシニア層まで）もつながり、地域への愛着を深めながら「顔が見える関係」を築くことで、いざという時に助け合える地域になるのではないのでしょうか。事例学習とグループワークを通して、様々な世代が参画する地域づくりを考えます。

2 事例発表

(1) 地域食堂「月よう食堂」の取組み

(塩尻市社会福祉協議会 高砂 美織さん)

ア 概要

当分科会のテーマである「顔が見える地域を作ろう」の先駆的取組として、発表者の高砂さんに、塩尻市原新田公民館を会場に個人として開催している「月よう食堂」の様子を紹介していただき、顔が見える地域づくりに向けたヒントとなる要素を持ち帰っていただこうというもの。

イ 「月よう食堂」について

- ・目的 →子ども食堂の機能と、地域みんなが集まり語る場所の創出を目的にしている。地域の子供から若い世代、高齢者まで、いろんな方が来て話す場所となる地域食堂を目指した。
- ・運営について →月1回開催。スタッフは固定メンバー4名とその都度の応援3名程度の体制。毎回50～80名程度の来場がある。料金は子ども無料、大人300円。勉強会も同時に開催し、子どもが来場しやすい環境づくりもしている。
- ・費用について →自治体の補助金、地区からの補助、寄付、行事出展売り上げの充当など

ウ 地域食堂に求められるもの

地区には8050問題や若者の引きこもり、潜在的に地域問題が存在しているが、日々顔を見合わせることで、その問題の掘り起こしにつながる。また子どもから高齢者まで世代を気にせず皆が気軽に集える場所を作り出すことで、第3の居場所づくりにもつながる。

子どもたちには、幼少期に楽しい経験を積むことで、地域への愛着による若者の人口流出の防止や、不安解消、自分らしく生きる学びにつながる。大人に

は、課題となっている単身世帯増加による孤独孤立防止などが期待できる。

- エ 「顔が見える」地域の実現のために～顔が見える事が地域の原動力に繋がる～
- ・多世代の混ざり合いと役割 →居場所にそれぞれの「役割」があることが大切
 - ・双方向の関係性 →子どもの成長に元気をもらう大人。子ども同士の声かけ。大人から子どもへの優しさ等、多世代が混ざり合うことで、双方向の関係性が循環することが大切。
 - ・お互いを尊重する気持ち →年齢や立場による押し付けや決め付けではなく、互いの考えを認め、日々の生活を労い合うことのできる場が、心の居場所になる。

(2) ふつうの暮らし”を作る 一簣竹荘・ポルトマツモトについて—
(合同会社SumSum 石川 裕之さん)

ア 概要

県外から大学進学を機に松本市に暮らし始め、市役所勤務を経た自身の経験から、「移住者と地元住民をつなぐ」を目標としたシェアハウスの運営をしている。シェアハウスの入居者が地域の一員であるという自覚をもって暮らすことで、地域の方には若い住民が増えたこと、移住者には地域に溶け込んで安心して暮らせる、というそれぞれのメリットが生じている。このような取り組みを通じて浅間温泉にかかわる人が増えつつある。

イ 活動の経緯

学生時代に親しんだ浅間温泉がどんどん活気を失っていたこと、都市計画やまちづくりに興味があつたことがきっかけとなり、移住者のためのシェアハウス「一簣竹荘」を始めた。その後、別の建物で「ポルトマツモト」を新たに展開し、浅間温泉を訪れる人たちの交流拠点化を目指している。

ウ みんなの顔が見える地域づくり

(ア) 一簣竹荘

昭和 20 年代に建てられた元学生下宿を利用したシェアハウス。最低入居期間 1 年、町会行事や祭りへの参加必須とし、移住者を中心に大学生も受入れたところ、入居者は地域住民と顔なじみになり、双方にメリットが生じた。

(イ) ポルトマツモト

10 年間空き家として放置されていた木質アパートを活用。建物はシェアハウス、テナント、簡易宿泊所、学生アパートの要素を取り入れた複合的施設を目指す。住民もテナントも地域活動への参加を必須とするなど、地域とのつながりを求め、観光客よりも地元住民目線での施設として運営している。

(ウ) 今後の展望

事業と地域づくりの両立は難しいが、住民が楽しんでいる街の良さは観光客にも伝わるはずなので、地元、観光客双方にメリットがある。これからも地道な活動を続けていきたい。

(3) 和田地区健康麻雀クラブの取り組み
(和田地区健康麻雀クラブ 上條 俊道さん)

ア 概要

平成 27 年に始まり、月に 2 回、和田地区福祉ひろばで健康麻雀を実施している。さらに年 2 回、朝の 9 時から午後 4 時まで、6 時間のロングラン大会を西原町会公民館で開催している。男性、女性、年代を問わず入りやすい雰囲気づくりと、初心者が気兼ねなく参加できる運営を重視している。

イ 活動の経緯・狙い

和田地区では高齢者人口が増加し、孤立が課題となっている中、麻雀という共通の遊びを通じて、同世代での仲間づくり、また、世代を超えて緩やかな支え合いのネットワークをつくることを主な狙いとし、参加者がこれまで培ってきた経験を生かして役割を持てる場とすることで、自己肯定感や日常の交流機会を回復させ、孤立予防や認知機能の維持につなげることも期待している。

また自身が高齢となり、「お茶を飲んでおしゃべりや健康体操もいいけど少し物足りない…」、「仲間を誘ってと言われても…」等の思いがある中、本活動においてはおしゃべりも沈黙 OK で、お茶も飲みながら、手・頭・目・耳をフル活用、おひとり様大歓迎・途中参加・途中退席ありで充実した活動をしている。

ウ 今後の展望

マージャンは世代、性別を超えた共通言語、初めて会ったメンバーでもコミュニケーションが成り立ち、「吸わない、飲まない、賭けない」の健康マージャンでも、年間チャンピオンは決定したりしながら、新しい町会、地元になくて帰ってきた人、古くからの人、みんな一緒に楽しく過ごしたい。好きな人は必ずいるので、次の世代が参加してくれるまで、楽しく続けていきたい。

(2) e スポーツ交流事業

(松本市内田公民館 保科 黄さん)

ア 概要

内田公民館で開催された e スポーツ交流会の事例が、『顔の見える関係づくり』特に若い世代との交流の一つとして生かせる可能性がある。内田公民館で上手くいかなかったところ、反省点を披露し、地区・町会での顔の見える関係づくりの一助としてもらう。

イ e スポーツ交流会を始めるにあたっての課題

・目的

- 孫や息子が里帰りした時、一緒に遊べるように高齢者に触れてもらう事。
- 里帰りした方たちに楽しい思い出を作ってもらい、将来、内田地区へ移住を選択肢に入れてもらう事。
- 普段、公民館にこない世代を呼び込む事。

・開催へのハードル

- 許可申請、宣伝方法、ハードの用意等具体的な課題と対処法を紹介した。

ウ 内田公民館での取り組み事例紹介

実際に内田公民館で実施した e スポーツ交流会について発表してもらった。申請までの経緯や見落としがちな法律など気を付けるべき点の説明があった。

宣伝方法、景品等力にも入れたが、参加者が少なかった。若い世代を呼ぶには、日付や曜日について工夫する必要があるとの説明があった。

3 eスポーツ体験

会場に機材を設置し、参加者には実際にeスポーツ「打撃系」と「パズル系」の2種類のソフトを体験してもらった。打撃系は、高齢の方もすんなり馴染めていた。しかし、パズル系はルールや操作の難易度が高く、高齢者にはハードルが高かった。開催時には、世代を超えて楽しめるソフト選びが重要になると感じた。

4 グループワークによる意見交換

話題提供者・世話人・参加者が5グループに分かれ、本日印象的だったこと、気づき、今後に活かしたいことなどをテーマに意見交換を行った。

- ・どの発表も目的が何であるか明確にして取組みを行っていた。
- ・現行の活動も、同時開催や年齢の枠組みを取払うことで世代間交流につながる。
- ・子供向け事業を増やすことで、世代間交流が広がると思う。
- ・麻雀、eスポーツは楽しく交流する企画として参考になる。
- ・地域づくりも行事もイベントも、自分が楽しいと感じられることが続けるための原動力となる。
- ・地区行事に参加してくれることが少なくても、声はかけ続けたい。
- ・町会活動を強制感がない楽しいものにしたい。
- ・地区のみんなが役割を持ちことが大事である。
- ・浅間温泉の事例のように、若い世代の人が積極的に取組んでいることは良いことだと思う。
- ・学生も地域のために何かしたいという思いはある。声をかけてもらえると嬉しい。

5 まとめ

みんなの「顔が見える」地域をつくろうをテーマに話をすすめてきたが、立場も状況も違えばやり方も当然変わってくる4人の事例発表に触れることで、参加者には少しでもヒントを得てもらえたのではないだろうか。各々発表の中で出てきた共通のキーワード、「楽しむ」、「役割を担う」。長続きさせるためには、各々が楽しみ、少しずつ役割を担い合うことで一部の人に偏らせ重荷にすることなく、かつ必要とされているという生きがいが、地域づくりのエネルギーの創出にもつながる。そんなことを垣間見れる事例発表であったと感じる。

また、グループワークからは、地域に関わりたい、携わりたいという思いは持ちながらも、一歩が踏み出せず関りが持ち切れていない若者の意見も散見された。若者は関心がないと初めから決め付けるのではなく、諦めずに顔を見に行く。もちろん、若者だけでなく高齢者も、こどもも、顔を見に行く。それこそが「顔が見える」地域をつくるために必要なことなのではないだろうか。

第5分科会 分科会名 身近にある資源に気づく、地域と共に活かす～流れを知り、視点を変える～

話題提供者： 上條 泰正 (今井公民館 館長)
 桃井 多美子 (今井地区フラダンスサークル『プアメリア』代表)
 胡桃 亜矢子 (松本市社会福祉協議会 今井地区生活支援員)
 海沼 博 (奈川地区地域づくりセンター 係長)
 花村 憲二 (四賀公民館 館長)
 三木 惣介 (奈川地区地域づくりセンター 地域おこし協力隊)
 上田 将太郎 (NPO法人 松本山雅スポーツクラブ ホームタウン事業担当)

会場：サンプロ アルウィン 会議室1、2 / 参加者：38名

1 協議の柱

「地域資源」と聞くと、特別なものをイメージするかもしれませんが。4つの実践事例から、私たちが身近な地域資源をどう見つめ、つくり、発言し、つなげていくのか「自分たちの地域資源とは何か」を一緒に考えてみませんか。

2 話題提供

(1) 今井の魅力発信大作戦!!

ア 「今井地区イメージキャラクター」制作

今井公民館 館長 上條 泰正 氏

(ア) 事業の概要

地区に馴染むイメージキャラクターを育て、イベント等のあらゆる場面で活用し、広く「今井」をPRする。

(イ) 経緯

一昨年の地区文化祭において、集客が少ない別館への動線を確保するのに、「着ぐるみキャラクターが案内したらアピール効果が大ではないか」と町会公民館長の一人が思い立ち、本事業が始まった。

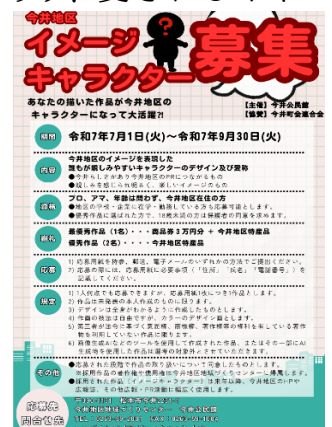
今井公民館が町会連合会の協賛を得て、令和7年7月から図案を募集、応募総数35点から、11月2日の地区文化祭にて投票。上位7点まで絞りこみ、現在、公民館運営委員会にて最終選考中。地域性、デザイン性、明るさ・楽しさ、歴史・由来・物語性、ネーミングを重視し、親しみがあり、愛されるキャラクターの誕生を目指している。

(ウ) 今後の展望と課題

a 目指す方向性

(a) キャラクターを考え、応募～選考～お披露目の過程から、一人ひとりが今井地区を見つめ直すきっかけを作る

(b) 決定後は、様々な場面でキャラクターを活用し、今井の魅力向上を図る



- ・グッズ（キーホルダー、クリアファイル等）や着ぐるみの制作、広報物や地区紹介動画への活用、松本ぼんぼん等でのPR
- b 令和8年度の記念行事に向けて弾みをつける！
8月：今井ドンパン夏祭り第30回、11月：今井地区文化祭第50回
- c 課題
 - (a) 魅力的な作品が多く、意見が割れる中、最終決定したキャラクターをいかに末永く、住民から愛されるキャラクターに育て上げるか？
 - (b) 予算の確保（グッズ、着ぐるみ制作には少なからず資金が必要）



イ 「今井の父ちゃん」に再び光を！

今井地区フラダンスサークル『プアメリア』代表 桃井 多美子 氏
松本市社会福祉協議会 今井地区生活支援員 胡桃 亜矢子 氏

(ア) 事業の概要

平成10年に発売されたご当地ソング「今井の父ちゃん」。りんご農家の1年を歌ったこの秀作からは、ほのぼのとした土地柄や郷土愛が感じられます。しかし、残念なことに現在有効活用されているとはいえません。地域の宝に再び光を当てたい！ 地元の強い思いが健康体操の開発や、インターネットによる楽曲配信の動きにつながりました。

(イ) 経緯

a 「今井の父ちゃん」体操の考案

平成5年、「今井でも生の音楽が聴けたらいいなあ」という一人の女性の声をきっかけに今井公民館、青年団、今井小学校児童、保護者他が協力して「ひだまりコンサート」が始まった。今井小学校の教諭だった二村昭美氏と実行委員会によって作られたこの曲は、その5年後の平成10年、関係者の熱意が実り、CD「今井の父ちゃん」として発売に至る。

しかし、その後、ひだまりコンサートは途絶え、楽曲の存在が徐々に薄らぐ中、地区のフラダンスサークル『プアメリア』代表が立ち上がる！今から約11年前に「今井の父ちゃん」をフラダンスで復活させようと試みたが振るわず、その経験から今度は子どもから大人まで、みんなが楽しめる健康体操としての活用を思いつく。その根底にあったのは「せっかくの名曲が廃れず、いつまでも歌い継がれるように」との強い思い。賛同した今井福祉協議会は、令和5年度より健康部会で話し合いを始動。令和6年度から本格的に体操を考え、地区外の運動指導士のアドバイスを受けながら

令和7年10月に完成、11月の地区文化祭でお披露目となった。その他、JAまつり等にも出演。現在は、健康体操の他、盆踊りバージョンにも取り組み、地区内外に広く普及、浸透、定着させようと精力的に活動が続いている。昨年、地元新聞がその活動を紹介したことが発端で、県立長野図書館にもCDを寄贈するに至った。

b CD楽曲のインターネット配信

地域づくりセンターでは「今井の父ちゃん」体操の取組みと連動してCD楽曲のインターネット配信を模索している。CD製作当時とは時代が一変し、今はオンライン配信によって誰もが容易に楽曲にアクセスできる世の中になっている。そこで、CD「今井の父ちゃん」に収録されている各楽曲を全国、全世界に配信すべく取組みを急いでいる。

(ウ) 今後の展望と課題

a これまでの成果

- (a) 今井小学校、今井保育園、今井児童センター、道の駅「今井恵みの里」、高齢者施設他にCDを配布し、施設での定期的な放送を依頼
- (b) 道の駅では定期的にかかるBGMとして観光客等へのPRを促進
- (c) 今井小学校ではCD2曲目「いまい IN MY TOWN」を朝の校内放送に採用し、地区文化祭でも児童がバックコーラスを進んで披露

b 目指す方向性

- (a) PR用のオリジナルTシャツの制作、笹賀地区『デジステ笹賀』さんの協力を仰ぎ「今井の父ちゃん」体操動画を作成し、DVDを各所に配布する他、YouTubeにも配信、さらに制作した動画を「音健アワード2026」に応募
- (b) CD収録3曲を音楽配信サービスからオンライン配信し、ダウンロードやストリーミングができる体制を整備

c 課題

- (a) 一部の盛り上がりではなく、地区全体の意識の向上
- (b) 曲を残していくために、活動を引き継いでくれる人材の確保
- (c) オンライン配信に際し、権利者（レコード製作者、作詞・作曲者、実演者）からの許諾取り付け

d 最後に「今井の魅力発信大作戦!!」が目指すところ

今井地区の魅力を広く発信する活動を継続することによって、足元の宝物に気付き、地域愛を育み、地区を大切に思う住民を増やし、団結力を高め、地区に暮らす人々が自信と誇りを感じられる地域づくりを進めること!!



(2) 奈川ロゲイニング 2025

奈川地区地域づくりセンター 係長 海沼 博 氏

ア 事業の概要

- (ア) 事業名 奈川ロゲイニング 2025
- (イ) 開催日 令和 7 年 9 月 27 日 (土)
- (ウ) 開催場所 奈川地区全体 (一部の場所を除く)

イ 事業の背景

- (ア) きっかけ

平成 23 年から開催されていた奈川トレイルランに、私 (海沼) が選手として、またスタッフとして関わっていた。

当時のスタッフと話をするにつれ、また奈川でスポーツイベントを開催したいという声が上がった。

- (イ) 現状

現在の奈川は人口減少が激しく、当時のようなトレイルランは多くのスタッフを要するため、開催が難しい。奈川は歩いて走っても楽しい場所であることから、ロゲイニングの開催が可能かどうか検討を行った。

- (ウ) 協力団体

a (株)未来図

中信地区でロゲイニングなどのスポーツを主催している(株)未来図に開催について相談。私 (海沼) が普段から、前者のイベントに参加していることもあり、奈川地区全体で協力することにより開催の可能性ありとの回答

b (株)ふるさと奈川観光交流部

奈川地区の観光協会的な団体へ相談。ロゲイニングというイベントを通じて今まで奈川に来たことのない人を呼ぶことができる。少人数で開催できることから協力させていただきたいとの回答

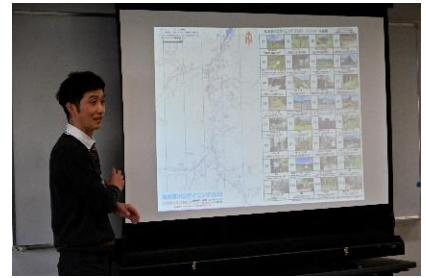
ウ 開催結果

参加者 70 人 (うち長野県外からの参加者 19 人)

エ 成果・課題と今後の展望

- (ア) 奈川地区からの参加者が少なかったため、地元からの参加者を増やしたい。
- (イ) (株)ふるさと奈川観光交流部と協力し、宿泊する参加者を増やしたい。

奈川ロゲイニング 2026 は、9 月 27 日 (日) に開催



(3) 四賀一周駅伝競技大会

四賀公民館 館長 花村 憲二 氏

ア 事業の概要

- (ア) 開催の背景

昭和 34 年 8 月 14 日の台風 7 号により大災害 (死者・不明 7 名、全半壊流出家屋 83 戸) を被り、意気消沈の村民に、駅伝大会を開催して「元気と勇気」「夢と希望」を取り戻そうと、公民館・青年団関係者が熱き思いで準備をし



でした。

第1回大会は、1年4か月後の昭和35年12月11日（日）、5チームが参加し7区間19.8kmで開催された。

(イ) 大会趣旨

秋空のもと駅伝大会を開催し、スポーツ人口の拡大とマナーの高揚を図り、併せて明日への活力を養い、健康で充実した生活をおくる上での糧とし、体力増進・地域活性化を目的とする。

(ウ) 第66回大会概要

a 主催：四賀一周駅伝競技大会実行委員会

b 共催：四賀スポーツ協会、四賀地区町内公民館長会、四賀公民館

c 期日：11月3日（文化の日）

開会式9時、スタート11時、閉会式13時、10チーム参加

d コース：14.2km、6区間（第3・4・5区は2人で走ることもできる。
6人～9人編成

e 参加資格：小学校5年生以上

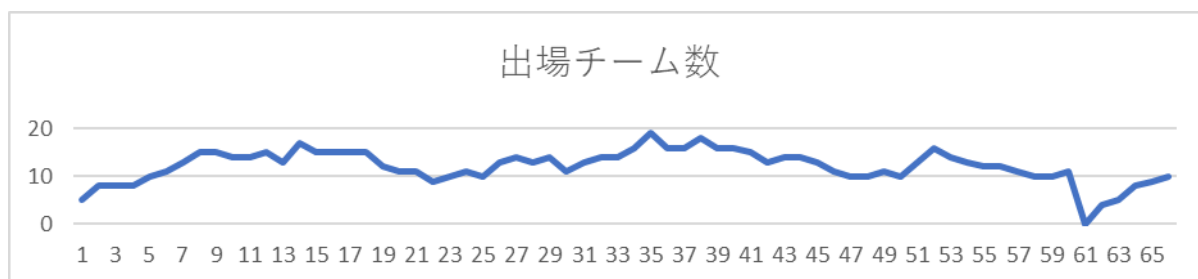
（走れる区間は、4区－1、4区－2、5区－1とする。）

f 表彰：チーム表彰、個人表彰（区間賞、5回毎に通算出場表彰、小学生参加賞）

g 審判員等：競技審判員（67名）、中継所連絡員（8名）、交通整理員（27名）松本警察署警察官（3名）、市職員（8名） 合計113名

イ 大会の変遷

- ・ 第1回7区間（19.8km）、第2回～第50回9区間（24.9km）
参加資格は中学生以上
- ・ 第24回～第30回 9人編成の部と12人編成の部（2部制）
- ・ 第31回～第50回 9人～12人編成自由（1部制）
- ・ 第43回～ 小学6年生出場OK（現在は小学5年生から出場OK）
- ・ 第51回～第60回 10区間（23.5km） 10人～12人編成、
コースは50回大会と逆回り
- ・ 第61回 新型コロナウイルス感染症のため中止
- ・ 第62回 5区間（9km）5人～7人編成、4チーム参加、支所周辺コース
- ・ 第63回～第66回 6区間（14.2km） 6人～9人編成



ウ 成果

- ・ 小学生（5年生から）・中学生・高校生が若いうちから公民館活動に参加することによって、子どもたちの社会教育の場になっている。（大会2週間前ぐ

らいから、夜間練習もある。)

- ・ 親子で参加している家族もいて、世代間の交流・地域のつながりの大切さの確認ができるイベントとなっている。
- ・ コースは、市道・県道・国道を利用しているため、選手等の安全を確保するために、町内公民館・交通安全協会・スポーツ協会・スポーツ推進委員・松本警察署など100名以上の方の協力を経て開催しているので、地域一体の駅伝大会となっている。
- ・ 通算出場表彰(5回毎に表彰、監督・補欠でもOK)をおこなっており、参加者の励みになっている。

エ 課題と今後の展望

- ・ 公道を利用する大会なので、交通事故には細心の注意・準備をして開催していきたい。
- ・ 新型コロナウイルス感染症の影響で中止を余儀なくされた後遺症で、参加チームが減少していたが、やっと中止前のチーム数に回復してきたので、今後も新しいチームが参加していただけるように創意工夫をしていく。

(4) 奈川から四賀一周駅伝競技大会に参加

松本市奈川地区地域づくりセンター 地域おこし協力隊 三木 惣介 氏

ア 事業の概要

(ア) 活動の背景

奈川地区で令和7年4月に奈川ランニングクラブの発足があり、日々の練習の目標として四賀地区で毎年開催されている歴史ある駅伝大会に参加することになった。

(イ) 活動のねらい

- a 目標を定めることで日々の練習の意欲を高める。
- b 駅伝大会というタスキを繋ぐ競技に参加することで、メンバー間の結束力や信頼感を高める。

(ウ) 具体的な取り組みの内容

週1回早朝に集まり、奈川地区を走る。(8km程)

イ プロセス

始めようと思ったきっかけ

令和7年より奈川地区に勤務となった海沼博センター長補佐が、奈川地区住民のKさんと話し合い、奈川ランニングクラブを発足。「奈川でチームを作って駅伝大会に参加できればいいね。」と半分夢物語で話していた2人。その後、地域住民や移住者などメンバーは5人に増え、出場資格であるチーム編成6~9人への光が見える。最終的には地域の助っ人合わせて8人のメンバーが集まり大会出場となった。

ウ 成果・課題と今後の展望

(ア) 事業や実践に対する成果と課題

成果としては途中ハプニングがあり記録には残らなかったが、最後までタ



スキを繋ぐことができ、幻の2位という結果を残せた。打ち上げを行い大会後も親睦を深めることができ、来年は優勝を目指そうとメンバー間の結束力も高まった。さらにメンバー1人1人のモチベーションアップにもつながり、大会前より練習量が増えたりランニングを再開した参加者も現れた。

また目標があることで人が集まり、移住してすぐの住人も地域の方と知り合うきっかけが生まれた。地域内で大会やイベントができなくても、地域外にそれを求めることで人が集まりコミュニティが生まれ、地域外交流につながり、継続した取り組みへと変わった。その上で自分の地域でもなにかやってみようといういい流れができたように感じる。

課題は、怪我無く安全に練習をしていくことと新たなメンバーの確保

(イ) 今後の方向性

今後は普段の練習に加えて、メンバーでの別イベントの参加や交流を増やしていきたい。加えて奈川地区の住民の方とのイベントや交流会も増やしていくことで、新メンバーの加入へつながれば嬉しい。また奈川地区外のランニングチームとの合同練習により、今回の四賀地区一周駅伝競技大会参加のようにランニングを通じて地区を超えての交流をしていきたいと思う。

(5) 松本山雅のホームタウン活動とサンプロ アルウィンについて

NP0 法人松本山雅スポーツクラブ ホームタウン事業担当 上田 将太郎 氏

ア 事業の概要

松本山雅のホームタウン活動では、身近にある人・場所モノを資源と捉え、“価値ある資源”に変換し、クラブと地域が相互に強化し合う循環を作る活動をしている。



イ 事業の背景

(ア) きっかけ

徹底した地域密着のホームタウン活動と環境づくりを含めたスポーツの普及活動を推進し、地域の方々、自治体、企業等と手を取りあって、他の地域にはない活力にあふれた「山雅スタイル」のまちづくりを目指して活動している。

(イ) 現状

『子どもたちを笑顔に』『地域に暮らすみんなを笑顔に』『山雅を使って地域をもっと元気に』の3つを掲げ、まちの問題に対して、松本山雅FCの持つリソースで解決方法を考える『地域イベント依頼型』、松本山雅FCが地域住民の皆様のハブとなって、持続可能な解決方法を共に考える『地域課題解決型』といったホームタウン活動を行っている。

(ウ) 協力団体

地域団体、自治体、学校、福祉施設、企業 e t c

ウ 開催結果

2025 シーズンは地域貢献活動として合計 669 回実施（ホームタウン 11 市町村、その他市町村）

エ 成果・課題と今後の展望

それぞれの地域のニーズや背景、情勢、ストーリー、顧客ターゲットなどに合わせた活動が行え、それぞれの問題解決や目標達成のため効果がある。

ひいては、企業・団体様の価値が上がるよう松本山雅FCを有効活用していただければと思う。

3 質疑応答・意見交換

(1) 人が最大の資源

ア 人・環境・組織・物・場所・風景・つながりすべてが地域資源となりうるが、中でも「人」が最重要

イ 地域にはエネルギーを持つ人がいる。足元の宝物（人）に気づき、引き出すことが大切

ウ 地元愛・伝統を大切にする姿勢が地域の力になる

(2) 同じ想いを持つ仲間づくりがすべての出発点である

ア 共感・共鳴する仲間をつくることが最初の一步（「越境」）

イ 一人のアイデアが対話によって広がり、実現していく

ウ アイデアを出す人・共感する人・意見を言う人・専門知識や行動力のある人など、多様な立場の関わりが不可欠

エ 行政職員・住民・町会が一緒につくり上げることが重要

(3) 火付け役・旗振り役の存在が不可欠

ア 自然発生的には何も起こらないため、仕組みの工夫と旗振り役が必要

イ 機動力・フットワークが軽く、しがらみのない人（例：地域おこし協力隊）が全地区に欲しい

ウ ただし、地区活動では無報酬になりがちな点は課題

(4) 熱量とワクワク感が推進力

ア 熱量・ワクワクする気持ちが周囲に伝わり、人を巻き込む

イ 主催者自身が楽しんでいることが重要

ウ 冷めないうちに動くことが成功につながる

エ きっかけは何でもOK

(5) 地区を越えた交流・つながりが新たな価値を生む

ア 地区の境界を越えた結びつきが活動を豊かにする

イ 他地区からの参加により、自分たちの活動を再認識できる

ウ 自地区では実現できなかったことが他地区との協力で実現することも

エ 他地区の取組みに参加することで、地区住民間や団体内の親睦を深める機会として活用できる

(6) 持続可能な仕組みづくり

ア 住み続けたい人たちが主体となり、多くの人に関わることで長続きする

イ 既存の成功事例も維持・継続のための工夫が必要

ウ 楽しい場・企画には自然と人が集まる

4 まとめ

地域資源とは何か、実践事例の発表を通じて、身近な地域資源をどう見つめ、つくり、発信し、つなげていくかを参加者とともに考えた。熱意を持って活動に取り組む発表者の姿は参加者の心を惹きつけ、普段当たり前にあるものでも、視野を広げ見方を変えることで地域資源と成り得るものがあることを気付かせてくれた。

また、どの事例においても、活動の原点は一人の想いやアイデアにあり、それが対話と共感によって広がり、地区を越えたつながりへと発展していった。自然発生的には何も起こらない中で、熱量を持って動く火付け役の存在と、アイデアを出す人・共感する人・専門知識を持つ人など多様な立場の関わりが、活動を支え継続させていることも学んだ。

地域資源は「物」だけでなく「人」も含まれると考え、地域を愛し、熱意を持って活動する人々こそが地域の大きな資源であると言い切ることができる。どれだけ地域を巻き込み、人と人がつながれるか。広い視野で地域の資源（魅力）を捉え、ワクワクする熱量が波及しながら、持続可能な地域づくりへとつながっていくことを期待する。



活動実践事例一覧表 R7調査分

No.	回答者所属 (地区名・談名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組に至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
1	第一地区	子育て・教育環境	小・中学生	ふれあいまつり 「こども縁日」		毎年3月に開催されている地域住民の活動発表会である「ふれあいまつり」に併せて、地域の子ども(小学生以下)を対象に実施している事業。ニュースポーツやクイズなどの屋台を設営し、子ども達が公民館に集って楽しく遊んでもらう。主催は公民館文化委員会だが、松本大学の学生有志にも協力依頼し実施している。	第一地区公民館文化委員会 大学生有志	ふれあいまつりに来られる方々はどうしても高齢の方が多く、地区事業や公民館事業に子どもが気軽に来てももらえるように企画した。また文化委員会をはじめとした地域住民の皆さんが連携に参加することほもちろん、地域の若者(大学生)の参加も呼びかけた。若者もまた旧田の人間権屋ということで初めて企画段階からアイデアを出しながらかかわってみたいという思いから、屋台のいくつかの企画運営を全て大学生有志に一任した。	参加した子どもは22名だった。子どもたちが地区事業を知るきっかけになったことはもちろん、子ども達と地域住民、大学生との交流の場にもなっていた。一方で、回時間短のふれあいまつりへの親子連れの参加を増やすことが目的ではあったが、どうしても後日だけ楽しんで帰ってしまう方も多く、誘導が難しいと感じている。大学生とのつながりは今後より大切にし、公民館事業を実施する際には積極的な連携を構築したい。
2	第一地区	子育て・教育環境	小・中学生	青山様ぼんぼん練り歩き		子ども達の夏休み期間である8月初めに実施している地域の伝統行事。古くから地域に伝わる伝統行事「青山様」「ぼんぼん」を子ども達へ伝承し、郷土の歴史・文化を学ぶ。実施に当たっては公民館文化委員会(地区住民)の協力を仰いでいる。	第一地区公民館文化委員会	知識のとおり事前の感ずる時間を設けたが、参加者からは「今まで知らないような話を地域の人から聞くことができて良かった」と感想をいただき、伝統行事の意義を伝えることができた。一方で参加する子どもの数は年々減少傾向にあるので、地域に馴染みがない声掛けが必要。また、役員も高齢化してきているので、様々な役割を若手の役員に担っていただけるよう働きかけたい。	知識のとおり事前の感ずる時間を設けたが、参加者からは「今まで知らないような話を地域の人から聞くことができて良かった」と感想をいただき、伝統行事の意義を伝えることができた。一方で参加する子どもの数は年々減少傾向にあるので、地域に馴染みがない声掛けが必要。また、役員も高齢化してきているので、様々な役割を若手の役員に担っていただけるよう働きかけたい。
3	第一地区	子育て・教育環境	小・中学生	松本手まり時計まつり 「クイズラリー」		Mウイングで毎年開催している「松本手まり時計まつり」において、子ども向けにクイズラリー企画を実施したもの。公民館・地域づくりセンターが主体となり、また公民館文化委員会(地区役員)にも当日の運営のお手伝いをしてもらった。	第一地区公民館 第一地区地域づくりセンター 第一地区公民館文化委員会	地区内に限らず広範囲から来場が見込まれるイベントのため、松本市についてさらに知識や興味を深めてもらえるようなクイズを作成し、子ども達にも楽しんでもらった。また、当日はキャラクター「利休太くん」をお呼びして来場者と触れ合ってもらい、当日の来場者の悪い出作りに一役買っていた。	企画についてはおおむね来場者に楽しんでもらったことができた。住み慣れた松本市でも新しい発見があるのと感じてもらうこともできた。キャラクター「利休太くん」も非常に好評で、キャラクター目当てに来場してくる方が多いほどだった。また、企画の内容についてはまだ検討の余地があるため、地域住民の方の意見も取り入れながら、来年度に向けてブラッシュアップしていきたい。
4	第二地区	環境・景観保全	全て	清掃ボランティア「源智の井戸を守り隊」による源智の井戸の清掃活動		・目的：松本市特別史跡に指定され、飲用水、生活用水として市民から愛されている源智の井戸について、市民と行政の協働により清掃活動を行うことで、井戸の維持保存及び活用推進を図る。 ・時期：毎月第1土曜日午前7時から40分間(夏場は6時半から) ・場所：源智の井戸 ・対象：清掃ボランティア「源智の井戸を守り隊」(現31名) ・実施体制：参加したメンバー全員で井戸の清掃、井戸周りの水溜清掃、井戸敷地内の草取りなどを実施	源智の井戸を守り隊 第二地区地域づくりセンター 第二地区公民館 地域づくり支援課(機動支援職) 農畜 文化財課	・源智の井戸は、最年地元町有志のボランティアにより清掃活動が行われてきたが、清掃に携わってきた方々の高齢化と後継者不足により、地元有志によるボランティア(井戸と花の会)は解散するとのが話が上った。 ・第二地区内でも、今後の維持保存活動についてボランティア募集などの案が出るも、明確な方向性を打ち出すまでには至らなかった。 ・井戸の維持保存に危機感を抱いた「井戸と花の会」のメンバー1人が、今年1月に書いた市長への手紙を置く、地区町会連合会など関係者による協議の結果、第二地区地域づくりセンターで地区内外に新たにボランティアを募集することになった。 ・3月に清掃ボランティア「源智の井戸を守り隊」が結成された。	・令和7年度に「松本市チャレンジ応援事業補助金」を活用して、活動体制を整備(井戸清掃に必要な発電機、水中ポンプ、ポンプ用カゴの購入及び隊員のボランティア保険加入を実施) ・課題：現在守り隊の活動の地、月2回清掃委託業者による清掃(文化財課所管)が行われているが、令和8年度の委託料がつかかば不透明。つかない場合は、今後の隊活動にも支障をきたす可能性がある。制については、まだまだ今後の展望：活動体制については、まだまだ十分とは言えず、来年度も上記補助金を申請して、更なる備品購入、体制整備をしていく必要がある。
5	第三地区	その他	全て	松本工業高校 アニメーション制作		第三地区まちづくり協議会が作成した歴史冊子「お尋さまから生まれた街」をもとに、令和3年度に松本工業高校生徒が小学生向けのアニメーションを制作した。令和6年度も歴史冊子とアニメーションDVDを希望者へ配布している。	松本工業高校 第三地区まちづくり協議会 (公民館) 松本市文書館	・小学校低学年でも第三地区歴史冊子(漫画)の内容が理解できるようにアニメーション化を検討していたが、今年度松工生が本冊子に興味を持ち、アニメーション制作に取り組むことになった。 ・第三地区まちづくり協議会から、松工生への資料提供、プロからのオレレーション指導を実施した。 ・オレニングができた段階で、原作者であるヤボンスキ、こはやし氏とともに試写会を実施。また、同内容を冊子制作時に関わった小松芳樹先生にも見ていただいた。	・松本市公式YouTubeへの投稿 ・イオンモールでの完成披露会開催 ・近隣の小学校図書館へ設置 ・第三地区作品展での上映
6	第三地区	交流・つながりの促進	全て	夏休み子ども企画「公民館で遊ぶう」		おがた児童センターの子どもたちを公民館へ招待し、カレー作りやニュースポーツ体験を行なった。公民館内を探索したり、広い部屋でのびのびと自由に遊べるようにした。 夏休みで児童センターの利用児童が増える時期に開催 小学校4年生～6年生対象 第三地区公民館を貸し切りにして実施	第三地区公民館 (地域づくりセンター) おがた児童センター 生活支援員 民生児童委員協議会 ボランティア部会 第三地区まちづくり協議会	・地区支援企画会議の令和6年度のテーマが「こども」ということで、公民館主催で子ども向けの講座を検討していたこと、児童センターから「子どもたちの遊びが減っている人、数が多い遊び場を減らさない」というお話を聞いた。面を行うことを決めた。 ・当初は一般募集で子どもたちの参加を呼びかけようと思ったが、児童センターの子どもたちだけで約40名いたので、6年度は児童センターの子どものみを対象にして実施 ・7年度はみづばちかふえ(第三地区まちづくり協議会主催)でもコラボし、高齢者や障がい者の方とも一緒にニュースポーツを行なった。 ・7年度はボランティア部会の方にも協力していただき、子どもたちとカレー作りをしたり、かき米を作っていたりした。	・子どもたちの反応もよく、大満足で児童センターへ帰っていった。帰りに保護者に話を聞いた子どもも多かったように、保護者からもこのような企画はありたいという声もいただいた。 ・児童センターの子どものみで限らず、地域に住む子どもを体験する場となるように公民館としてできることを検討していきたい。 ・みづばちかふえとコラボすること、子どもたちが高齢者や障がい者の方とも一緒にスポーツをするよい機会となった。 ・カレーやかき米は、子どもたちに好評だった。

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
7	第三地区	交流・つながりの促進	全て	あがたの森 水無月コンサート		地区の子どもたちによる青山藤・ほんぼんの行進と、町会役員による出店(かき米やくじ引き等)で、地区の夏まつりを開催する。	第三地区町内公民館 第三地区公民館 源池小学校 清水小学校 清水中学校	・例年6月に開催している。 ・コロナの影響で開催中止となっていた時期もあるが、令和5年度から復活した。 ・令和7年度は新たな試みとして、松商学園のバンドに出演していた。また、	・地域の若者が子どもたちの運営を助ける機会も少なく、また大人の団体の演奏を子どもたちが聴ける良い機会にもなっている。来場者からは大変好評をいただいている。 ・部活動の地域移行も進み、学校としての出演が難しくなるが、子どもも大人も参加できるような地区の恒例行事としてこれからも続けていきたい。
8	第三地区	交流・つながりの促進	全て	あがたの森夏まつり		地区の子どもたちによる青山藤・ほんぼんの行進と、町会役員による出店(かき米やくじ引き等)で、地区の夏まつりを開催する。	あがたの森夏まつり実行委員会 第三地区公民館	・例年8月に開催している。 ・コロナの影響で開催中止となっていた時期もあるが、令和5年度から復活した。 ・青山藤ほんぼんは町会単独では人数が少なく開催できない町会もあるため、夏まつりで他の町会と合同で行なうことで伝統行事の継承につなげる。 ・令和7年度からほんぼんの歌詞を配布したり、飛入り参加を募集し、地区で聲がきりと提灯を用意した。	・子どもたちがたくさん参加してくれるので大変盛り上がっている。夏まつりが開催できている。 ・出店を担当している町会役員の負担がかなり大きいので、軽くてできる部分を検討しながらも、夏まつりの質を落とさないように今後も地区の恒例行事として開催していきたい。
9	第三地区	交流・つながりの促進	全て	第三地区作品展		地区住民から作品を募り、2日間にわたって作品展示する。	第三地区町内公民館 第三地区町会連合会 第三地区公民館	・例年11月に開催している。 ・あがたの森文化会館で開催していたが、令和5年度より勤労者福祉センターでの開催に変更。あがたの森文化会館は特約の雰囲気ではもちろんあるが、準備が大変で会場も狭いという懸念点があった。令和5年度勤労者福祉センターで開催したところ、準備はそれほど大変ではなく、会場も明るくて作品が見やすいという声から今後は勤労者福祉センターでの開催を進めていく。 ・令和5年度に初めて抽選会を開催し、来場者も楽しんでいた。	・作品数は減少傾向にあるが、それでも500点ほどの作品が集まり、来場者も様々な作品をみることで満足いただけている。また、この作品展に向けての作品づくりにやりがいを感じている方が多く、地区の恒例行事としてこれからも続けていきたい。 ・あがたの森で行っていたとぎは輝光客や文化会館の利用者など関係者以外の来場者もあったが、勤労者福祉センターではそれは難しいので、来場者を増やす方法を検討していきたい。
10	第三地区	学びの場・居場所づくり	小・中学生	学びと遊びのわかばの会		子どもの居場所づくり、学習支援を目的に、令和7年の夏休みから、わかばの会の役員や元教員、大学生、地域のボランティアが交代で、子どもの見守りや、勉強を教えたりしている。 (学都松本寺子屋事業交付金活用事業) 日時：毎週水曜日 午後3時から6時 場所：毎週土曜日 午前10時から午後5時 場所：第三地区公民館 教養室 対象：小中学生	わかばの会(第三地区子ども会育成会)	わかばの会の役員が、令和6年度「未来へつなぐ私たちがつくりたい」第2分科会「地域は子育て応援団」に参加したところをきっかけに、「放課後や休日、長期休業などで勉強ができるスペースがあるといいなあ」、「勉強をしなさい、勉強をしろ」といふ声、友だちと一緒に過ごしたいなあ、「涼しいところを勉強したいなあ、分らない問題を教えてくれる人がいるところらしいなあ」という地域の子どもや保護者の声を受け、地区公民館での寺子屋事業を企画。 学都松本寺子屋事業交付金に申請し、採択され、地域の元教員などの協力を受け、事業を実施している。	参加者が自由に話あえる場を作る＝話が尽きない場さん話をしたくとしてしようがないが、なかなか人と話す機会が少なく外に出る機会も少ない。中この事業は、そういう方に喜ばれている。企画運営を考える中で、マンネリ化しないようにと色々考えてくれていて、苦労されている。
11	城北地区	高齢者支援・福祉	高齢者	井戸端会議		高齢者の生きがいづくり、毎月第1木曜日、福祉のろば、季節の行事やレクリエーション、ミニコンサートをひろばサークル・町会の方などの協力で多彩な企画を開催。その後はお茶会を行う。 参加費100円	ひろば事業サポート隊 コーディネーター		参加者が自由に話あえる場を作る＝話が尽きない場さん話をしたくとしてしようがないが、なかなか人と話す機会が少なく外に出る機会も少ない。中この事業は、そういう方に喜ばれている。企画運営を考える中で、マンネリ化しないようにと色々考えてくれていて、苦労されている。
12	城北地区	医療・健康づくり	高齢者	ふれあい健康教室		健康づくり。毎月第4水曜日、町会当番制で、レクリエーション、歌など。最後にお茶会。アスナツ・コーディネーターで事前に担当町会とボランティアの調整。その後はお茶会を行う。当日は、町会さんが主体となり運営。 健康相談・血圧測定・困りごとなど、専門職員も参加。	町会役員関係者 ひろば事業サポート隊 市担当職員 コーディネーター		なにより、町会が主体となり運営されていて各町会さんの特色があり参加されている方はもちろん、役員の方たちも楽しんでいて。
13	城北地区	交流・つながりの促進	全て	レストラン「夢」		ふれあいづくり。毎月第3水曜日。一皿300円(7.4〜)でカレーの提供。 事前予約。食材の購入は、コーディネーター。	ひろば事業サポート隊 コーディネーター	年代をこえていろいろな世代の方に来ていただい、男性の参加も多い。今年度から、予約申込に似を取り入れた。 ボランティアスタッフの方も美味しいと喜んでいただけたら嬉しいのと、調理・会場準備と頑張っている。	年代をこえていろいろな世代の方に来ていただい、男性の参加も多い。今年度から、予約申込に似を取り入れた。 ボランティアスタッフの方も美味しいと喜んでいただけたら嬉しいのと、調理・会場準備と頑張っている。
14	城北地区	交流・つながりの促進	全て	きさ「千客万来」		交流・ふれあいづくり。毎月第3金曜日。喫茶の運営。 コーヒー・お茶菓子・お味噌汁の提供。コーヒーはサポート隊の方が早くからたてしてくれる。 参加費150円(飲み物・スイーツのみ80円)	ひろば事業サポート隊 コーディネーター		少しずつ、男性のお客さんや新しい方が来てくれるようになった。ゆっくりにおしゃべりしながら美味しいコーヒー・お菓子を召し上がってもらえ、スタッフの方も元気をもらえている。季節にあった企画も取り入れた。
15	城北地区	学びの場・居場所づくり	全て	カフェ「すいれん」		住民間の絆を深め、支え合える関係を築き、誰もが住み慣れた家、地域で暮らし続けられる地域(町づくり)を目指す。 平成29年11月オープン ①米村店(沢村公民館) 毎月第2火曜日 ②白金店(白金町公民館) 毎月第4火曜日 ボランティアを募り運営(R6 24人)	地区住民	平成28年度「城北地区住民より町づくり協議会」で活動の柱を「認知症にやさしいまちづくり」とし活動。 福祉ひろばにやさいまじりというご家族の方から介護の相談を受けたいことももあり、福祉の部会で介護を必要とする方や障がいをお持ちの方、またその家族の方々が誰かが気楽に集い、安心して過ごす場所が作れないか検討。その後、学習会・話し合いを重ね「カフェ」を開設し現在に至る。	R4年度 307人(26人/月) R5年度 476人(40人/月) R6年度 487人(41人/日) スタッフの高齢化

No	回答者所属 (地区名・氏名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
28	田川地区	医療・健康づくり	全て	0840ラジオ体操の会		・ラジオ体操を共に行うことにより、田川地区の健康増進と地域のつながりを作り、参加者相互の親睦を深める。 毎週火曜日 木曜日の8時50分～9時、田川公民館駐車場（冬季、雨天時は田川公民館大会議室）で行う。対象者は、地区住民。 ・地区住民が生産した、消費しきれない農産物等を地区住民向けに販売し、食品ロスの削減を図る。 ・7月から9月の毎週火曜日、田川公民館ロビーで行う。 ・販売物の購入額と販売額は同額とし、残品は出品者が引き取ることとし、手数料は徴収しない。 ・営利目的と判断される出品は、原則許可しない。	地区町会連合会 地区公民館	地区内の農産物生産者から消費しきれない農産物の有効活用について公民館が相談を受け、町会と連携して実施することとした。	・活動の年目を迎え、年間延べ1500人ほどの参加があり、地域住民の生活に根付いている。 ・体操を通じて、互いの見守り、安否確認にもなっている。
29	田川地区	環境・景観保全	全て	田川マルシェ				地区町会連合会 地区公民館	・近くの大形スーパーが営業を休止していることもあり、地区住民から好評を得ている。 ・今年度新規事業であることから、利用者増に向け、更に周知を図りたい。
30	庄内地区	交流・つながりの促進	全て	ドリーム庄内"秋のつどい"		時期：毎年10月の第3か第4日曜日（日曜日の数によって変動） 目的：①多世代の交流と地域資源を振り起こすと同時に地域愛を育む②人と人、活動をつなげ、地域の活性化を図る 体制：①これまで：まちづくり協議会を担う各団体を中心に必要な団体へ声をかけて実行委員会を組織②昨年からは地元の小中学校へ声をかけて、運営委員を募集。 内容：毎年実施するイベントは、実行委員会の話し合いで決定するので、決まった事業はない。これまでに文化祭・運動会・お祭りなどを実施。 場所：庄内公園・ゆめひろば庄内	まちづくり協議会（ドリーム庄内実行委員会）	①ゆめひろばは庄内が開創してすぐのタイミングで市制100周年事業を各地区で実施、それを契機に地区の活性化やつながりづくりを目指して、継続した事業を実施することになった。 ②子どもたちの意見を運営に取入れたいとの要望があり、令和6年課題：住民主体のイベントではあるが、実態は公民館で多くの部分を負担、地区内小中学校の生徒もスタッフとして参加している。	成果：昨年は運動会という企画の大枠を大入で決め、子どもたちのスタッフに種目などの細かい部分とを相談した。そのスタッフが現在児童会の中心になっており、学校からも好評であった。 課題：住民主体のイベントではあるが、実態は公民館で多くの部分を負担、地区公民館が計画立案の中心となっている。コロナ禍の影響で事業も縮小。 展望：企画内容検討から関わってもらえるような体制づくりを進めたいという、昨年度に反省があった。実行委員会立ち上げ前に生徒に希望調査を実施することも検討。
31	鎌田地区	医療・健康づくり	全て	高宮北公園の会		地区住民が健康維持を目的として、毎朝6時半のラジオの放送に合わせて、自主的にラジオ体操を行っている。	高宮北公園の会（地区住民） かんぼ生命保険 NPO法人全国ラジオ体操連盟	・平成18年春から週に1度、高宮北公園の草取りやゴミ拾い、トイレ掃除を続ける地元の有志者たちが、朝の時間を有効活用するためにラジオ体操を始めたことがきっかけである。 ・出欠席や名前前の確認は行わないため、誰でも気軽に参加できる。 ・トイレが閉鎖となり清掃で集まることはなくなったが、ラジオ体操は継続して行われている。	・高齢者が多く、フレイル予防に期待ができ る。 ・住民交流のきっかけとなり、一人暮らしの高齢者の様子をほかの参加者が気に掛けるなど、互助の力を高めている。 ・夏休み期間中は近隣の子ども達も参加する。 ・令和3年度、かんぼ生命保険等から、体操の普及に貢献があったとしてラジオ体操健康良団体として表彰を受けた。 ・年に数回、ラジオ体操指導員を呼び、指導してもらったことを検討している。
32	松南地区	地域教育・人材育成	全て	地域学習会		地区住民が、地域の歴史を学びとともに、地域の現在・未来を考えていくための組織を立ち上げ、歴史資料の収集、学習会の企画を始めている。	地区町会連合会 地区館報編集委員会 地区町内公民館長会 地区公民館 ほか地域住民など	地区版館報の作成の過程で、地域の歴史が意外と知られており、歴史を知るための資料が少ないことから、様々な資料を収集し、成果を学習するような取り組みを行いたいという機運が高まった。	・令和4年に地区公民館の共催事業で地区の歴史を題材とした「謎解きウォークラリーin松南」を開催し、以降、事業で使用した問題を無料配布している。 ・令和6年2月に実施した地区町会連合会設立60周年記念式典に合わせて、地区の歴史を振り返るパンフレットを作成した。 ・同上式典の記念品として、平田里古墳出土の「水鳥埴輪」を模したバッジの作成に協力した。 ・町内公民館などを会場に、地域のあゆみを学び、参加者同士で当時の地域に関する思い出を語る機会を検討している。 ・ただ昔を懐かしむだけでなく、この地域の現在・未来をどうしていくのか考えるきっかけとなるような取り組みをしたい。
33	松南地区	交流・つながりの促進	全て	出張！どこでも"えんがわ"事業		地域住民に、住民のより身近な場所（公園など）へ集まってもらい、ざっくばらんに会話を交わすもの。そこへ地区関係職員が出向いて、住民の話を伺ったり、困りごとの相談をしてももらう機会とする。 市社協で所有しているベンチ（エッセラン高枝、蝶ヶ崎高校生徒が作成）を活用するほか、当日移動販売車を呼んで住民が集まりやすい工夫をしている。	地区生活支援員 地区関係職員（地域づくりセンター、公民館、福祉ひろば、保健師、包括支援センター、市社協など）	感染症禍などで支援を必要とする人の声が届きにくい状況が続く、住民が気軽に福祉ひろばに集まり交流するのが難しい中で、住民同士の交流や支援の必要状況把握を把握する機会が必要と考える、地区生活支援員の提案・企画で実施された。地区支援企画会議で提案し、会議に参加する地区関係職員が協力して実施している。	・住民に身近な場所で開催することで、公民館や福祉ひろばに行くことができない方にアプローチすることができた。 ・住民同士が集まる機会が減少していたため、住民同士の交流の機会にもなった。 ・松南地区9町会のうち6町会で実施したが、残りの3町会でも実施したい。また、2回目以降も継続して実施していきたい。 ・松南地区で最近、身内を亡くしてから落ち込み心身を病んでいる方も見かける中で、地区担当保健師とも話し、まちかど保健室のような形で実施したい。
34	松南地区	高齢者支援・福祉	高齢者	生活応援隊こたま		宮田3町会（宮田東、宮田中、宮田西）にお住まいで65歳以上の支援を要する人に対し、生活支援を目的とした有償のボランティア団体として活動してきた。	生活応援隊こたま	宮田3町会の民生児童委員のOB・OGが、委員退任後も地域住民のために何かできないかと考え、団体を組織することになった。コミュニティ助成事業を活用し、主に高齢者の移動支援や傾聴などの事業を行ってきた。 現在、コミュニティ助成事業の助成期間終了、メンバーの減少、高齢化などの課題に直面し、新たなメンバーの募集、活動の見直しが必要となっている。	・過去に集会で事例発表したことがある様子 ・団体の運営から携わる部員のほか、支援活動のみに携わる部員を募集している。 ・これまでは高齢者のみを対象に活動してきたが、子どもにも目を向けたい。誰もが集える居場所づくりとして、公民館や空き家の利活用にも目を向けたいと考えている。 ・R7は賛成会の解散を受け、夏休みのラジオ体操を実施した。

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
35	島内地区	住民参加・自治	全て	地域の歴史的文化的遺産を活用したコミュニティづくり	住民組織「島内地区歴史文化財調査委員会」と「平瀬古城会」が中心となり、地域の歴史的文化的遺産を活用した、保全・学習・周知活動などを通じて、地域住民の愛着醸成やコミュニティづくりを推進するとともに、地域への情報発信によつて、地区全体の価値を高めるものです。	島内地区歴史文化財調査委員会 平瀬古城会 島内史談会	島内地区では、歴史文化財を活用した学習会や保全活動などを通じて地域づくりに進められてきましたが、松本市防犯部跡「平瀬城跡」の活用・保全を推進する住民組織「平瀬城址一口城主会」の解体を受け、新たなネットワーク化や地域歴史冊子の発行を求める声が住民から寄せられていたため、平瀬城跡を核に地域の歴史的文化的遺産関係者で「平瀬古城会」を組織し(ネットワーク化)、文化財の保全・学習・周知活動を推進するとともに、地区で初めてとなる歴史冊子を発行しました。さらに、松本市文化財課の「まつもと文化遺産認定制度」に登録し、松本市文化財の価値を高めるとともに、史跡での狼煙上げを含めた「平瀬城跡狼煙まつり」を令和3年度から実施しています。令和5年度は安曇野市岩原城などの「狼煙リレー」も実現しました。会のコンセプトは、「会員が楽しみながら、自由に意見を出し合い、積極的かつ主体的に活動する」とし、狼煙祭りも含めて皆さんでアイデアを出しながら検討をゼロからグループで進め、実施は会全体で行うという手法で進めています。	・会の方針の一つに「自分たちが楽しみながらできることを、できる限り、できる限り、できる限り」ということがあるため、結果よりも「実施までのプロセスと実施できたこと」が大切なことだと考えています。 ・効果・成果、結果の例えは……) ・会員が島内の小学校で歴史に関する授業を実施 ・平瀬城跡ピクニックウォークを開催 ・平瀬城跡の整備作業を実施 ・平瀬城跡のろし祭りを実施 ・史跡関係者の交流が進む 等
36	島内地区	交流、つながりの促進	全て	おらんちdeランチ 音遊びの会 など	地域の大人の地域の子供たちに対して三世代交流による園樂の場づくりのために、地区公民館で食事、学習支援、生活相談、生活体験の開催を始めた。	島内三世代交流運営委員会 (愛ランド島内) 島内公民館 島内農業文庫運営委員会 地域住民	・小学生の登校時の見守り活動を永年継続している住民から「地域は家族」という思いが強くなり、子供を中心に三世代交流の場を是非つくりたいと、公民館に相談があった。 ・公民館も「思い」に協力し、小学校学習ボランティアボランティア、高齢者クラブなどの有志による実行委員会を立ち上げ活動を開始した。	・平成29年6月から1回を自主に開催。 ・食材提供する農家や団体が増れるなど協力の輪が広がった。 ・チラシ回収や口コミにより利用者が増えて、交流の場を生み出した。また公民館の新規来館者につながった。
37	島内地区	住民参加・自治	全て	第1回スポーツフェスティバルin島内	コロナ禍をきっかけに中止が懸いていた地区運動会について、内容をリニューアルして実施した。	スポーツフェスティバルin島内実行委員会 (市民連合会、地区体育協会)	R2～R3年度までコロナにより地区運動会が中止されたことをきっかけに、住民から実施方法について再検討するよう要望が運動会の課題について町会単位で話し合ってもらよう公民館から依頼し、まとめたものをもとにして「島内地区大運動会検討委員会(町会連合会・町内公民館長会・地区体協の代表者)」を組織した。 組織内で今後の実施方針を検討し、R5年度に運動会に代わる新しいスポーツイベント(案)を作成。内容のブラッシュアップを重ねた。 R6年度に入り、新たなスポーツイベント「スポーツフェスティバルin島内実行委員会」を組織し、実施要項、内容の検討を重ねた上で、「第1回スポーツフェスティバルin島内」を実施した。	・参加者アンケートでは楽しかったという声が多数あり、成功に終わったが、改題点や反省点も多々あったため、第2回目に向けてより良いものにするため、実行委員会と内容を検討する。
38	島内地区	住民参加・自治	全て	島内地区防災モデル事業	令和3～5年度に実施した「地震つくりセンター強化モデル事業」の重点事業として実施した「島内地区防災モデル事業」を継続し、各町会の防災への取組みを再構築するとともに、それを支援する地区の役割について検討し、必要な取組みを進めている。	島内地区防災モデル実行委員会 (モデル町会・地震つくりセンター・公民館・防災部・消防団・生活支援員・地域防災支援センター・松本大学等)	・令和3年度から3年間「地震つくりセンター強化モデル事業」の重点事業として「防災モデル事業」を進めてきた。 ・モデル町会の中で「安全確認体制」「要援護者支援」「個別計画作成」といった課題についてモデル町会を設定して取り組みを進めた。「事業周知」「地区の人材育成」「介護保険事業所などの連携」といった課題が出てきたため、小・中学校での防災学習プログラムの作成、福祉避難所への直接避難者の抽出方法の検討、入所施設と町会との連携といった事業にも取り組んだ。 ・事業全体について松本大学地域防災科学研究所からの指導助言をもらった。 ・こうした内容を、市のモデル事業は終了した後も、モデル町会の拡大を行うなど、令和6年度も事業を継続した。	・町会の常会や組織を単位とする話し合いを進めるなど、「防災」や「要支援者への支援」を切り口として防災活動の再構築が行われた。 その結果、防災活動としても自治活動としてもモデルとなる活動となった。 ・モデル的な取り組みが地区内でも広がっている。 ・小・中学校や地域包括支援センターなど、関係機関と地域との「防災」を切り口とした連携や役割の明確化が図られている。 ・事業の継続・継ぎが課題
39	島内地区	住民参加・自治	小・中学生	島内地区子どもひろば	趣旨：島内灯籠まつりが取止めとなり、島内地区の担い手となる子どもたちのために、夏休みの思い出づくりの場を子どもたちが運営する「子どもひろば」として再構築を目指した。 期日：令和7年7月13日(日)13:30から15:00までを「おはなしファミリー劇場」、15:00から16:30を「子どもあそびのひろば」として開催 場所：松本市音楽文化ホール生ホール及び小ホール 内容：「おはなしファミリー劇場(生ホール)」と「子どもあそびのひろば(小ホール)」を合わせて「島内地区子どもひろば」と称した。	島内地区社会福祉協議会 島内地区子どもひろば実行委員会	・島内灯籠まつりが役員の負担が大きすぎることなどから今後実施しないことを町会連合会及び島内社協が決定した。 ・子どももイベントを実施している子ども会育成会を中心に、子ども向けのイベントを考えたいという意向が示された。 ・児童センターや学習クラブ、PTA有志などと相談し、実行委員会をつくつて、各団体・グループの持ち寄りによる「あそびのひろば」を当日展開することとした。 ・全体調整は実行委員会の会議において調整した。細部は事務局が調整した。	・「子どもあそびのひろば」は情報会及びPIAの有志が声を掛け合う中で、小中学生のボランティアが集まったので、スタッフが足りていない遊びのプールの広さを確保することができた。 ・当日は行列がでるほど盛況な催しとなった。多くの子どもたちを「おはなしファミリー劇場」にも案内することができた。 ・費用面を含め、イベントの実施方法や人のつながりをどう生かすか、という側面でも示唆が多かった。 ・来年度以降のように運営をしていくかは課題。

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等 行委員会	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
40	島内地区	住民参加・自治	全て	防災フェスティバル実施事業		目的：①島内地区内外の人材の掘り起こしとネットワーク化をすすめる。②「防災」を切り口として関連する分野をつなげるネットワーク化する。③「防災」を住民の日常生活の一部にするきっかけをつくる。 日時：令和7年11月30日（土）10:00～14:00（予定） 場所：あすでセンター・グラウンド	島内地区防炎フェスティバル実行委員会	・令和7年度に山店フオーラム実行委員会から「防災」×「キャリア」の連携の実施について打診があり、地区内外の関係団体で実行委員会を設置して第1回を実施。その後、実行委員会の枠を広げることで合意。 ・令和6年度は地区防災部や環境衛生協議会、その他関連企業などと一緒に声をかけをし、枠を広げて実施した。 ・地区防災部や環境衛生協議会は防災フェスに向け学習会や講習会を実施して準備した。	・地区内外の人材が持ち寄り、で連携可能なグループをつくって運営するというイベントの形を示すことができた。 ・実行委員会を開催することで、各団体のリーダーの関与づくりができた。 ・昨年度並みに参加者を確保することができ、防災意識の向上は一定程度できている。 ・各プースの運営は各団体任せられているため、取りまとめを行う調整機能の強化は課題。 ・実行委員として各団体が運動して、広報・宣伝・調整を担う、という意識が浸透しつつある。
41	島内地区	高齢者支援・福祉	全て	島内地区フレイル予防・生活支援・人材育成推進事業		目的：①島内地区にはフレイルが多いという課題を解決したい。②生活支援活動構築を町会を基盤として構築し、第3層と位置付けたい。③各町会単位で福祉ひろばは出前ふれ健や百歳体操のグループづくりが進んでいることを活用したい。④健康づくり推進員や体力づくりサポーターを活用しながら人材育成を図りたい。⑤町会と地区の役割、人材育成、生活支援体制の構築といった①～④に関わる事項を一体的にとらえ、地区としての活動として構築したい。	島内地区各町会・地区社協・地区福祉ひろば・健康づくり推進員・体力づくりサポーター・通いの場各リーダー・地区担当保健師・地域包括支援センター・地域づくりセンター	・島内地区として健康づくり推進員会の活動は令和4年度以降も継続する方針を取った。令和5～6年で各町会から選出された推進員で活動を継続した。 ・後期高齢者健診で実施する質問表の9項目のうち7項目に判明している。島内地区は松本市全体の平均と比べ割合が高いことが判明している。 ・島内地区では以前から「いきいき百歳体操」を町会単位で実施しており、フレイル予防の観点からも、また、生活支援の拠点づくりの側面からも場を牌やそうとしていた。 ・生活支援活動を構築するうえでは、各町会の「百歳体操」を拠点として、また各「百歳体操」のリーダーを集めて介護保険上の「協議体」として位置付けた。 ・体力づくりサポーターは町会選出ではなく、任意のボランティア団体として地区・町会で活動を実施していた。	・一つひとつの活動は小さきどこどこでもあるが、一体的にとらえることで事業としての関連性がわかり、地区としての方向性を検討できた。 ・人材育成的には、健康づくり推進員会方式（町会選出の人材を町会活動の担い手として地区が育成し、町会へ還元すること）と、体力づくりサポーター方式（興味関心のある人が集まってくるという育成・活動する）の二つのパターンでとして整理できた。 ・生活支援活動は全地区網羅ではなく、町会拠点として位置づけをすることができた。 ・町会への位置づけをすることで、町会と連携し、町会への健康や百歳体操を活動基盤として位置付けられ始めている。
42	島内地区	地域教育・人材育成	全て	島内地区健康づくり推進員活動		目的：地区住民の健康意識向上、地域の担い手の掘り起こし、人材育成 時期：通年（推進員任期は2年） 対象：各町会から選出（R7・8年度は47人） 方法：年4回の定例会、各町会活動への企画・参加 実施体制： ●年4回の定例会では、1時間程度の研修会を実施。 R7年度は、島内地区の健康、食生活改善推進員の調理実習、運動の講座を実施予定 ●地区行事で健康啓発活動（防災フェスティバル、文化祭、ウォーキング大会） ●福祉ひろばのふれあい健康教室にスタッフとして参加 ●各町会のふれあい健康教室の企画、当日運営など（町会により役割は異なる）	島内地区地域づくりセンター 島内地区担当保健師 島内地区福祉ひろば	・推進員は町会役員として選出されており、40～80代の幅広い年齢層で、健康への関心度もばらつきがある。定例会・研修会を開催し、健康について学習する機会を持つことで、推進員一人一人の健康に対する関心を高めると共に、定例会で得た知識を家族や町会などへ普及し、地区住民の健康意識の向上を目指すという。推進員は働いている方や子育てしている方もあり、町会活動に参加したことがない方も多く、健康づくり推進員になったことをきっかけに、町会活動やふるまふ活動を知り、地域の繋がりを通い、地域の大切さを感じられるような活動を行いたいと思い、推進員活動を計画、実施した。 ・R7年度は任期1年目であり、「健康づくり推進員」とは何か「何をやるべきなのか」など推進員という組織のことや役割について知らない方がほとんどである。そのため、R7年度は推進員の活動を行う中で推進員の役割を知っていただき、活動の流れを経験しながら知る1年にする。R8年度は推進員自身が高島内地区の中で行いたい講座や啓発活動を自主的に計画し活動する予定。 R8年度は島内地区住民全体に向けた健康講座も計画し、実施する予定 ・研修会だけでなく、文化祭、防災フェスティバル、ウォーキング大会等地区行事の中で健康について啓発物品やチラシを配布し周知する。	【R5/R6年度任期の推進員の振り返り】 ・地区、町会のふれあい健康教室への参加を通して、「地区内でのこのような事業があることを初めて知った」「参加できて楽しかった」という声が多く聞かれた。 ・年度末アンケートでは、推進員活動が「ためになった」「楽しかった」と答えた方が半数以上であり、活動に対して前向きな反応が見られている。 ・任期終了後、地区活動に興味を持った方をどのように地区に繋げていくかが課題。体系づくり、食改など、地区で活躍している他の団体の加入を勧め、地域と地域を繋ぐ組織を拡大していくことを目指す。
43	島内地区	住民参加・自治	全て	島高松未来づくり検討会		目的 ・町会活動の中核を担った世代から次の世代への移行期を迎える中、生活様式の多様化と相まって地域に対する無関心、定年後も働き続ける層が厚くなり、地域の担い手不足などが現実の課題となっている。そこで特約的な町会活動をするため、一人ひとりの住民が「我がごと」として様々な「場」に参加し、関わることで、町会活動のあり方を総合的に検討するための検討会を設置する。	島高松未来づくり検討会	検討すべき課題 ・活性化につながる後鳥選出のあり方について ・長期的な視点に立つた町会財政の方向性について ・助け合い活動による地域の安全安心の確保のあり方について ・超高齢社会を克服するための交通弱者対策のあり方について ・町会が自由に交流できる場づくりや通いの場について ・ICTを活かした情報発信のあり方について	令和3年度～島内地区防炎モデル町会として各町会が安全確認、避難経路計画等の策定に取り組み、話し合いによる合意形成を積み重ねてきた。 令和6年度 4月 第1回審議会において「町会活動活性化研究会」設置について協議 5月 活性化研究会の進め方について審議会構成メンバーにアンケートを実施 7月 第2回審議会において「島高松未来づくり検討会」設置要領を決定 8月 町会全戸に公募委員の募集を実施 町会の課題を解決するために、総会資料の活動報告及び活動計画に基づく内容を基本に検討すべき課題を整理した。
44	中山地区	地域経済・地域資源活用	全て	2024なやかやま体験フエスタ 2025 未実施		【概要】 ・地区内の企業や、地域住民（サークル）の協力のもと、地区内複数箇所に様々な「体験型ワークショップ」を開催した。 【目的】 ・地区内外の人を楽しんでもらう機会を設け、地区外の人にも中山地区についてもっと知ってもらうため。	中山地区地域づくり協議会 地域活性化部会 若者部会 地域住民（サークル等） 町会連合会 松本大学生 中山地区区内企業 公民館	・「地域活性化」のためには、特に地区外の方にもっと中山を知ってもらうための思いから、令和元年度に長野県の元気づくり支援金により、地区を総括するカダラロを作成。 ・これに付随して取り組みとして、中山のフィールドを活かした体験型ワークショップを行うことを企画し、左記のイベントを企画した。	令和2年度は複数日間開催予定であったが、コロナ禍のため、同年9月に中止決定。 令和3年度はワークショップの申し込み開始まで進めたが、その後感染警戒レベルが5となったことで、同年8月27日に中止とした。 令和4年度にコロナの感染対策を行ないながら第1回目を開催し、多くの参加があったが、周知方法等を検討する必要があった。 令和5年度に令和4年度の反省を踏まえながら、中山地区のHPなどで周知し、中山地区らしさのあるプログラムを新たに開催した。 令和6年度も開催。

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
45	中山地区	学びの場・居場所づくり	高齢者	なかやまでお買い物		【概要】 松本市内の事業者に依頼し、町内公民館で移動販売を行った。 また、中山地区で活動する「ゴミを楽しくむ会」に依頼しゴミの回収も行なった。 【目的】 高齢者の居場所づくり、買い物弱者支援対策のため。	中山地区地域づくり協議会 福祉対策部会 助け合いお助け中山 町会連合会 地域づくりセンター（福祉ひろ ば、支援員含む） 松本市内企業 地域住民（サークル等） 公民館	地区内での高齢者の居場所づくり、買い物弱者支援対策等の課 題があったため、社会福祉協議会職員と中山地区福祉部会 員と打合せを行い、連携団体や企業の協力のもと開催した。	・令和7年度は通原西、通原北町会で開催 ・令和6年度は通原東、通原南町会で実施 ・令和5年度は和泉町会で実施 ・普段買い物に出れない高齢者や、住民同士との 交流機会が少ない方にとって、良い機会となっ た。
46	中山地区 健康づくり課	医療・健康づくり	全て	中山は山の身体操		目的：中山地区住民に運動習慣をつけてもらうため。 時期：2017年～ 場所：ふれ健、中山文化祭等住民事業 対象：参加住民 方法：健康づくりサポーターを中心に促している。	健康づくりサポーター、中山公 民館	現館長（鈴木様）が2017年、館長就任前に作成し、当時の 館長へ曲を提供。 当時の館長が、体育謝技会に振付を依頼。 以降、中山住民に親しまれる運動になるように、健康づくりサ ポーターを中心にかみ健や、ピクニックコンサートなどで住民 に周知を行っている。	中山ふれ健、出張ふれ健、体力アップ教室等、 中山での集会にて地域住民とともに行われている。 若者世代には周知できていないため、幅広い世 代に親しんでいけるようにしていく。
47	島立地区	子育て・教育環境	小・中学生	島立買い物乗合タクシー		・経過と目的 公共交通機関や自家用車等を利用できない島立地区の高齢者 の要望から近隣の大型スーパーへの移動支援策として令和2年 11月からの試行運転を経て、令和5年1月に本格運行に移行し た。 ・実施時期と場所 地区内を2分割にし、毎週木曜日にそれぞれ1台を運行して いる。利用料金は一人往復500円を徴収している。不足分 は、地域づくり推進交付金を活用し、町会連合会が負担してい る。	・島立地区町会連合会		・今後も拡大が見込まれる買い物弱者対策として、 て、地域が取り組んでいる。 ・利用者の固定化とタクシー料金の高騰などが あり継続する方法を検討中
48	島立地区	子育て・教育環境	小・中学生	島立つ子 森・杜探検隊 (もりもりたんけんたい)		・経過と目的 島立地区における住民主体（主に子ども）の地域づくり活動 の一環として、平成27年度に発足。地域づくり推進交付金を 活動資金として実施。 体験学習を通じて、自然の豊かさを五感で感じ、歴史や文 化、自然の美しさや大切さを学びながら豊かな心を育てる。 ・実施時期と場所 山や川をフィールドに自然体験学習を行ったり、三九郎・ま ゆ五つくり体験など文化の継承にも取り組む。	・島立つ子 森・杜探検隊 自 然体験学習チーム		・子どもたちの生きる力を育むためには何が良 い経験になるか考え、また、子どもたちに何を やってみたいかを常に問いかけて事業を行って いる。 ・五感を通じてリアルな体験を提供している。 ・地区内団体の理解と協力の上、事業が実施で きている。
49	島立地区	子育て・教育環境	その他	島立こどもひろば		・経過と目的 活動の前身であった「ゆいまー子ども食堂」の食事提供が 継続の理由により継続困難となってしまったが、子どもたちの 放課後の過ごし方を豊かにしたいという思いから「島立こども ひろば」と名称を変え、学習支援、遊びの支援、フードパント リを行っている。 ・実施時期と場所 毎月2回、島立小学校の前にある島立公民館を会場として実 施。	・島立こどもひろば運営委員会 (協力：松本大学、NPO法人 ポットライン信州、島立地区町 会連合会、島立地区地域づくり センター他)		・大学生が子どもたちの遊び相手、宿題の学習 支援を行っている。 ・NPO法人によるフードパントリーを行い、 食の確保にもつなげている。
50	島立地区	高齢者支援・福祉	高齢者	おたすけ隊 島立		・高齢者が生活していくうえでの気づきとして困りごとを、地 域住民が無理なくできる範囲でお手伝いする有償生活支援サー ビス ・令和2年8月より開始 ・ゴミ出し（可燃、廃布、資源要相談）草取り、雪かき（生 活に支障のある箇所） ・利用申請書を地域づくりセンター（地区生活支援員）に提出 ・協力隊員とつなぎ合わせ（地区生活支援員）支援する ・利用料…ゴミ出し（1回100円 2袋まで） 草取り（1時間程度）…1人につき200円 雪かき…1人につき200円 雪かき…1人につき200円 草取り…500円 雪かき…500円	・島立地区ボランティア連絡協 議会		・独居、老々世帯、高齢の親と離れがちな子供、 ご近所とのつながりの薄い方、など需要は増え ています。利用者からは「とてもありがたいシ ステムだ」と感謝されています。今は地区全体 で調整をしています。町会単位での動きも出 てきています。協力隊員の募集が課題です。
51	新村地区	交通・移動の利便性	全て	新村プチ送迎ボランティア		・免許返納または、運転に自信のない方への移動支援策 ・利用先には（買い物）梓川クリニック、山形村アイシティ（医 療機関）宮澤整形外科、小岩井医院、花村医院、岡野医院がある ・互助の精神で運転手・利用者、賛同者が年間20000円を納 入 ・新村在住の方のみ利用可	新村プチ送迎ボランティア 会	・松本大学の学生が地区の縁側「みずす屋」でのお年寄りとの 会話から「バス停まで歩くのか大変」との話を聞き、民生児童 委員に相談したことがきっかけ。	(成果) 利用会員が増え続け、地区の方々には 定着している移動支援策。ドアtoドアなので、 利用者にとってもありがたい支援。 (課題) 利用者が増える一方で、運転手は高齢 を理由に辞めてしまう方が増えている。新規の 運転手のなまり手がない。 ・利用者の高齢化も進むが、自分での乗り 降りが難しい方は、プチ送迎ボランティアの 利用を断らなくてはならない。(運転手は介護 資格を持たないあくまでもボランティアである ため)

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
52	新村地区	高齢者支援・福祉	高齢者	新の里お助け隊		・高齢者等の困っている方が少ないお金を払うことで気がねなくお願いをしやすくなる有償生活支援サービス ・令和6年2月より開始 ・ごみ出し（可燃ごみのみ）草取り（玄関周り等）、雪かき（玄関から生活道路まで） ・利用申込書を地域づくりセンター（地区生活支援員）に提出 ・協力会員と利用会員をつなぐ（生活支援員） ・利用料金…ごみ出し（1回100円）…1人につき100円/15分 草取り（1時間以内）1人につき100円/15分 雪かき…ごみ出し1回150円 草取り…300円/15分 雪かき…300円/15分	松本市社会福祉協議会新村支会	・令和3年11月、地域ケア会議の際、有償ボランティアの必要性（高齢者の「ごみ出し・雪かき」等）について話し合いをした。 ・新村地区困りごとアンケートの実施（75歳以上の独居または高齢者のみの世帯） ・70世帯から回答。その後有償ボランティアプロジェクトチームの組成。	（成果） ・地域連携として、第2コムハウスの通所者がお助け隊の協力会員として活躍してくれた。 ・協力会員には、松本大学の先生も登録してくださり、何かあれば学生も協力をしてくれる。 （課題） ・1回りの「こアングメント」を実施した際、困っている方はもっと大勢いたが、実際の申し込み者は少なく、さまざまな理由で声をあげないという点も、その方々の声をどう拾っていくかが課題。
53	新村地区	住民参加・自治	全て	新村地区の防災に関する取り組み		1 新村地区防災計画策定 (1) 経過 R3年豪雨災害時、梓川左岸・右岸堤防の一部損壊を契機に、地区防災計画の策定を進めたもの。 (2) 目的 地域住民が自ら考え話し合いながら平時の防災活動や災害時の行動を地域の特性等を踏まえ計画に示すことにより自助・共助を推進する。 (3) 実施時期 R3～R4策定 (4) 方法：新村地区防災計画策定委員会を発足し検討・策定 2 新村地区避難所運営の見直し (1) 経過 新村地区防災計画策定に伴い、松本大学地域防災科学研究所から、すでに策定済みの松本大学避難所運営マニュアルや運営委員会組織の見直しについてアドバイスを受けたことから、見直しについて取り組むこととなった。 (2) 目的 松本大学地域防災科学研究所が東日本大震災時に避難所運営を支援した経緯から、現状のマニュアルや組織体制では効果的な運営が難しいとのアドバイスを受けたため、より実効性のあるものとするため、改めて運営委員会の組織及びマニュアルの見直しを実施 (3) 実施時期 R5～R6 (4) 方法：現在、1回/月のペースで避難所運営通し委員会を開催 (5) 7年度は完成したマニュアルを基に、マニュアル作成に関わった者から選出されたマネジメントサポーターを中心に各避難所運営班別に説明会を開催 3 関連事業 (1) 保健避難訓練 (2) 新村地区（高綱中学校）防災訓練	・あたらしい郷協議会 (安全安心部会) ・松本大学地域防災科学研究所 ・消防団 ・民生委員児童委員協議会 ・防災士 ・保育園 ・児童センター他	・防災はどの地区でも重要テーマとして取り上げている。 ・新村地区防災計画は、松本市地域防災計画にも位置付けられた市内35地区初の計画である。 ・地区住民と松本大学との協力が図られている。 ・松本市では令和7年3月に避難所開設・運営マニュアルを改定しており、新村地区で作成したマニュアルとの内容の整合性を検討する必要があるが生じている。	
54	新村地区	学びの場・居場所づくり	小・中学生	こどもの居場所、こども食堂 (笑和はうす、寺子屋、信州みんなの食堂)		・笑和はうす こどもの居場所づくり・食事提供、第2土曜日、第4日曜日・寺子屋 こどもの居場所づくり、月1回、公民館 ・信州みんなの食堂 こどもの居場所づくり・こども食堂、毎週水曜・旧レストランアンダンテ 町会内のボランティア「ゆめの里」の送迎車を高齢者の孤立を防ぐため、身近な場所での集い・交流・活動を行う中で通いの場を作ることを目的として始めた。	・笑和はうす (協力：こども福祉課、ホットライン(信州他)) ・寺子屋 (主催：松本大学若柳ゆめ) ・信州みんなの食堂 (協力：こども福祉課、ホットライン(信州他)) 町会 町会ボランティア 町会有志	・当初は、それぞれの団体が個別に学習支援やレクリエーション、食事の提供に取り組んでいたが、現在は相互に情報共有や連携を深めお互いに支援しあうことができるようになってきている。 高齢者の孤立防止、地域の見守り、きずなづくり	
55	和田地区	高齢者支援・福祉	高齢者	町会サロン (5町会)		特別介護老人ホーム「ゆめの里」の送迎車を利用し、和田地区内の元高齢者で、買い物に不便を感じている方に対し、週1回自宅から店舗まで送迎を行っている。	JA松本ハイランド和田支所	H28.4より、社会福祉法の「地域における公益的な取組み」推進の一環として発足。	買い物の不便解消、健康維持
56	和田地区	高齢者支援・福祉	高齢者	買い物・送迎ボランティア		お茶を飲みながら、ちょっとした悩みや、認知症、介護保険サービスなどを気軽に相談できる場や、住民同士がおしゃべりを楽しみ、交流できるような居場所を作っている。また、公民館協力のもと館長、主事によるスマホの相談もできる。	和田地区地域づくり協議会福祉健康部会	以前行っていた「認知症カフェ」の実施主体の薬局の経営が変わったことをきっかけに実施主体を変更し、リユニアールを、認知症カフェ、介護者だけでなく住民誰もが気軽に集い、話ができる場所に変更した。 引き継ぎ、包括、薬剤師も加わり、個別相談もできる体制とした。	地域の絆づくり、介護予防、介護者の精神的負担軽減、情報共有、医療との円滑な連携
57	和田地区	高齢者支援・福祉	高齢者	思いやりカフェ		福祉ひろば事業の継続性と自主性を維持することを目的に、福祉ひろば推進協議会の08や経験者が裏方として事業を支援している。	福祉ひろば推進協議会08・総務	H31より、退任した町会役員がいつまでも福祉ひろばにかかわりを持ち「黒子」として支援していける団体を創設した。	地域のきずなづくり、福祉ひろば活動の強化
58	和田地区	住民参加・自治	その他	福祉ひろばを支える会		和田地区の女性有志が健康維持と仲間づくりのためフラダンスのサークルを立ち上げ活動している。	フラダンスサークル「オヒア・レフア」	毎週講師から本格的に学び、練習をしている。文化祭や、福祉施設などの視察活動をしていた。コロナ禍で発表の場が一時的になくなってしまったが、コロナ禍前の状態にもどりつつある。	健康維持、仲間づくり、福祉活動
59	和田地区	交流、つながりの促進	その他	フラダンスサークル					

No	回答者所属 (地区名・氏名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
60	和田地区	高齢者支援・福祉	全て	移動販売 (買い物支援)		主は高齢者の買い物支援として令和5年10月からスタートし、偶数月(2か月に1回)ペースの第2金曜日に開催している。高齢者だけでなく、若い方も来ている。移動販売で販売、自家栽培野菜の販売も受け付けている。	和田地区地域づくり協議会、福祉協議会、明日の和田を考える会(若者の会)、和田地区生活支援員、和田地区公民館駐車場(屋外)で移動販売を企画した。協力団体: J A 和田支所、戸部商店	一人暮らしの高齢者に限らず、買い物に困っている人が多かったことを踏まえ、和田公民館駐車場(屋外)で移動販売を企画した。	〔成果〕・スタートから2年が経過し、地区内全戸配付でお知らせしていることもあり、定着し盛り上がりを見せている。 〔課題〕・時期により、販売する野菜情報を毎回検討している。
61	和田地区	高齢者支援・福祉	高齢者	キラキラ健康学校		・高齢者のフレイブル・介護予防を目的に、0～2回/月のベースで講座を実施。令和7年度は10回の講座を開催予定。 ・内容は実施主体全体で検討し、健康・運動・栄養・防災・終活等を企画。	福祉ひろば、地区生活支援員、社会福祉協議会、西部地区センター、河西部西包括支援センター、西部保健センター、担当保健師	・平成26年度までは、実施主体がそれぞれの講座を単発で企画・実施していた。 ・当時のひらは職員(A)は、保健師や包括と連携事業として開催していた健康・介護予防についての講座をバラバラで実施するよりも、地域の健康課題を共有し効果的な内容の講座を一貫性をもってやる方が、効果的で有効性が高いと考えた。そのため、一緒に年間計画から企画していくことを提案し、平成27年度から発足した。 ・令和2年度(A)が地区生活支援員となり、地区生活支援員と連携も実施主体となる。	・地区の健康課題を共有し、それに対する有効な内容の講座を企画したり、やってみる講座や呼んで欲しい講座などをお互いに要望を出し合ったりすることで、地区の健康課題解決に向けた講座が開催されている。 ・また「キラキラ健康学校」の定着により、地区住民の更なる健康意識向上につながっている。
62	和田地区	その他	その他	畦畔管理サポート		・和田地区の農業生産基盤を維持するため、地区内組合員の組織体制による畦畔の適正な管理を行い、農作物生産環境の整備や安定した生産量確保、品質の向上を図り持続的な農業・農村の発展に寄与するもの。 ・草刈り時期: 4月下旬、6月上旬、7月中旬、最終8月下旬予定 ・サポート隊員26名が5班に分かれて実施	・和田地区再生協議会、協同生活運動運営委員会、和田担い手生産組合、和田水士里の会が協力組織	・近年の気候変動による草刈り回数の増加や高齢化・担い手不足により草刈り作業が十分に行えず畦畔管理に支障を来すことかから、地域内有志による畦畔管理サポート隊を結成し、「和田地区畦畔管理サポート組合」が発足。	〔成果〕・大規模農家からの委託により委託農家の本業の作業に集中できる。 〔課題〕・安定的な運営に必要な予算確保 〔展望〕・サポート隊員の募集 ・将来的には法人化を進め、畦畔管理の委託業務を地区全体に拡大する。
63	神林地区	交流・つながりの促進	高齢者	神林バイナショナルカフェ		・認知症サポートーター養成講座を修了した、旧民生児童委員を中心に、月1回程度町内公民館やお寺などを会場に開催。 ・日常生活のためになるお話や体験など、その時々でテーマを変え、仲間づくりを進める。 ・介護をしている人、子育て中の人、誰かとお話したい人など、皆が気軽に話せる場を通じてつながりをつくり、安心して暮らせる地域を目指す。	・旧民生児童委員 ・神林地区まちづくり協議会 ・地域づくりセンター(公民館・福祉ひろば) ・JA神林支所	・地区の勉強会で香川大学の井上教授やあかばね内科神経内科医院の唐木医師から、健康維持のために、人と人との支えあいや、生きがいが大切であるという講演を聞き、地域の「つながり」が重要であることを確認。 ・当時の民生児童委員が主体となりオレンジカフェをアレンジし認知症の方だけでなく、世代を超えて交流できる場「バイナショナルカフェ」を企画。	・令和6年度で8年目。 ・現在、各町会11回の開催を目標に開催。各町会での開催となり移動手段のない方も参加できるようなになった。近くに住んでいても会話の機会が減少していた住民に絆の大切さを認識していただくことができた。(久しぶりに話せてよかったなどの感想が聞かれた) ・認知症の本人、家族に対して、介護保険以外での集まる場所のつづきになった。 ・地域住民の薬剤師から生活の見直しや知恵や工夫を伝えてもらった。地域に密着しているJAや信用金庫から詐欺の注意喚起や今の制度について話してもらった。地域の方や事業者との協働につながった。 ・参加者の固定化、開催内容のレパートリーの拡充、運営の確保などが現在の課題。
64	神林地区	学びの場・居場所づくり	高齢者	みんなのえんがわ		・令和5年度開催の「出張サロンin町内公民館」から名称を変更。 ・全町会の町内公民館で開催(不定期、各町会1～2回)。 ・移動販売や相談会、お茶飲みサロンなど町会独自に企画・運営を行い、センターが支援する形で「身近な居場所づくり」を行う。	・神林地区まちづくり協議会 ・地域づくりセンター(公民館・福祉ひろば)	・コロナ禍で、自宅から参りて行ける場所(町内公民館等)の居場所づくりが必要になった。 ・交通空白地のため、買い物難民が増加している。 ・令和5年度の活動がセンター主導で、職員間の日程調整等の課題があったため、持続的な活動となるよう今年度から町会が主体となって企画・運営を行い、センターが支援する形へと変更。	・今年度から名称を変更して始めたが、事業名と内容を周知するのに時間がかかった。 ・町会長や町会役員の方と相談しながら資料等の作成も行うため、地区住民と職人と近い距離で活動を行うことができています。
65	神林地区	学びの場・居場所づくり	小・中学生	ヒッポポ食堂		・令和5年度から神林公民館を会場に子ども食堂を開催。 ・月1回、子ども居場所づくりとして、食事提供や学習支援等を行っている。 ・町会連合会を通じて呼びかけ等で、地区住民からの食料提供なども行っている。	・ヒッポポ食堂 ・神林町会連合会	・有志の団体より地区内で子ども食堂を開きたいとの相談があり、町会連合会が協力という形で活動が開始。	・毎回定員いっぱい参加があり非常に好評。 ・単なる子ども居場所づくりだけでなく、地区内のサークル等の団体とも関わる企画を行うなど、多世代交流の場となるよう活動を行っている。
66	笹賀地区	ICT・情報化の推進	スマホ・パソコンを扱える年齢(小中学生)以上の若者すべて	デジステ笹賀		1 R5年5月からはじめた公民館講座「デジタルスキルをアップしよう! in笹賀公民館」の受講者が、R7年度からサークルとして独立し、自ら学んだスキルを活かして地区や町会活動のデジタル活用をサポートするだけでなく、SNSによる地域の魅力発信や実践的なスキルを学ぶ出前講座の開催を計画している。 1 活動日 毎月第1・第3水曜日 2 活動内容 (1) 第1水曜日 スマートフォン・パソコンの相談会 (2) 第3水曜日 話題のデジタルツール・ソフトなどの学習会のほか地域雑誌編集業の方を招いての学習会の開催 イ 笹賀フォトギャラリー 笹賀地区区内で撮った風景や季節を感じるものなど、お気に入りの写真等をInstagramに投稿し、笹賀地区の魅力を発信するプロジェクト	笹賀公民館	1 インターネット・SNSの活用が身近なものとなっている現在、気軽に相談したり、具体的な使い方を聞くことができる場が欲しいとの地域住民からの要望を受け、公民館講座として企画した(のちにR7年度から講座受講者自らサークルとして独立)。 2 スマートフォンやパソコンで使えるデジタルツールについて「住民同士が学び合おう場」「学んだことを活用できる場」「新しい情報に触れられる場」を提供するため、第1水曜日を自習・相談の日とし、第3水曜日をあらかじめ決めたテーマに沿った内容の講座(HP・ブログ・生成AI・3DCGなど)とした。 3 R6年度途中から、学んだことを地域のために活かしたいとの声から公民館の活動団体・サークル等へ広報した結果、地元卓球クラブのHPや、福祉ひろばのイベントカレンダー、某地区の自撮り体験の動画制作を行った。	1 高齢者を含む多くの地域住民や団体等に活用され、デジタルデバイス利用とともにデジタル技術の普及に貢献することができた。 2 現在、地域チャレンジャー応援事業補助金を活用しながら、主として地域住民や団体等向けの活動を展開しているが、いずれは松本市内全域活動の範囲を広げていく。また、ワークショップや初心者でも分かりやすいデジタルツール解説の作成なども進める予定。

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
						(活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等) 1 地域づくり協議会 (1)目的 ・地区住民が主体となって安心して生き生きと暮らせる住みよい地域社会を構築する (2)時期 ・平成27年に発足、令和4年度に規約等改正 ・令和5年度から運営委員会を年1回→毎月開催に変更 ・令和6年度地域課題である防災に特化した取り組みを行う(防災対策チーム会議を月1回開催) ・芳川地区防災マニュアルを作成し、全戸配布 2 芳川まるっと青空市 (1)目的 ・若い世代が「気軽」に参加できるイベントの提案があり、芳川地区で暮らす人々の交流することも目的として開催 (2)時期 ・モデル地区最終年の令和5年度に全4回(4町会)開催 ・令和6年度には、防災フェスタ(9/29)及び健康フェスタ(10/20)のイベント開催時に開催 ・令和7年度には、防災と健康フェスタ(10/19)、文化祭開催時に同時開催	・芳川地域づくり協議会	1 地域づくり協議会 活動の振り返り組織の員直しを検討し、地域課題の共有、視座・知恵の出し合いを主とし、各部会で取り組みを行う形としたもの。 2 芳川まるっと青空市 若い世代が「気軽」に参加できるイベントの提案ができな いか 検討し、交流できるイベントを開催することとなったもの。	・モデル事業として行った「芳川地域づくり協議会」の取組みは、芳川地域づくり協議会に引き継ぎ、持続可能な、より良い地域づくりのため、事務局員を配置し、事業展開を図る。
67	芳川地区	住民参加・自治	全て	芳川地域づくり協議会					
68	寿台地区	家庭・地域・学校の連携	小・中学生	明道中コミュニケーションスク ルプロジェクト		寿台、松原、内田、中山の各公民館が持ち回りで事務局を務め、地区行事を実施するにあたって地域が抱える問題を、「総合的な学習の時間」を活用した中学生のボランティアにより解決する取り組みを行っている。	明道コミュニケーションスクール運営委員会(地区公民館、地区町会連合会長、PTA会長、地域づくりセンター長、中学校教員、地域住民等)	・年にわずか2回程度のコミュニケーションスクール運営委員会の議論によって、学校のカリキュラム等運営計画や地域の行事等の営業が改善されることが非常に少なく、コミュニケーション事業の真価が発揮されない状況となっていた。 しかし、明道中の生徒は、長年地域のボランティア活動を実施してきた。 したがって、学習部領の改革を期に、令和2年度から運営委員会を再編し、「明道中コミュニケーションプロジェクト」が生まれた。 寿台地区では、住民の高齢化により地区行事の実施が大人数では困難になっている。 子どももが地区行事に参加し、地域での思い出づくりをするこ とで、将来の地区への定住や回帰を願う。	・「寿台夏祭」「寿台文化祭」では、出店の手伝いや、お楽しみ抽選会での景品配りの手伝い等を依頼し、参加者からは「中学生の応援がとてよかった」「感心した」といった好評があった。また、中学生の手伝いなしでは実施できないという声も上がっている。地域にとって中学生の力が必要であり、中学生は地域に必要な とされていることを互いに実感している。
69	寿台地区	学びの場・居場所づくり	小・中学生	寿台ハッピー食堂		・2016年3月より事業開始 ・食事を通して、「生きる力をつける」「作ってくれた人に感謝できる」「食べ物を大切に」そして地域の人たちの交流により、「地域全体で子育てを応援する」という目的で活動している。 ・主に旧寿台児童館にて、月2回不定期で行っている。	・寿台町会連合会(実施主体) ・民生児童委員(協力団体)		・調理学習、生活体験(味噌作り、しめ縄作り、松本七ダづくり) ・フードロス、フードドライブ学習、学習支援などを行っている。
70	寿台地区	地域教育・人材育成	壮年層	壮青会		・次世代を育成するための活動 ・連合町会行事に参加・活動してもらうことで、地域への愛着を深める。 また、町会役員と顔の見える関係となり、地区の今後について考えるきっかけとなる。	・町会連合会(主体) ・壮青会	・地区内が高齢化し、役員のなり手がなくいため、次世代を育てて将来の役員候補とした。	壮青会を立ち上げてまだ3年のため、成果としてはまだ無いが、今後の見込みとしては、大きく育てていきたい。
71	寿台地区	交通・移動の利便性	高齢者	寿台マルシエ		・買い物弱者の対応で、5～6年ほどの業者が来て衣類、靴、食品等の販賣を実施。 歩いていける場所で、楽しく買い物ができると喜ばれている。 ・春と秋に開催	・町会連合会・地区生活支援員(主体) ・地区福祉うろば(協力)	買い物弱者のため	6年以上行っているため、それなりの成果は出ている。他地区からの参加者も増えてきている。今後の展望もあり。
72	寿台地区	交流、つながりの促進	全て	居酒屋「よしましよ」		・居場所づくり、交流の場 ・月1回程度の開催	・町会連合会(主体) ・地区生活支援員(協力)	男性の居場所づくりとして始まり、現在も男性の参加が主だが、女性も参加するようになってきている。	10年以上続いていて、毎回25名～30名の出席がある。
73	松原地区	地域経済・地域資源活用	全て	松原モールぶろしえくと支援		松原地区の住民有志が地区内にある「松原ショッピングモール」の活性化を図るためにコンサートやイルミネーションイベント、日常的な美化活動を行っている。	松原モールぶろしえくと	5年先、10年先までの地域活性化について考え始めたグループが、具体的な目標として地区内のモールにあるからくり時計の修復とモールの美化活動を2018年の春から開始した。からくり時計修復の費用を捻出するため、定期的にコンサートやクリスマスのイルミネーションを時計台まわりでを行い、地域住民の関心を集め募金活動を行った。	からくり時計修復を業者に頼んだ場合の費用は法外であったため、協力者の協力を広げ、全ての修復を地域住民の手で行い、令和2年10月には修復完成記念式典を行うことができた。 また、モールの美化活動については、プロジェクトマスターと協力者により冬季以外毎週土曜日の朝7時から11、2時間かけて清掃と草取りと、年1回程度時計台を囲むでのコンサートを継続実施している。
74	松原地区	住民参加・自治	全て	松原地区町会連合会自主防災 会		松原地区の住民有志、防災防犯部長、センター職員、避難所担当職員らが、地域の防災力を高めるために防災について学習をしたり避難所運営について検討している。	松原地区町会連合会自主防災会	公民館主催で令和3年5月10日に山梨防災安全センターと町会地方気象台を訪問し、防災研修を行った。その時の参加者を中心になって、なかなか体制整備が進まなかった地域の防災体制にドライブをかけるため、研究会という形でグループを立ち上げ活動を開始した。	7月～8月地区住民対象とした防災意識調査アンケートの実施 8月～9月防災講座の実施 11月 総合防災訓練 令和7年3月に改訂された市の避難所運営マニュアルを参考に、地区の実情に合わせた避難所運営について検討、防災訓練などを通してブラッシュアップしていく。 ・現状の町会長や防災防犯部長は1年もしくは2年任期のため、地域の防災体制に対して危機感を持って、長期的な視点で課題解決に取り組むことが難しい。それを補いサポートする形での活動を目標としている。

No.	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
82	今井地区	子育て・教育環境	小・中学生	今井っ子わくわくひろば		・目的 今井地区における子どもたちの居場所づくり活動の一環として、地域全体で子育てを行う体制を作り、子どもの健全な育成を促し地域との結びつきを深めるもの ・実施時期 小学校の長期休みにあわせて実施 ・場所 今井公民館 ・対象 小学生、中学生（お手伝い） ・方法と体制 地域関係団体協力のもと、様々な学習体験や食事提供を行う。	・今井福祉協議会 ・今井地区民生・児童委員協議会 ・今井地区食生活改善推進委員会 ・今井地区子ども会育成会 ・今井地区スポーツ協会 ・今井公民館図書視察委員会 ・簡易道場大瀬庵 ・若妻大学（今井） ・林盛中学校そばクラブ ・学力向上推進教員（今井在住）	地域住民から子どもたちの長期休み中、安心・安全かつ健全な居場所づくり。また、今井の旬野菜を使用した食事提供を行うことにより、地域住民や学生を超えた交流が広がった。子どもたちの長期休みにあわせて行うことで、保護者の負担軽減につながっている。 ・ボランティアと共に行う工作や料理作りなど様々な体験が子どもたちの成長につながる。 ・地区関係団体の理解と協力の下、事業が実施できている。 ・ボランティアの積極的な参画と、職員の負担軽減が課題。	・4日間、小中学生延べ203名、地域ボランティア延べ56名が参加 ・地域住民や学生を超えた交流が広がった。 ・子どもたちの長期休みにあわせて行うことで、保護者の負担軽減につながっている。 ・ボランティアと共に行う工作や料理作りなど様々な体験が子どもたちの成長につながる。 ・地区関係団体の理解と協力の下、事業が実施できている。 ・ボランティアの積極的な参画と、職員の負担軽減が課題。
83	今井地区	地域経済・地域資源活用	全て	(仮称) 今井の魅力発信		・今井地区の特性や魅力を地区内外に広く知ってもらうとともに、地域住民の地元愛を育む。 1) 平成10年に作られた「今井の父ちゃん」ほか数曲あるご当地ソングを再発信 ・地元企業、保育園、小中学校、児童センター、高齢者施設等各所にCDを配付し、曲を流してもらうよう依頼 ・R6年7月～「今井の父ちゃん」の曲に合わせた健康体操を考案、R7年7月に盆踊りを制作。「今井ドンパン祭り」や「今井地区文化祭」にて当時の作詞、作曲者にも出演を頼み生演奏付で発表。 ・オリジナルTシャツ制作 2) 地区独自のイメージキャラクター募集 ・R7年7月～9月、今井地区をイメージした誰もが親しみやすいキャラクターデザインを募集。11月の「今井地区文化祭」にて応募作品を公表予定。	・今井福祉協議会 ・今井公民館 ・今井町連合会 ・地区生活支援員	1)ご当地ソングがある地区は珍しく、りんご農家の日常を描いた温かみと味わいがあふれる「今井の父ちゃん」をこのまま残れにせずともつけない、広く発信できないから住民から地域づくりに参画して相談があった。かつてフランス・パリの振付を考案した者があなかったことから、子どもから高齢者まで誰もができる体操を作った住民に広めようという話になり、今井福祉協議会健康部会が協力して活動開始となった。 2)R6年11月、地区文化祭において来場者の動線の悪さが課題となり、当時の町内公民館長の一人が地区の暮るるみキャラクターを案内役として活用する案を思いついた。地区文化祭以外にも活用の見込みがあるため実施に至った。	
84	本郷地区	防災・安全対策	高齢者	スマホサロン		・防災、介護予防、生きがいづくりに役立つスマホの基本的な操作などを学ぶ ・月1回本郷福祉ひろばと南郷福祉ひろばで開催 ・地区住民	・社協本郷支会 ・福祉ひろば ・北部地域包括支援センター ・地区生活支援員	2020年夏、大雨や台風による自然災害が発生。「避難所がわからない」「防災無線が聞こえない」などの住民からの問い合わせが多発し、町会長への電話が繋がらないとの課題が地区の会議で出された。その課題解決の一つとして包括支援センター職員と地区生活支援委員の連携と福祉ひろばの協力で事業を開始	・住民同士で教える機会を設け、高齢者が安心してスマホで色々なことが出来るようになってきた。昨年頃からお茶会も取り入れたことで、住民同士のつながりづくりがさらに深まってきた。今後も状況に合わせて内容を検討しながら進めていく。
85	本郷地区	交流・つながりの促進	その他	世代間交流会		・高齢者と小学生と一緒に楽しみながら交流し、相互理解を深めるきっかけづくり ・夏休み、冬休みの長期休みにテレビゲームのeスポーツ体験や車の遊び、子どもたちがまっている遊びを通じて交流 ・南郷児童館、浅間児童センターに通う小学生、福祉ひろば利用者などと呼びかけ、福祉ひろばや公民館、文化センターで開催	・社協本郷支会 ・福祉ひろば ・北部地域包括支援センター ・地区生活支援員 ・信州大学ボランティアサークル	・「世代間交流会を行うことで、高齢者の課題解決に繋がるかもしれない」子どもから高齢者まで誰でも楽しむことができるeスポーツ世代間交流会を包括支援センター職員と地区生活支援委員の連携で計画 ・今年度で5年目 ・信大ボランティアサークルが運営や準備に協力 ・今年度の夏休みは、浅間児童センターと社協の共催で2回シリーズで開催。1回目「ふくし講座」では、「ユニバーサルデザイン」についてのお話や「障害者に対する理解とアトリエM00のご紹介」で高齢者や障害のある方への理解を深めた。2回目は、1回目にみんなができるゲームを考えたeスポーツなどのゲームで、高齢者、子ども、障害のある方と交流した。	・事前のふくし講座で高齢者や障害のある方への理解を深めたことで2回目の世代間交流会の開催にも配慮が図られ、子どもも、高齢者、障害のある方でもみんなが楽しめるゲーム交流が出来た。
86	本郷地区	子育て・教育環境	その他	子育て支援講座		・育児支援講座を開催し、少しでも不安の解消に努める ①交流の場を提供することにより、同じ世代の親同士でコミュニケーションがとれる ②子育て中の親が、悩みを一人で抱え込まず、困った時に身近に相談できる先を増やす ③自分の地区に、自分のことを見守ってくれる存在がいることで孤独感を感じない ・令和6年度から実施 ・本郷福祉ひろば、南郷福祉ひろばを会場に開催 ・本郷地区にお住まいのお子さんとその保護者 ・講師に関しては、今後も事業が継続していかれるように、地域に住む助産師さんや関係職員等に依頼（本郷消防署、助産院ラフ、北部保健センター） ・地区民生協議会長も趣旨に賛同。チラシの配布や主任児童委員も当日の運営を協力 ・地域の子育てボランティアさんにご協力いただいている。	・社協本郷支会 ・地区担当保健師 ・社協地区担当 ・地区生活支援員 ・民生委員、主任児童委員 ・福祉ひろば（本郷、南郷） ・子育てボランティア ・浅間児童センター （ついでのひろば） ・南郷子どもプラザ	・保健師の地区課題分析で分かったこと ①年間20人の出生があり、市内で4番目に多い ②妊婦健診の時、育児負担感のある親が多い ③乳幼児健診の時、離乳食や食事に関する相談が約半数で、食事に悩んでいる親が多い ・地区担当保健師と地区生活支援員とで相談し、交流の場を提供することで、一人で悩まず抱え込まず、困った時に身近に相談できる先を増やすことができるようになることを目的に、子育て支援講座を企画。 ・今年度の内容は、「幼児食へのステップアップ講座」「子どもの救急対応～いざというときに～」の4講座を開催。	・昨年度開催された4講座も大変好評で、保護者の方向性や地域の子育てボランティアの皆さんとも交流し、顔の見える関係づくりが出来た。 ・浅間ついでのひろば職員や南郷子どもプラザの職員にも実施 ・今年は、さらに回数も増え地域の子育て支援の場として定着出来るように。
87	本郷地区	地域教育・人材育成	その他	子育て応援ボランティア養成講座		・本郷地区の抱い子育て成講座として企画 ・終了後は、子育て支援講座を含む地域の子育てに関する事業や行事でのボランティア活動のきっかけづくり ・本郷公民館で地区住民を対象に1回の開催	・社協本郷支会 ・社協地区担当 ・地区生活支援員 ・地区担当保健師	・本郷地区子育て支援講座の開催をきっかけに地域の子育てに興味のある方の方の担い手づくりとして計画 ・「本郷地区の状況について（講師：地区担当保健師）」「乳幼児の特性と気を付けること（講師：のぼる保育園園長）」「乳幼児の保護者への接し方、気を付けることについて（講師：子どもプラザ所長）」に講師を依頼して開催 ・今年度は、子育て応援ボランティアブラッシュアップ講座を子育て応援ボランティアさんや子育てに関するボランティアに興味のある方を対象で「子どもが幸せに育つために」に講師を依頼して開催。	・子育てに関するボランティアに興味のある方の方の数も参加し、今年度開催したついでの広場交流会や夏休みの世代間交流会、公民館事業などに参加していただけている。 ・今年度も子育て支援の講座以外にも活躍の場が広がっている。

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
98	安曇地区	交流・つながりの促進	全て	ちよつとよっていきましょ う月1回「診療ついでに ちよつと一息～	1 目的 健康とくらしの調査の結果から見る地区の課題の悪循環を 抑制し、公民館事業等の現状の改善を目的に開催するもの 2 時期 5～10月の間の月1回(年6回) 3 場所 第3回目の水曜日 4 対象 大野川区事務所 5 一般 方法 地元団体(大野川区町会等)＋行政(安曇地区地域づくりセ ンター等)が、通いの場をつくるもの	大野川区町会 のいくら観光協会 関係者・関係団体等 大野川区民生委員 安曇地区地域づくりセンター 安曇公民館 安曇地区福祉ひろば 西部保健センター 西部地域包括支援センター 松本市社協安曇事業所 安曇地区生活支援員	1 安曇地区関係職員情報交換会(現在の安曇地区関係職員連 携会議)が、健康とくらしの調査の結果から見る安曇地区の課 題を踏まえた事業計画(案)を検討 【調査結果1】 通いの場や趣味の会などに参加する割合が低い。 【調査結果2】 認知機能低下者、閉じこもり者の割合が高い。 【課題1】 公民館事業等の参加者の固定化及び参加者数が増えない。 【課題2】 特に上地区(大野川区等)の参加者数が少ない 2 課題及び事業計画(案)を地元団体と共有するとともに、 主催者として関わってもらえるよう調整 3 来場しやすい等を目指す	1 令和3年6月から月に1回開催 2 近所で誘い合わせて来場する者がいた。 3 来場者同士、話をする姿が見られた。 4 関係団体と協議をし、抱き合わせ企画を実 施 5 令和5年度から、旗振り役を変更(安曇公 民館→安曇地区生活支援員) 6 事業開始から5年、固定客がみられるよう になり、事業継続を望む声が多い。	
99	安曇地区	子育て・教育環境	青年層	まつもとお山ですくすく子 育てサロン	1 目的 子育て中の親の育児への不安感や、育児の孤立化の解消を 目指し、子育てをしている親同士の交流及び地域住民や保健師 とのつながりづくりを目的に開催するもの 2 時期 通年(年8回) 3 場所 ふれあいパーク乗鞍、一ノ瀬園地等 4 対象 主に0歳～5歳くらいまでのお子様を子育て中の親子 5 方法 乗鞍高原の豊かな自然の中で自然保育を実践している「の りくら自然保育木のこ」を中心に講師をお迎えし、外遊び、絵 本の読み聞かせ、散歩、薪火づくり、野菜の収穫体験等を行 なう。	のりくら自然保育 木のこ 安曇公民館 健康づくり課西部保健センター	1 松本市安曇地区内にある大野川区町会では、児童館等、子 ども(特に未就学児)及び子育て世代同士が交流できる機会や 場所がない。このことで生じる孤独感や悩み、日々の暮らしで 感じる生活の不便さが、人口減少につながっていると考えた。 2 近しい環境にある同士が交流できる場をつくることで、 悩みを分かち合うと同時に、地域の魅力及び山での暮らしの楽 しさを味わってもらえる機会となるよう、この活動を始めた。	1 令和5年度に開始した市民協会の取り組み 2 令和7年度は、8回開催 3 実施の都度、参加者からのアンケートを基 に、企画内容及び実施場所等、柔軟に対応して いる。 4 数回は日曜開催とし、父親の参加を狙っ た。 5 地域とのつながりづくりに向け、地元住民 等と調整し、本事業への参画を目指す。	
100	安曇地区	高齢者支援・福祉	高齢者	出張エルダー (福祉ひろば事業)	・目的: 各町会での健康増進と閉じこもりの防止 ・実施時期: 令和6年度から毎週(一部町会では5年度の途中か ら) ・場所: 5会場 ・対象: 5町会のいきいき百歳体操サークル参加者 ・方法: 5町会のいきいき百歳体操実施日に併せて実施 ・実施体制: 5町会5会場5会場で実施(1回30分)	安曇地区地域づくりセンター 安曇地区福祉ひろば 大野田町会 島々町会 穂積町会 穂積町会 大野川区町会 安曇地区生活支援員	・月1度の福祉ひろばで開催するエルダー事業に人が集まらな い。 ・安曇地区関係職員連携会議で課題として取り上げた。 ・5町会にいきいき百歳体操サークルが発足し人が集まり好評 である。 ・保健師、包括支援センター、生活支援員が健康講座やお役立 ち講座をいきいき百歳体操とタイアップして開催している。 ・そこへエルダーを持って出向いて行けばどうか。	・福祉ひろばで開催していた時と比べ参加者は 5倍強になった。(16人⇒100人以上/1ヶ月) ・今後はエルダーコンテンツを幅広く使って参 加者を飽きさせないようにしたい。	
101	安曇地区	医療・健康づくり	全て	通いの場に合わせた健康タ イアップ講座	(1)経過・目的 健康情報の普及啓発の場が乏しいという課題解決のため、町会 毎定期的に集まれる場としていきいき百歳体操を利用し、関係 機関が持ち回り健康情報を発信する。 (2)対象と方法 いきいき百歳体操参加者を対象に、関係機関がそれぞれ発信し たい情報を30分で講義。各町会・各サークルにおいて、3か月に 1回を目安に企画。地区担当保健師、地域包括支援センター、 地区生活支援員で発信したい内容を検討。各町会・サークルと 日程調整を行い実施。	・地区生活支援員(西部社協) ・西部地域包括支援センター ・西部保健センター	交通面で課題がある安曇地区において、人の孤立化、健康情報 の普及啓発の場が乏しいという課題がある。課題に対し生活支 援員が中心となり、安曇地区関係職員情報交換会の場で検討し 実施に至った。昨年度から、いきいき百歳体操でエルダーをや らない週に、3か月に1回を目安に実施	・各町会で行うことで多くの参加者に情報提供 できるようになった。 ・いきいき百歳体操のマンネリ化の解消になった ている。 ・同じ内容を各町会で行うので、職員の手配や 日程調整は苦労していない。 ・今後は、いきいき百歳体操提供していない町会 でも情報提供する場を作っていく。	
102	奈川地区	交流・つながりの促進	全て	「奈川の人」を増やそう大 作戦	・信州大学生有志が令和3年に活動をはじめ、今年で5年目の 取組み ・学生が奈川へ足を運ぶきっかけ作りとして「ソフトボール大 会」を開催し、地域住民との交流をはかる。 ・若者のサークル活動などを奈川地区へ誘致し、大学生と地域 の若者の交流をはかる。 ・これまでの取組みを継承し、保平カブの収穫や奈川獅子舞へ の参加など、農業や伝統文化の継承に関心をもつ。 ・活動場所は奈川地区全域 ・活動期間は令和7年5月から令和7年11月	・奈川えんがわプロジェクト	・令和2年度、まつもと暮らし応援が行った信大寄付講義 (松本市魅力発見ゼミ)で、奈川地区のことを知り、奈川地区 を訪れたことで奈川の暮らしなどに関心を持った大学生有志 が、その後も定期的に奈川地区を訪れ、奈川地区で活動した と考え、「奈川えんがわプロジェクト」を立ち上げた。 ・地域づくりセンターの紹介により、農家、個人で生業を営む 人、クワイイングルサークル利用者など多くの人と繋がりを持ち、地 域の人に相談したり教えてもらいながら、自分たちの取組みを 進めた。 ・少子高齢が著しい奈川地区にあって、特に子どもたちの交 流を大事にして取り組んだ。	・地域や行政と連携して、活動を展開している こと。 ・拠点(市営住宅)があることで、地域と深く かわることができている。 ・活動が浸透しつつあり、地域住民に受け入れ られ認められている。 ・新たなメンバーを募り、地域と学生の協働マ ニュアルを作るなど、メンバーの入れ替わりが あっても活動を継続する意思がある。	
103	奈川地区	交流・つながりの促進	全て	ながわ青空マルシェ&マー ケット	・地域のワーキングショップで「マルシェをやりたい」メンバーが チームをつくり、主体的にイベントを企画した。 ・今年で3回目の開催 ・地域の中心地にある施設および休園中の保育園の活用をし て、地区内外に奈川の魅力を発信しながら、大勢の人が交流す る場づくりをして、地域の元気を創出した。 ・開催日: 令和7年8月9日 ・場所: ながわ山影館及び奈川保育園 ・来場者数: 延べ400人位(スタッフ・出店者等含む) ・出店数: 24	・ながわ青空マルシェ&マー ケット実行委員会	・地域のワーキングショップで、自分たちが主体となつて取り組み たいに活動して話し合った。 ・夏場の奈川地区の魅力を内外の人に知ってほしい、奈川を訪 れて欲しいという思いから、その手段としてマルシェを開催す ることになった。 ・実行委員会を立ち上げて、ボランティアも募りながら進め た。 ・studio-Lにマルシェ開催のノウハウを学び、studio-Lに相談 しアドバイスしてもらいながら進めた。	・特約可能な奈川地区推進協議会の取組みから 生まれた、住民主体の新たな活動であること。 ・ボランティアの参加・協力を得て、人との つながりがイベントを成功させることができ た。 ・3回目の開催となり、地区内施設の有効活用 を構築し計画した。 ・来場者は昨年度の半数程度であった。 ・今後は会場の固定化も検討し、工夫しながら 継続していくきたい。 ・会場周辺整備を自主的に担う、男性ボラン ティアグループが発足した。	

No	回答者所属 (地区名・課名 等)	関連分野	対象	事業名・活動名	Q1	Q2 概要 (活動の目的、時期、場所、対象、方法、実施体制等)	Q3 実施主体 関係者・関係団体等	Q4 活動のきっかけ／取組みに至るまでの経過 (誰が、どんなことを考え、誰に相談し、どう行動したか等)	Q5 活動の成果および課題、 今後の展望等
104	奈川地区	住民参加・自治	全て	持続可能な奈川地区推進事業		・少子高齢化と人口減少が著しい奈川地区において、将来にわたって奈川地区が持続可能な地域となるために、令和3年9月に「持続可能な奈川地区推進協議会」を設立し、地域住民をはじめ、関係団体や行政、専門家などと、様々な意見交換や調査、ワークショップなどを続け、令和5年8月10日に知地域づくりの基本姿勢と具体的な行動を示した「持続可能な奈川地区推進計画」を策定した。 ・令和4年11月から地域でのワークショップが始まり、住民主体の活動を生み出す取組みが始まった。令和6年8月に「ワークシヨップから生まれた企画（イベント）」を実践した。 ・推進計画を道標として、引き続き、課題解決に向けた取組みを行ない、住民主体の活動を生み出し支援することともに、様々な取組みをコーディネートする人材の発掘と育成を行う。	実施主体 関係者・関係団体等 会 ・持続可能な奈川地区推進協議会	・H29.4月 奈川地区地域づくり協議会「ふるさと奈川」をおこす会」を設立し、地域と地域づくりセンターが連携して課題解決に向けた取組みを始める。 ・H30.3月 課題解決の実行部隊として「絆ふるさと奈川」を設立。おこす会との連携により取組みを行なった。 ・地域主体で協議等を進めたが、急激な人口減少や保育園の休園もあり、地域住民におさまらぬ感や閉塞感があった。また、市役所では、人口減少はやむを得ない、費用対効果が悪く問題とし、施設の改修など奈川地区の事業には予算がつかない状況であった。 ・R2.9月 地域が存続するためには、地域の目指す方向性を明確にし、そのうえで市役所に予算要求することが必要との見解に立ち、住民と行政、関係機関、有識者が連携して取り組むための協議会を設立することになった。	・地域住民が主体となりながら、地域外の人士と交流・関係団体の多くが主体の参加と協働で推進計画の表現を目指している。 ・市内34地区に先駆けて、地域づくり推進のための体制をつくり取組を進めている。 ・持続可能な奈川地区推進協議会は令和7年度末で解散し、その後の活動主体は「ふるさと奈川」をおこす会と奈川」に移行する予定。 ・ふるさと奈川」をおこす会の推進体制の再構築が必要。
						食育活動の推進、食生活改善推進員の活動促進。 時期 梓川地区、文化祭(11月) 場所 文化祭会場 対象 地区住民	主体：主任児童委員、民生児童委員 関係団体：福祉ひろば、地区生活支援員、地区担当保健師	会員は、76名おり、主体的な活動が行われている。男の運動ひろばや子育て支援事業おひさまなどの福祉ひろばは事業への協力を分担して行っている。コロナ前には年2回お井田作りを行っていたが、業者に委託となり現在は行っていない。松本市内でも多くの会員を有する梓川地区の活動を広げるため以下のような取り組みを行った。 7月 食生活改善推進員と協議し、昨年同様実施の方向となった。また、昨年200食ですぐ無くなってしまうことから、今年度は量を増やす予定。 9月 文化祭実行委員会の事務局と協議のし、分量を検討する予定 11月 実施予定。	・R6年度は、おひさま汁の試食を200食用意を分したが、すくなくなくなった。R7年度は分量を増やす予定。
105	梓川地区	地域教育・人材育成	全て	梓川地区 食生活改善推進員との地区での活動		・目的：子育て支援 ・実施時期：月1回(第一木曜日) ・場所：福祉ひろば ・内容：ふれあい遊び、読み聞かせ、情報交換など、希望者には身体計測、健康相談。 ・参加人員：民生委員 6〜7人、参加者 約2組 (R7年4月〜8月平均)	主体：主任児童委員、民生児童委員 関係団体：福祉ひろば、地区生活支援員、地区担当保健師	地区の商店街が、こんなには赤ちゃん事業を実施していく中で、転入者が多くお母さん同士とのつながりが薄いと感じている。同時に保護者からのニーズもあり平成26年から開始。主体は主任児童委員、民生児童委員であるが、福祉ひろば事業としての位置づけから再開している。コロナ期間中は休止していたがR5年1月から再開している。 内容の検討は主任児童委員を中心として福祉ひろば職員や地区担当保健師と行っており、助産師によるタッチケアや食改さんがR7年度の内容としては、助産師によるタッチ講座による防災講座が予定されている。	・R6年度は、おひさま汁の試食を200食用意を分したが、すくなくなくなった。R7年度は分量を増やす予定。
106	梓川地区	子育て・教育環境	乳幼児	おひさま (子育て支援事業)		・目的：子育て支援 ・実施時期：月1回(第一木曜日) ・場所：福祉ひろば ・内容：ふれあい遊び、読み聞かせ、情報交換など、希望者には身体計測、健康相談。 ・参加人員：民生委員 6〜7人、参加者 約2組 (R7年4月〜8月平均)	主体：主任児童委員、民生児童委員 関係団体：福祉ひろば、地区生活支援員、地区担当保健師	地区の商店街が、こんなには赤ちゃん事業を実施していく中で、転入者が多くお母さん同士とのつながりが薄いと感じている。同時に保護者からのニーズもあり平成26年から開始。主体は主任児童委員、民生児童委員であるが、福祉ひろば事業としての位置づけから再開している。コロナ期間中は休止していたがR5年1月から再開している。 内容の検討は主任児童委員を中心として福祉ひろば職員や地区担当保健師と行っており、助産師によるタッチケアや食改さんがR7年度の内容としては、助産師によるタッチ講座による防災講座が予定されている。	・R6年度は、おひさま汁の試食を200食用意を分したが、すくなくなくなった。R7年度は分量を増やす予定。
107	梓川地区	交流、つながりの促進	小・中学生	こどもと連携した価値性化事業		・目的：こども達が地域の一員として未来に生き抜く力を育てる。 また、地域と協働することで地域の活性化を図る。 ・実施時期：10月のイベントに向け中学の総合学習の時間を活用。 ・場所：中学校、支所駐屯場 ・内容：イベントの中学生担当ブースの企画立案 (商工会等と連携する。地域の事業主等の助言を得た社会学習活動)。 ・参加人員：梓川中学校3年生約110名、地区事業者、地区住民等	主体：商工会青年部、梓川地区ス ポーツ協会 関係団体：地区事業者、地区住民、公民館、まちづくり協議会、地区生活支援員、地域づくりセンター	地区の商店街が、こんなには赤ちゃん事業を実施していく中で、転入者が多くお母さん同士とのつながりが薄いと感じている。同時に保護者からのニーズもあり平成26年から開始。主体は主任児童委員、民生児童委員であるが、福祉ひろば事業としての位置づけから再開している。コロナ期間中は休止していたがR5年1月から再開している。 内容の検討は主任児童委員を中心として福祉ひろば職員や地区担当保健師と行っており、助産師によるタッチケアや食改さんがR7年度の内容としては、助産師によるタッチ講座による防災講座が予定されている。	・R6年度は、おひさま汁の試食を200食用意を分したが、すくなくなくなった。R7年度は分量を増やす予定。
108	波田地区	高齢者支援・福祉	高齢者	モデル町会推進事業		【目的】 地域包括ケアシステム松本モデルの構築に向け、町会や隣組単位でのつながりや向こう三軒両隣の関係を築いていくための新たな取り組みを推進しているもの。 【対象】 原則として2年目の町会長 【方法】 毎年2〜3町会を選定 【内容】 健康、介護予防講座や目標に向けたの独自の取り組み 【実施体制等】 地区担当者会議の構成団体で町会の新掲事業に向けた支援を行うとともに、まちづくり協議会から支援金を交付、年度末に行う地域づくり講演会時に取り組み成果を発表する場を毎年設けているもの。	波田まちづくり協議会	平成29年度に地区関係団体の代表者等によるまちづくりワークショップを進める中で、地区の目標を打ち出す活動する高齢者づくしと高齢者に感謝する人づくし、つながり、笑顔、向こう三軒両隣の定例、取り組みを推進していく手段として平成30年度から事業を開始したものである。	H30…3町会、R1…2町会、R2…R4…3町会、R5…3町会、R6…3町会、R7…3町会、R8…3町会、R9…3町会、R10…3町会、R11…3町会、R12…3町会、R13…3町会、R14…3町会、R15…3町会、R16…3町会、R17…3町会、R18…3町会、R19…3町会、R20…3町会、R21…3町会、R22…3町会、R23…3町会、R24…3町会、R25…3町会、R26…3町会、R27…3町会、R28…3町会、R29…3町会、R30…3町会、R31…3町会、R32…3町会、R33…3町会、R34…3町会、R35…3町会、R36…3町会、R37…3町会、R38…3町会、R39…3町会、R40…3町会、R41…3町会、R42…3町会、R43…3町会、R44…3町会、R45…3町会、R46…3町会、R47…3町会、R48…3町会、R49…3町会、R50…3町会、R51…3町会、R52…3町会、R53…3町会、R54…3町会、R55…3町会、R56…3町会、R57…3町会、R58…3町会、R59…3町会、R60…3町会、R61…3町会、R62…3町会、R63…3町会、R64…3町会、R65…3町会、R66…3町会、R67…3町会、R68…3町会、R69…3町会、R70…3町会、R71…3町会、R72…3町会、R73…3町会、R74…3町会、R75…3町会、R76…3町会、R77…3町会、R78…3町会、R79…3町会、R80…3町会、R81…3町会、R82…3町会、R83…3町会、R84…3町会、R85…3町会、R86…3町会、R87…3町会、R88…3町会、R89…3町会、R90…3町会、R91…3町会、R92…3町会、R93…3町会、R94…3町会、R95…3町会、R96…3町会、R97…3町会、R98…3町会、R99…3町会、R100…3町会、R101…3町会、R102…3町会、R103…3町会、R104…3町会、R105…3町会、R106…3町会、R107…3町会、R108…3町会、R109…3町会、R110…3町会、R111…3町会、R112…3町会、R113…3町会、R114…3町会、R115…3町会、R116…3町会、R117…3町会、R118…3町会、R119…3町会、R120…3町会、R121…3町会、R122…3町会、R123…3町会、R124…3町会、R125…3町会、R126…3町会、R127…3町会、R128…3町会、R129…3町会、R130…3町会、R131…3町会、R132…3町会、R133…3町会、R134…3町会、R135…3町会、R136…3町会、R137…3町会、R138…3町会、R139…3町会、R140…3町会、R141…3町会、R142…3町会、R143…3町会、R144…3町会、R145…3町会、R146…3町会、R147…3町会、R148…3町会、R149…3町会、R150…3町会、R151…3町会、R152…3町会、R153…3町会、R154…3町会、R155…3町会、R156…3町会、R157…3町会、R158…3町会、R159…3町会、R160…3町会、R161…3町会、R162…3町会、R163…3町会、R164…3町会、R165…3町会、R166…3町会、R167…3町会、R168…3町会、R169…3町会、R170…3町会、R171…3町会、R172…3町会、R173…3町会、R174…3町会、R175…3町会、R176…3町会、R177…3町会、R178…3町会、R179…3町会、R180…3町会、R181…3町会、R182…3町会、R183…3町会、R184…3町会、R185…3町会、R186…3町会、R187…3町会、R188…3町会、R189…3町会、R190…3町会、R191…3町会、R192…3町会、R193…3町会、R194…3町会、R195…3町会、R196…3町会、R197…3町会、R198…3町会、R199…3町会、R200…3町会、R201…3町会、R202…3町会、R203…3町会、R204…3町会、R205…3町会、R206…3町会、R207…3町会、R208…3町会、R209…3町会、R210…3町会、R211…3町会、R212…3町会、R213…3町会、R214…3町会、R215…3町会、R216…3町会、R217…3町会、R218…3町会、R219…3町会、R220…3町会、R221…3町会、R222…3町会、R223…3町会、R224…3町会、R225…3町会、R226…3町会、R227…3町会、R228…3町会、R229…3町会、R230…3町会、R231…3町会、R232…3町会、R233…3町会、R234…3町会、R235…3町会、R236…3町会、R237…3町会、R238…3町会、R239…3町会、R240…3町会、R241…3町会、R242…3町会、R243…3町会、R244…3町会、R245…3町会、R246…3町会、R247…3町会、R248…3町会、R249…3町会、R250…3町会、R251…3町会、R252…3町会、R253…3町会、R254…3町会、R255…3町会、R256…3町会、R257…3町会、R258…3町会、R259…3町会、R260…3町会、R261…3町会、R262…3町会、R263…3町会、R264…3町会、R265…3町会、R266…3町会、R267…3町会、R268…3町会、R269…3町会、R270…3町会、R271…3町会、R272…3町会、R273…3町会、R274…3町会、R275…3町会、R276…3町会、R277…3町会、R278…3町会、R279…3町会、R280…3町会、R281…3町会、R282…3町会、R283…3町会、R284…3町会、R285…3町会、R286…3町会、R287…3町会、R288…3町会、R289…3町会、R290…3町会、R291…3町会、R292…3町会、R293…3町会、R294…3町会、R295…3町会、R296…3町会、R297…3町会、R298…3町会、R299…3町会、R300…3町会、R301…3町会、R302…3町会、R303…3町会、R304…3町会、R305…3町会、R306…3町会、R307…3町会、R308…3町会、R309…3町会、R310…3町会、R311…3町会、R312…3町会、R313…3町会、R314…3町会、R315…3町会、R316…3町会、R317…3町会、R318…3町会、R319…3町会、R320…3町会、R321…3町会、R322…3町会、R323…3町会、R324…3町会、R325…3町会、R326…3町会、R327…3町会、R328…3町会、R329…3町会、R330…3町会、R331…3町会、R332…3町会、R333…3町会、R334…3町会、R335…3町会、R336…3町会、R337…3町会、R338…3町会、R339…3町会、R340…3町会、R341…3町会、R342…3町会、R343…3町会、R344…3町会、R345…3町会、R346…3町会、R347…3町会、R348…3町会、R349…3町会、R350…3町会、R351…3町会、R352…3町会、R353…3町会、R354…3町会、R355…3町会、R356…3町会、R357…3町会、R358…3町会、R359…3町会、R360…3町会、R361…3町会、R362…3町会、R363…3町会、R364…3町会、R365…3町会、R366…3町会、R367…3町会、R368…3町会、R369…3町会、R370…3町会、R371…3町会、R372…3町会、R373…3町会、R374…3町会、R375…3町会、R376…3町会、R377…3町会、R378…3町会、R379…3町会、R380…3町会、R381…3町会、R382…3町会、R383…3町会、R384…3町会、R385…3町会、R386…3町会、R387…3町会、R388…3町会、R389…3町会、R390…3町会、R391…3町会、R392…3町会、R393…3町会、R394…3町会、R395…3町会、R396…3町会、R397…3町会、R398…3町会、R399…3町会、R400…3町会、R401…3町会、R402…3町会、R403…3町会、R404…3町会、R405…3町会、R406…3町会、R407…3町会、R408…3町会、R409…3町会、R410…3町会、R411…3町会、R412…3町会、R413…3町会、R414…3町会、R415…3町会、R416…3町会、R417…3町会、R418…3町会、R419…3町会、R420…3町会、R421…3町会、R422…3町会、R423…3町会、R424…3町会、R425…3町会、R426…3町会、R427…3町会、R428…3町会、R429…3町会、R430…3町会、R431…3町会、R432…3町会、R433…3町会、R434…3町会、R435…3町会、R436…3町会、R437…3町会、R438…3町会、R439…3町会、R440…3町会、R441…3町会、R442…3町会、R443…3町会、R444…3町会、R445…3町会、R446…3町会、R447…3町会、R448…3町会、R449…3町会、R450…3町会、R451…3町会、R452…3町会、R453…3町会、R454…3町会、R455…3町会、R456…3町会、R457…3町会、R458…3町会、R459…3町会、R460…3町会、R461…3町会、R462…3町会、R463…3町会、R464…3町会、R465…3町会、R466…3町会、R467…3町会、R468…3町会、R469…3町会、R470…3町会、R471…3町会、R472…3町会、R473…3町会、R474…3町会、R475…3町会、R476…3町会、R477…3町会、R478…3町会、R479…3町会、R480…3町会、R481…3町会、R482…3町会、R483…3町会、R484…3町会、R485…3町会、R486…3町会、R487…3町会、R488…3町会、R489…3町会、R490…3町会、R491…3町会、R492…3町会、R493…3町会、R494…3町会、R495…3町会、R496…3町会、R497…3町会、R498…3町会、R499…3町会、R500…3町会、R501…3町会、R502…3町会、R503…3町会、R504…3町会、R505…3町会、R506…3町会、R507…3町会、R508…3町会、R509…3町会、R510…3町会、R511…3町会、R512…3町会、R513…3町会、R514…3町会、R515…3町会、R516…3町会、R517…3町会、R518…3町会、R519…3町会、R520…3町会、R521…3町会、R522…3町会、R523…3町会、R524…3町会、R525…3町会、R526…3町会、R527…3町会、R528…3町会、R529…3町会、R530…3町会、R531…3町会、R532…3町会、R533…3町会、R534…3町会、R535…3町会、R536…3町会、R537…3町会、R538…3町会、R539…3町会、R540…3町会、R541…3町会、R542…3町会、R543…3町会、R544…3町会、R545…3町会、R546…3町会、R547…3町会、R548…3町会、R549…3町会、R550…3町会、R551…3町会、R552…3町会、R553…3町会、R554…3町会、R555…3町会、R556…3町会、R557…3町会、R558…3町会、R559…3町会、R560…3町会、R561…3町会、R562…3町会、R563…3町会、R564…3町会、R565…3町会、R566…3町会、R567…3町会、R568…3町会、R569…3町会、R570…3町会、R571…3町会、R572…3町会、R573…3町会、R574…3町会、R575…3町会、R576…3町会、R577…3町会、R578…3町会、R579…3町会、R580…3町会、R581…3町会、R582…3町会、R583…3町会、R584…3町会、R585…3町会、R586…3町会、R587…3町会、R588…3町会、R589…3町会、R590…3町会、R591…3町会、R592…3町会、R593…3町会、R594…3町会、R595…3町会、R596…3町会、R597…3町会、R598…3町会、R599…3町会、R600…3町会、R601…3町会、R602…3町会、R603…3町会、R604…3町会、R605…3町会、R606…3町会、R607…3町会、R608…3町会、R609…3町会、R610…3町会、R611…3町会、R612…3町会、R613…3町会、R614…3町会、R615…3町会、R616…3町会、R617…3町会、R618…3町会、R619…3町会、R620…3町会、R621…3町会、R622…3町会、R623…3町会、R624…3町会、R625…3町会、R626…3町会、R627…3町会、R628…3町会、R629…3町会、R630…3町会、R631…3町会、R632…3町会、R633…3町会、R634…3町会、R635…3町会、R636…3町会、R637…3町会、R638…3町会、R639…3町会、R640…3町会、R641…3町会、R642…3町会、R643…3町会、R644…3町会、R645…3町会、R646…3町会、R647…3町会、R648…3町会、R649…3町会、R650…3町会、R651…3町会、R652…3町会、R653…3町会、R654…3町会、R655…3町会、R656…3町会、R657…3町会、R658…3町会、R659…3町会、R660…3町会、R661…3町会、R662…3町会、R663…3町会、R664…3町会、R665…3町会、R666…3町会、R667…3町会、R668…3町会、R669…3町会、R670…3町会、R671…3町会、R672…3町会、R673…3町会、R674…3町会、R675…3町会、R676…3町会、R677…3町会、R678…3町会、R679…3町会、R680…3町会、R681…3町会、R682…3町会、R683…3町会、R684…3町会、R685…3町会、R686…3町会、R687…3町会、R688…3町会、R689…3町会、R690…3町会、R691…3町会、R692…3町会、R693…3町会、R694…3町会、R695…3町会、R696…3町会、R697…3町会、R698…3町会、R699…3町会、R700…3町会、R701…3町会、R702…3町会、R703…3町会、R704…3町会、R705…3町会、R706…3町会、R707…3町会、R708…3町会、R709…3町会、R710…3町会、R711…3町会、R712…3町会、R713…3町会、R714…3町会、R715…3町会、R716…3町会、R717…3町会、R718…3町会、R719…3町会、R720…3町会、R721…3町会、R722…3町会、R723…3町会、R724…3町会、R725…3町会、R726…3町会、R727…3町会、R728…3町会、R729…3町会、R730…3町会、R731…3町会、R732…3町会、R733…3町会、R734…3町会、R735…3町会、R736…3町会、R737…3町会、R738…3町会、R739…3町会、R740…3町会、R741…3町会、R742…3町会、R743…3町会、R744…3町会、R745…3町会、R746…3町会、R747…3町会、R748…3町会、R749…3町会、R750…3町会、R751…3町会、R752…3町会、R753…3町会、R754…3町会、R755…3町会、R756…3町会、R757…3町会、R758…3町会、R759…3町会、R760…3町会、R761…3町会、R762…3町会、R763…3町会、R764…3町会、R765…3町会、R766…3町会、R767…3町会、R768…3町会、R769…3町会、R770…3町会、R771…3町会、R772…3町会、R773…3町会、R774…3町会、R775…3町会、R776…3町会、R777…3町会、R778…3町会、R779…3町会、R780…3町会、R781…3町会、R782…3町会、R783…3町会、R784…3町会、R785…3町会、R786…3町会、R787…3町会、R788…3町会、R789…3町会、R790…3町会、R791…3町会、R792…3町会、R793…3町会、R794…3町会、R795…3町会、R796…3町会、R797…3町会、R798…3町会、R799…3町会、R800…3町会、R801…3町会、R802…3町会、R803…3町会、R804…3町会、R805…3町会、R806…3町会、R807…3町会、R808…3町会、R809…3町会、R810…3町会、R811…3町会、R812…3町会、R813…3町会、R814…3町会、R815…3町会、R816…3町会、R817…3町会、R818…3町会、R819…3町会、R820…3町会、R821…3町会、R822…3町会、R823…3町会、R824…3町会、R825…3町会、R826…3町会、R827…3町会、R828…3町会、R829…3町会、R830…3町会、R831…3町会、R832…3町会、R833…3町会、R834…3町会、R835…3町会、R836…3町会、R837…3町会、R838…3町会、R839…3町会、R840…3町会、R841…3町会、R842…3町会、R843…3町会、R844…3町会、R845…3町会、R846…3町会、R847…3町会、R848…3町会、R849…3町会、R850…3町会、R851…3町会、R852…3町会、R853…3町会、R854…3町会、R855…3町会、R856…3町会、R857…3町会、R858…3町会、R859…3町会、R860…3町会、R861…3町会、R862…3町会、R863…3町会、R864…3町会、R865…3町会、R866…3町会、R867…3町会、R868…3町会、R869…3町会、R870…3町会、R871…3町会、R872…3町会、R873…3町会、R874…3町会、R875…3町会、R876…3町会、R877…3町会、R878…3町会、R879…3町会、R880…3町会、R881…3町会、R882…3町会、R883…3町会、R884…3町会、R885…3町会、R886…3町会、R887…3町会、R888…3町会、R889…3町会、R890…3町会、R891…3町会、R892…3町会、R893…3町会、R894…3町会、R895…3町会、R896…3町会、R897…3町会、R898…3町会、R899…3町会、R900…3町会、R901…3町会、R902…3町会、R903…3町会、R904…3町会、R905…3町会、R906…3町会、R907…3町会、R908…3町会、R909…3町会、R910…3町会、R911…3町会、R912…3町会、R913…3町会、R914…3町会、R915…3町会、R916…3町会、R917…3町会、R918…3町会、R919…3町会、R920…3町会、R921…3町会、R922…3町会、R923…3町会、R924…3町会、R925…3町会、R926…3町会、R927…3町会、R928…3町会、R929…3町会、R930…3町会、R931…3町会、R932…3町会、R933…3町会、R934…3町会、R935…3町会、R936…3町会、R937…3町会、R938…3町会、R939…3町会、R940…3町会、R941…3町会、R942…3町会、R943…3町会、R944…3町会、R945…3町会、R946…3町会、R947…3町会、R948…3町会、R949…3町会、R950…3町会、R951…3町会、R952…3町会、R953…3町会、R954…3町会、R955…3町会、R956…3町会、R957…3町会、R958…3町会、R959…3町会、R960…3町会、R961…3町会、R962…3町会、R963…3町会、R964…3町会、R965…3町会、R966…3町会、R967…3町会、R968…3町会、R969…3町会、R970…3町会、R971…3町会、R972…3町会、R973…3町会、R974…3町会、R975…3町会、R976…3町会、R977…3町会、R978…3町会、R979…3町会、R980…3町会、R981…3町会、R982…3町会、R983…3町会、R984…3町会、R985…3町会、R986…3町会、R987…3町会、R988…3町会、R989…3町会、R990…3町会、R991…3町会、R992…3町会、R993…3町会、R994…3町会、R995…3町会、R996…3町会、R997…3町会、R998…3町会、R999…3町会、R1000…3町会、R1001…3町会、R1002…3町会、R1003…3町会、R1004…3町会、R1005…3町会、R1006…3町会、R1007…3町会、R1008…3町会、R1009…3町会、R1010…3町会、R1011…3町会、R1012…3町会、R1013…3町会、R1014…3町会、R1015…3町会、R1016…3町会、R1017…3町会、R1018…3町会、R1019…3町会、R1020…3町会、R1021…3町会、R1022…3町会、R1023…3町会、R1024…3町会、R1025…3町会、R1026…3町会、R1027…3町会、R1028…3町会、R1029…3町会、R1030…3町会、R1031…3町会、R1032…3町会、R1033…3町会、R1034…3町会、R1035…3町会、R1036…3町会、R1037…3町会、R1038…3町会、R1039…3町会、R1040…3町会、R1041…3町会、R1042…3町会、R1043…3町会、R1044…3町会、R1045…3町会、R1046…3町会、R1047…3町会、R1048…3町会、R1049…3町会、R1050…3町会、R1051…3町会、R1052…3町会、R1053…3町会、R1054…3町会、R1055…3町会、R1056…3町会、R1057…3町会、R1058…3町会、R1059…3町会、R1060…3町会、R1061…3町会、R1062…3町会、R1063…3町会、R1064…3町会、R1065…3町会、R1066…3町会、R1067…3町会、R1068…3町会、R1069…3町会、R1070…3町会、R1071…3町会、R1072…3町会、R1073…3町会、R1074…3町会、R1075…3町会、R1076…3町会、R1077…3町会、R1078…3町会、R1079…3町会、R1080…3町会、R1081…3町会、R1082…3町会、R1083…3町会、R1084…3町会、R1085…3町会、R1086…3町会、R1087…3町会、R1088…3町会、R1089…3町会、R1090…3町会、R1091…3町会、R1092…3町会、R1093…3町会、R1094…3町

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
～第41回松本市公民館研究集会・令和7年度松本市地域づくり市民活動研究集会～
分科会運営委員会名簿

分科会	世話人	市民幹事	氏名	肩書等	備考
1			新保 俊尚	松原モールぶろじえくと 代表	
			下村 純	松原モールぶろじえくと	
			小口 麻左美	本郷地区 地区生活支援員	
			西澤 久典	松本市社会福祉協議会	
			勝家 隆	地域づくり支援課 地域支援担当	
			百瀬 康弘	寿台公民館 公民館長	
	○		中條 陽	島内公民館 公民館主事	リーダー
	○		小松 一成	波田公民館 公民館主事	副リーダー
	○		宮下 慶祐	本郷公民館 公民館主事	
	○		林 祥平	四賀公民館 公民館主事	
	○		村田 美鈴	城北公民館 公民館主事	
2			阿部 優磨	松原地区公民館 公民館主事	
			尻無浜 博幸	松本大学総合経営学部 教授	
			上条 貴子	新村地区 地区生活支援員	
			松崎 希佳子	島立地区 地区生活支援員	
			丸山 花代子	福祉政策課	
			西村 宏美	福祉政策課	
			降旗 清人	第一地区公民館 公民館長	
	○		瀧川 航平	田川公民館 公民館主事	リーダー
	○		安藤 ひかり	梓川公民館 公民館主事	副リーダー
	○		高波 佐恵	第三地区公民館 公民館主事	
	○		市橋 佑磨	里山辺公民館 公民館主事	
3		○	増澤 賢	新村公民館 公民館主事	
			丸山 直紀	島立公民館 公民館主事	
			大石 健爾	松南地区公民館 公民館主事	
		○	降旗 都子	第三地区まちづくり協議会 副会長	
	○		羽田 大樹	神林公民館 公民館主事	リーダー
	○		奥原 直弥	安原地区公民館 公民館主事	副リーダー
	○		奥原 裕樹	安曇公民館 公民館主事	
4			丸山 稜雅	寿公民館 公民館主事	
			飯ヶ濱 功	庄内地区公民館 公民館主事	
			赤羽 絵美	今井公民館 公民館主事	
		○	中田 安子	長野県生涯学習推進センター 公民館支援専門委員	
			石川 裕之	合同会社SumSum 代表	
			上條 俊道	和田地区健康麻雀クラブ	
			高砂 美織	塩尻市社会福祉協議会 ふれあいセンター洗馬 相談員	
			久保田 文章	寿公民館 公民館長	
	○		朝倉 光貴	第一地区公民館 公民館主事	
	○		北澤 圭祐	和田公民館 公民館主事	副リーダー
	○		小林 泰	大手公民館 公民館主事	
5			田中 瑞恵	鎌田地区公民館 公民館主事	リーダー
			降旗 一博	東部公民館 公民館主事	
			保科 黄	内田公民館 公民館主事	
			板花 賢治	今井地区地域づくりセンター センター長	
			長田 由紀子	松原地区地域づくりセンター センター長	
			海沼 博	奈川地区地域づくりセンター センター長補佐	
			三木 惣介	奈川地区地域づくりセンター 地域おこし協力隊	
			胡桃 亜矢子	今井地区 地区生活支援員	
			花村 憲二	四賀公民館 公民館長	
	○		矢口 竜也	笹賀公民館 公民館主事	リーダー
	○		今福 良夢	生涯学習課・中央公民館 社会教育推進担当	副リーダー
			宇治 樹	中山公民館 公民館主事	
			田中 貢治	岡田公民館 公民館主事	
			武本 健太郎	白板地区公民館 公民館主事	
			奥原 美鈴	奈川公民館 公民館主事	

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
－資 料 集－

編 集：「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会」
発 行：「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会」
発行日：令和8年7月1日